

松山町埋蔵文化財発掘調査（7）

きょう ノ みね 遺 跡
京 ノ 峯 遺 跡

1993年3月

鹿児島県曾於郡松山町教育委員会

序 文

京ノ峯遺跡の所在する泰野地区ではこれまでも縄文時代の住居跡が発見された前谷遺跡、前谷B遺跡などの調査が行われています。

平成2年度に京ノ峯遺跡の確認調査を行ったところ、遺跡の存在が確認されたため、今後の開発の円滑化と遺跡の保護のため、平成3年度に全面調査を実施することになりました。京ノ峯遺跡は前谷遺跡に隣接しているために発掘調査前から何らかの成果が得られるものと期待していました。調査は半ばを過ぎたところで、円形周溝墓と呼ばれる関西方面で見られる弥生時代のお墓が発見されました。その後同様の遺構がぞくぞくと発見され、この遺跡が弥生時代からの墓域であったことがわかりました。今まで松山町で発見された古代の遺構はすべて住居跡で、墓制に関する遺構の発見は京ノ峯遺跡が初めてです。その意味でこの遺跡は本町の歴史を知るうえで貴重な文化財であるとの認識を深め、町指定文化財に指定しました。また、町長部局と協議のもと14基の円形周溝墓と2基の方形周溝墓を保存し、遺跡公園として後世に残し伝えてゆくとともに、町民の学習の場として活用することになりました。

なかなか遺跡を保存することが難しい時代に、文化財の大切さを理解して保存に協力していただいた町長部局の方々に感謝するとともに、本町が文化財愛護思想に恵まれた環境にあるということを実感しました。

最後に、精力的に御指導頂いた県教育委員会文化課の先生方、遠い所から発掘調査の応援に来て下さった方々、また直接発掘作業に従事していただいた作業員の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成5年3月

松山町教育委員会教育長 加世田 實

例 言

1. 本報告書は、平成2年度、3年度に実施した京ノ峯地区造成計画に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は町単独事業として、松山町教育委員会が実施した。
3. 発掘調査の実施及び実測は、新東晃一、中村和美、本田道輝、下山覚、矢部喜多夫、桑畑光博、渡部徹也、上田義明が行った。
4. 発掘調査の現場写真・遺物写真は上田義明が撮影した。
5. 本書に用いたレベル数値は、すべて海拔絶対高である。
6. 遺物の水洗・注記・拓本等の整理作業は松山町歴史民俗資料館で行った。
7. 遺構・遺物の実測・トレースは上田義明が行った。
8. 傾きが不明の土器については、基準線を引いていない。
9. 本書に記録した遺物番号はすべて続き番号とし、本文及び挿図・図版の番号は一致する。
10. 発掘調査の際、遺構を保存する予定の箇所はベルトを完掘しなかったため、図面上にスクリーントーンによってベルトを図示している。

本文目次

序 文

例 言

第1章 調査の経過	1
第1節 調査に至るまでの経過	1
第2節 調査の組織	1
第3節 調査の経過	2
第2章 遺跡の位置及び環境	5
第3章 層 位	8
第4章 発掘調査	9
第1節 調査の概要	9
第2節 弥生時代の遺構	10
第3節 古墳時代の遺構	34
第4節 中世の遺構	40
第5節 縄文時代の遺物	41
第6節 弥生時代の遺物	52
第7節 中世の遺物	60
第8節 土製品	60
第5章 まとめ	65

挿 図 目 次

第1図	松山町遺跡分布図	5	第29図	3号祭祀土壌検出状況	33
第2図	京ノ峯遺跡の地形	6	第30図	1号地下式横穴墓検出状況	34
第3図	遺構配置図	7	第31図	2号地下式横穴墓検出状況	35
第4図	標準土層	8	第32図	3号地下式横穴墓検出状況	36
第5図	1号円形周溝墓検出状況	10	第33図	4号地下式横穴墓検出状況	36
第6図	2号円形周溝墓検出状況	11	第34図	5号地下式横穴墓検出状況	37
第7図	3号円形周溝墓検出状況	12	第35図	6号地下式横穴墓検出状況	38
第8図	4号円形周溝墓検出状況	13	第36図	7号地下式横穴墓検出状況	38
第9図	5号円形周溝墓検出状況	14	第37図	8号地下式横穴墓検出状況	39
第10図	6号円形周溝墓検出状況	15	第38図	出土遺物(1)	41
第11図	7号円形周溝墓検出状況	16	第39図	出土遺物(2)	43
第12図	8号円形周溝墓検出状況	17	第40図	出土遺物(3)	44
第13図	9号円形周溝墓検出状況	18	第41図	出土遺物(4)	45
第14図	10号円形周溝墓検出状況	19	第42図	出土遺物(5)	46
第15図	11号円形周溝墓検出状況	20	第43図	出土遺物(6)	47
第16図	12号円形周溝墓検出状況	21	第44図	出土遺物(7)	48
第17図	13号円形周溝・1号・2号方形周溝墓検出状況	22	第45図	出土遺物(8)	49
第18図	14号円形周溝墓検出状況	23	第46図	出土遺物(9)	50
第19図	15号円形周溝墓検出状況	24	第47図	出土遺物(10)	51
第20図	16号円形周溝墓検出状況	25	第48図	出土遺物(11)	52
第21図	17号円形周溝墓検出状況	25	第49図	出土遺物(12)	53
第22図	18号円形周溝墓検出状況	26	第50図	出土遺物(13)	54
第23図	19号円形周溝墓検出状況	27	第51図	出土遺物(14)	55
第24図	20号円形周溝墓検出状況	28	第52図	出土遺物(15)	56
第25図	3号円形周溝墓検出状況	29	第53図	出土遺物(16)	57
第26図	4号円形周溝墓検出状況	30	第54図	出土遺物(17)	58
第27図	1号祭祀土壌検出状況	31	第55図	出土遺物(18)	58
第28図	2号祭祀土壌検出状況	32	第56図	出土遺物(19)	59

図 版 目 次

図版1	京ノ峯遺跡遠景	67	図版8	1号地下式横穴墓検出状況	70
図版2	京ノ峯遺跡全景	67	図版9	1号地下式横穴墓検出状況	71
図版3	3号円形周溝墓検出状況	68	図版10	10号円形周溝墓検出状況	71
図版4	円形周溝墓検出状況	68	図版11	出土遺物(1)	72
図版5	13号円形周溝・1号・2号方形周溝墓検出状況	69	図版12	出土遺物(2)	73
図版6	4号円形周溝墓検出状況	69	図版13	出土遺物(3)	74
図版7	1号祭祀土壌内出土遺物検出状況	70	図版13	出土遺物(3)	75

表 目 次

第1表	土器観察表(1)	61
第2表	土器観察表(2)	62
第3表	土器観察表(3)	63
第4表	土器観察表(4)	64

第1章 調査の経過

第1節 調査に至るまでの経過

松山町総務課は、泰野校区京ノ峯地区の用地買収を行い、同地区に住宅団地、多目的広場等の建設を計画し、実施計画区域における埋蔵文化財の有無について、松山町教育委員会に照会した。

これをうけて町教育委員会は平成元年に分布調査を実施したところ、実施予定区内に京ノ峯遺跡の存在していることが確認された。

この結果、町総務課は町教育委員会と協議行うとともに、鹿児島県教育委員会（文化課）の指導を受け、事業の推進と埋蔵文化財の保護と調整を図るため、平成2年度に町単独事業として町教育委員会が確認調査を実施した。調査期間は平成2年6月5日から同年12月7日までであった。

確認調査の結果を踏まえて、町総務課と町教育委員会は再度協議を行ったところ、現状のまま遺跡を保存することは施工上支障が生じるため、遺跡区内の全面発掘調査を実施し記録保存を図ることにした。

発掘調査は、鹿児島県教育委員会に調査の指導・助言を受けながら町教育委員会が行った。発掘調査は平成3年4月15日から平成4年3月22日まで実施した。その結果、遺跡の中心部標高約170mの地点を中心に20基の円形周溝墓と4基の方形周溝墓が検出された。そのため、町総務課と町教育委員会は再度協議を行ない、保存状態の良い遺構14基を現状保存し、公園化することとなった。

発掘調査の整理及び報告書作成は平成4年度に松山町歴史民俗資料館において行った。

第2節 調査の組織

調査主体者	松山町教育委員会				
調査責任者	松山町教育委員会	教 育 長	加世田	實	
調査事務担当	〃	管 理 課 長	佐々木	則 安	
	〃	主 査	国 師	シズ子	
	〃	主 事	上 原	登	
	〃	社会教育課長	牧	悦 朗	
	〃	主 事	津 曲	兼 隆	
	〃	〃	上 田	義 明	
	〃	〃	大 迫	秀 治	
	〃	社会教育指導員	立 山	春 雄	
	〃	庶 務 係	中 西	みよ子	
調 査 担 当	〃	〃	上 田	義 明	

なお発掘調査中、鹿児島県文化財保護審議委員 河口貞徳氏・西南学院大学教授 高倉彰氏・鹿児島大学法文学部教授 上村俊雄氏・同助教授 森脇広氏・同助手 本田道輝氏・九州大学文学部助手 西健一郎氏・鹿児島県埋蔵文化財センター主査 新東晃一氏・同中村耕治氏・同長野真一氏・同前迫亮氏の指導を受けた。また、鹿児島市教育委員会社会教育課 出口浩氏・指宿市教育委員会社会教育課 下山覚氏・同知花氏・同渡部徹也氏・都城市文化課 矢部喜多夫氏・同桑畑光博氏・鹿児島大学埋文調査室助手 黒木綾氏・鹿児島大学法文学部考古学研究室専攻生一同の方々の御協力を戴いた。

第3節 調査の経過

調査の経過については日誌抄により略述する。

平成2年度発掘確認調査日誌

期 間	
6月5日 ～ 6月8日	調査の開始。諸機材の搬入。1, 2, 3トレンチの設定。表土及び第1層, 第2層の掘り下げ。1T, 2Tより遺物確認, 更に掘り下げ。4T設定。4T掘り下げ。
6月11日 ～ 6月15日	1T, 2T, 3T調査終了。5T, 6T, 7T設定。4T2層より遺物確認, 更に掘り下げ。5T, 6T, 7T掘り下げ。4T調査終了。8T, 9T設定, 掘り下げ。
6月18日 ～ 6月23日	10T, 11T, 12T, 13T設定, 掘り下げ。5T, 6T, 7T調査終了。8T, 9T, 10T2層より遺物確認。全トレンチ調査終了。
6月25日 ～ 7月1日	1T, 2T, 3T周辺を中心に, 重機により溝状に拡張を行い遺跡分布範囲を確認する。第2層, 3層, 5層より縄文晩期, 後期, 中期の遺物出土。一時調査を中断し, 水ノ谷遺跡に移動。
10月22日 ～ 10月26日	調査再開。4Tから8T, 9T, 10Tの方向に溝状に重機により拡張を行う。8T, 9T, 10T付近で溝状の落ちこみを複数確認するが, 埋土より遺物は出土しなかった。
10月29日 ～ 11月2日	8T, 9T, 10Tの調査続行。9T付近の溝状の落ちこみより, ~弥生時代の壺の完形品出土。同部に穿孔を伴うため, 祭祀に使用されたと思われる。近くに祭祀遺構の存在が伺われる。
11月5日 ～ 11月15日	10T, 11T, 12T周辺を中心に, 重機により溝状に拡張を行う。第2層より弥生時代中期の遺物が出土。遺構は確認できなかった。一部5層まで掘り上げたが, 遺物は出土しなかった。

期 間	
11月19日 ～ 11月30日	10T, 11T, 12T周辺の調査続行。各トレンチの地形測量を行う。更に14T, 15Tを設定。表土掘り下げ。総務課と調査後の処置について協議。
12月3日 ～ 12月7日	14T, 15T6層まで掘り下げ。出土遺物なし。全トレンチ調査終了。機材搬出。

平成3年度発掘調査日誌

期 間	
4 月	15日より調査開始。調査機材の搬入。プレハブ設置。1T, 2T, 3T付近の竹を伐採、搬出。同時に重機により拡張。排土を北側斜面に搬出。グリッド設定。
5 月	1T, 2T, 3T付近2層上面まで拡張終了。2層掘り下げ、縄文時代晩期の土器片多数出土。50分の1で実測を行う。戦後の物と思われる集石確認。20分の1で平面図のみ実測。
6 月	4層面まで堀上げる。3層及び4層上部より縄文時代後期、中期の土器片多数出土。4T付近の竹を伐採、搬出、焼却。重機により2層上面まで拡張。1T, 2T, 3T付近調査終了。
7 月	4T付近2層上面まで拡張終了。グリッド設定。2層掘り下げ。縄文時代晩期の石器、土器片多数出土。竹の伐採、焼却。北西方向に暫時重機により2層上面まで拡張。
9 月	2層より弥生時代の塗の土器片出土。8T周辺より中央に土廣を伴う円形の溝状のプランが検出される。鹿児島大学法文学部教授上村俊雄氏来跡。円形の溝状遺構を円形周溝墓と判明。
10 月	8T周辺で14基の円形周溝墓を検出、更に方形周溝墓も1基確認。3号円形周溝墓の周溝より、弥生時代中期と思われる高杯の口縁部が出土するが、時期を特定することはできない。全ての円形周溝墓の周溝埋土より、火山灰と思われるかたい土層を発見。しかし1号方形周溝墓の周溝埋土から、火山灰層は確認できない。13号円形周溝墓のとなりの土廣より胴部に穿孔を伴った壺と胴部から底部にかけてほぼ円形の壺出土。祭祀遺構の可能性が高い。1号土廣と設定。1号土廣の埋土より火山灰検出。周溝墓の火山灰と同一の可能性が高い。 21日埋文センター主任新東晃一氏来跡、28日福岡大学教授高倉洋彰氏、鹿児島県考古学会会長河口貞徳氏、鹿児島大学法文学部教授上村俊雄氏、埋文センター主任新東晃一氏来跡。

期 間	
1 1 月	<p>13号円形周溝墓と1号方形周溝墓の切りあいを確認，主体部に平行，及び直角にベルトを残し周溝と主体部を堀上げる。表土からのベルトの層位断面図をとり，ベルトを取り除く。1号方形周溝墓と切りあって方形のプランを確認。2号方形周溝墓と命名。2号方形周溝墓周溝埋土からも，火山灰層は確認できない。1号，2号の切りあい関係は確認できなかった。</p> <p>1日鹿児島大学法文学部助教授森脇広氏来跡。8日，20日，23日，28日新東氏来跡。</p>
1 2 月	<p>調査区域西側のベルトを取り除いたあとから，さらに円形周溝墓7基検出。7号円形周溝墓主体部の埋土を掘りあげたところ，短軸両端に溝状の落ちこみを確認。短軸両端に板を伴っていたと思われる。各周溝墓を20分の1で実測。</p> <p>3日新東氏来跡。16日新東氏，中村和美氏来跡。25日新東氏，大久保浩二氏来跡。</p>
平成4年 1 月	<p>調査区域西側を横断する溝状遺構の埋土を掘りあげる（2号溝）。平成4年出土遺物はなかった。火山灰層を含まないため，周溝墓より新しいと思われる。2号円形と16号円形の間から埋土に火山灰層を伴う方形周溝墓を検出。4号方形周溝墓と命名。21日新東氏来跡。</p>
2 月	<p>円形周溝墓主体部と周溝の断面図実測と同時に土壤サンプル採集。調査区域西側に凝灰石を蓋石にした地下式横穴墓検出。その他に蓋石を伴わない地下式横穴墓も検出。</p>
3 月	<p>2号溝より西側の19号円形周溝墓を写真撮影のため，周溝床面を清掃したところ凝灰石を蓋石にした地下式横穴墓検出。切りあい関係は確認できなかった。また3号方形周溝墓内にも凝灰石を蓋石にした地下式横穴墓検出。</p> <p>円形周溝墓14基現状保存が決定されたため，保存区域にシラスをつかって埋め戻し，さらに黒土で50厚さまで盛り土を行う。</p> <p>全作業終了，機材搬出。</p>

第2章 遺跡の位置及び環境

京ノ峯遺跡のある松山町は、大隅半島曾於郡のほぼ中央に位置し、東西に細長く東西12、南北4である。東は志布志町、西は末吉町・大隅町、南は有明町・志布志町、北は末吉町に境している。

経緯度は東経13度から13度7分、北緯31度37分で、町総面積は49.69であり、山岳は末吉町に境する宮田山(520m)、有明町に境する霧岳(408m)が主な丘陵で、河川は大隅町岩川から新橋河床を経て、町の西端を流れる菱田川上流と、尾野見排水東端と大統東端を流れる安楽川の支流が主な河川である。

京ノ峯遺跡は松山町大字泰野小字京ノ峯にあり、町中央公民館、歴史民俗資料館の東約700mのところに位置している。泰野西側をほぼ全域見渡せる独立した約165m~170mの丘陵の西端に位置する。京ノ峯遺跡の南東方向に隣接して縄文時代中期の住居跡が発見された前谷遺跡があり、南約500mのところに弥生時代の住居跡が発見された前谷B遺跡がある。



第1図 松山町遺跡分布図

第3章 層位

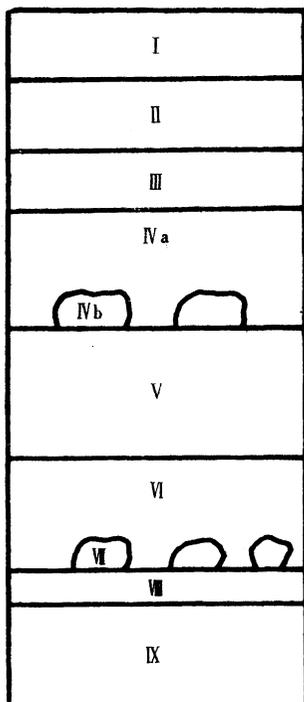
本遺跡の標準的な層位は、場所によって削平などによる欠落があるが、おおよそ次のようになっている。

- I層 : 表土・耕作土。概ね20cmの厚さで堆積している。部分的には大正年間の桜島の噴火によるシラスもみられる。
- II層 : 黒褐色軟質土。概ね30から40cmの厚さで堆積している。歴史時代、弥生時代、縄文時代晩期の遺物を包含する。
- III層 : 暗褐色火山灰土層。円形周溝墓の周溝の埋土にのみ残存する。
- IV a層 : 黄褐色土。御池ボラ層あるいは3b層であるアカホヤの腐食土である。締まりがあって硬い。縄文時代晩期の遺物を包含する。
- IV b層 : 橙褐色軽石。およそ6千3百年前のアカホヤ層に比定される。ブロック状にしか残っていない。
- V層 : 明茶褐色火山灰層でパミスを含む。縄文時代早期の遺物包含層である。
- VI層 : 暗茶褐色火山灰層で、粘質があり、パミスを少量含む。
- VII層 : 黄褐色火山灰土で、桜島起源の“サツマ”と呼ばれるものである。

VIII層 : 黒褐色を呈する粘質の強い火山灰土で“チョコ層”とも呼ばれる。

IX層 : シラス。入戸火砕流とも呼ばれ、始良カルデラを起源に求められる噴出物である。

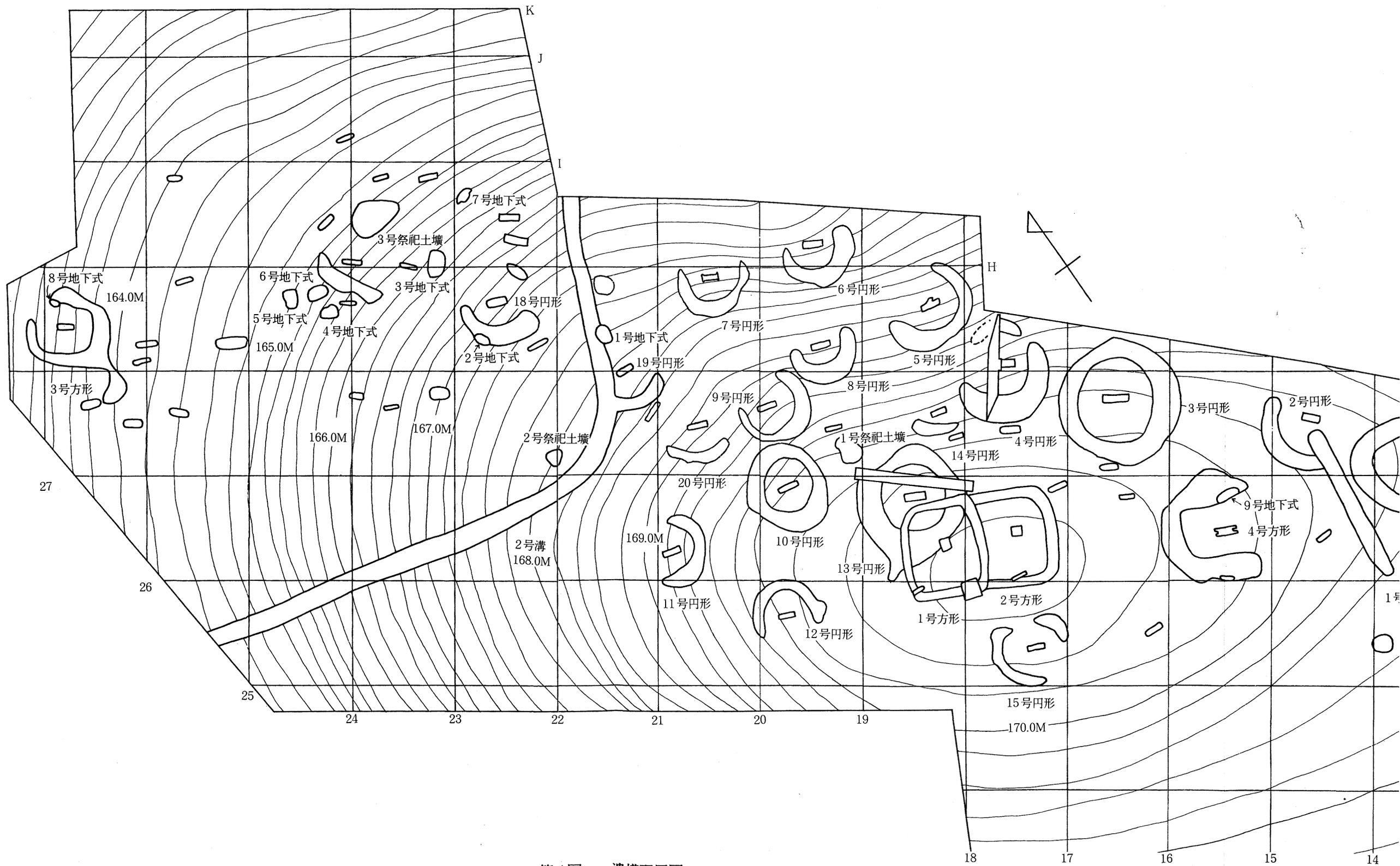
上記のように、遺物包含層は3層あり、第II層は弥生時代中期の山ノ口式土器、縄文時代晩期の入佐式土器、後期の市来式土器、大平式土器、中期の春日式土器などが見られるが、それぞれおおまかな分布範囲が確認される。第III層は円形周溝墓と3号、4号方形周溝墓の周溝の埋土にのみに概ね10cmの厚さで堆積しているが、明確な時期は不明である。第V層の遺物包含層は、縄文時代早期に当り、吉田式土器や前平式土器など少数ではあるが出土している。



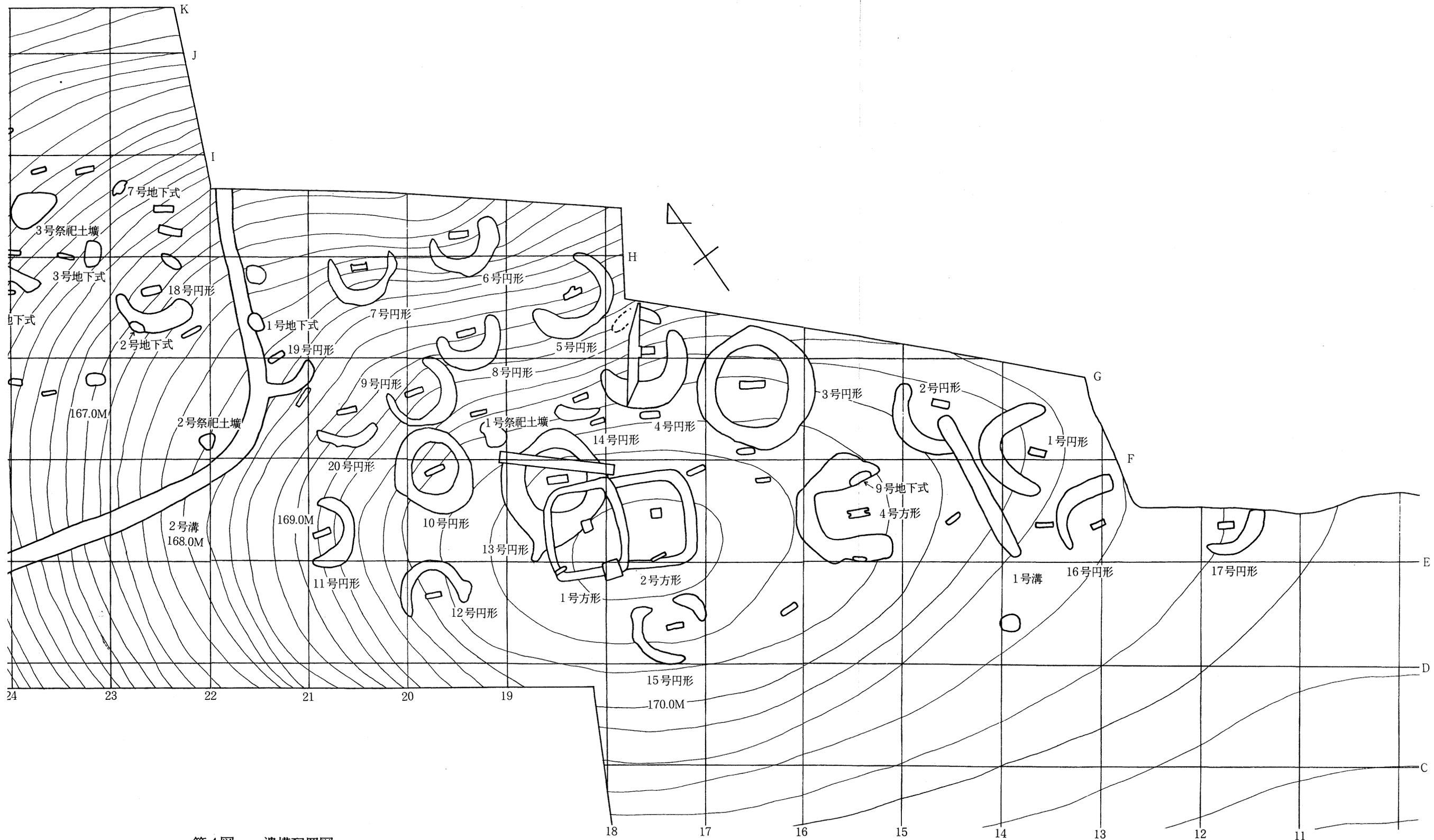
第2図 標準土層



第3図 京ノ峯遺跡の地形



第4図 遺構配置図



第4图 遺構配置图

第4章 発掘調査

第1節 調査の概要

今後の事業計画や発掘調査のために測量した業者の20m間隔の測量杭を基準に、10m×10mのグリッドを設定した。調査区域の南東端から始まって、西側へA・B・C…、北側へ1・2・3…とし、G-7区、K-15区などと表示した。この工区の事業計画が確定していないため、確認調査において遺物包含層が確認された所はすべて全面調査を実施し、さらにその範囲より約10m拡張して調査を行った。発掘調査の総面積は15,000㎡である

調査の結果、遺跡として確認したほぼ全範囲から遺物が認められた。調査区域の東側に縄文時代早期から晩期までの遺物が出土し、遺跡のほぼ中央部であるGからIにかけて、縄文時代晩期の遺物が出土し、遺跡の中央部から西側端の範囲に弥生時代中期の遺物が出土した。さらに中央部より中世の土師器や古石塔等も出土している。また、遺物は認められないが、古墳時代の地下式横穴墓も遺跡の西側に確認されている。以下時代を分けて概略を説明する。

縄文時代早期・中期・後期

早期・中期・後期の遺物はすべて調査区域東端に出土している。早期の遺物はB-2区、C-2区で小片が数点出土している。中期の遺物はA-2区を中心に多数出土しているが、春日式土器がほとんどで、胎土に滑石を伴う土器片が1点確認されている。後期は市来式土器が数点出土している。石器は石鏃、石皿、磨石、石斧等が出土した。

縄文時代晩期

遺跡の東端から中央部にかけて遺物が出土する。特に集中する区域はF-3区、G-3区の範囲である。土器は深鉢形と研磨された浅鉢形土器がみられる。石器は石鏃、石皿、磨石、石斧、石錘等が出土した。

弥生時代中期

遺跡の中央部から西端にかけて遺物が出土する。遺物はほとんどが壺形土器で、穿孔を伴ったり、朱塗のものも見られる。甕形土器は2点出土している。遺構は標高170mのM-4区、N-5区周辺を中心に円形周溝墓20基、方形周溝墓2基、祭祀土壇3基、土壇が多数検出された。ほとんどの周溝墓は斜面のため、残存状況が悪く明確ではないが、完全に陸橋部を持たない周溝墓も2、3基認められる。どの周溝墓も周溝の埋土に火山灰が堆積している。

古墳時代

遺物は出土していないが、遺跡の西側H-25区を中心に地下式横穴墓が9基発見された。いずれも人骨は残ってはいなかったが、一部凝灰岩を蓋石にしたものが見られた。

中世

遺跡のほぼ中央部に、土師器や古石塔が出土している。13号円形周溝墓を切り合っほぼ正方形の1号、2号方形周溝墓が発見された。周溝埋土には火山灰は認められず、主体部の形もほぼ正方形であり、他の周溝墓とは明らかに異なる。

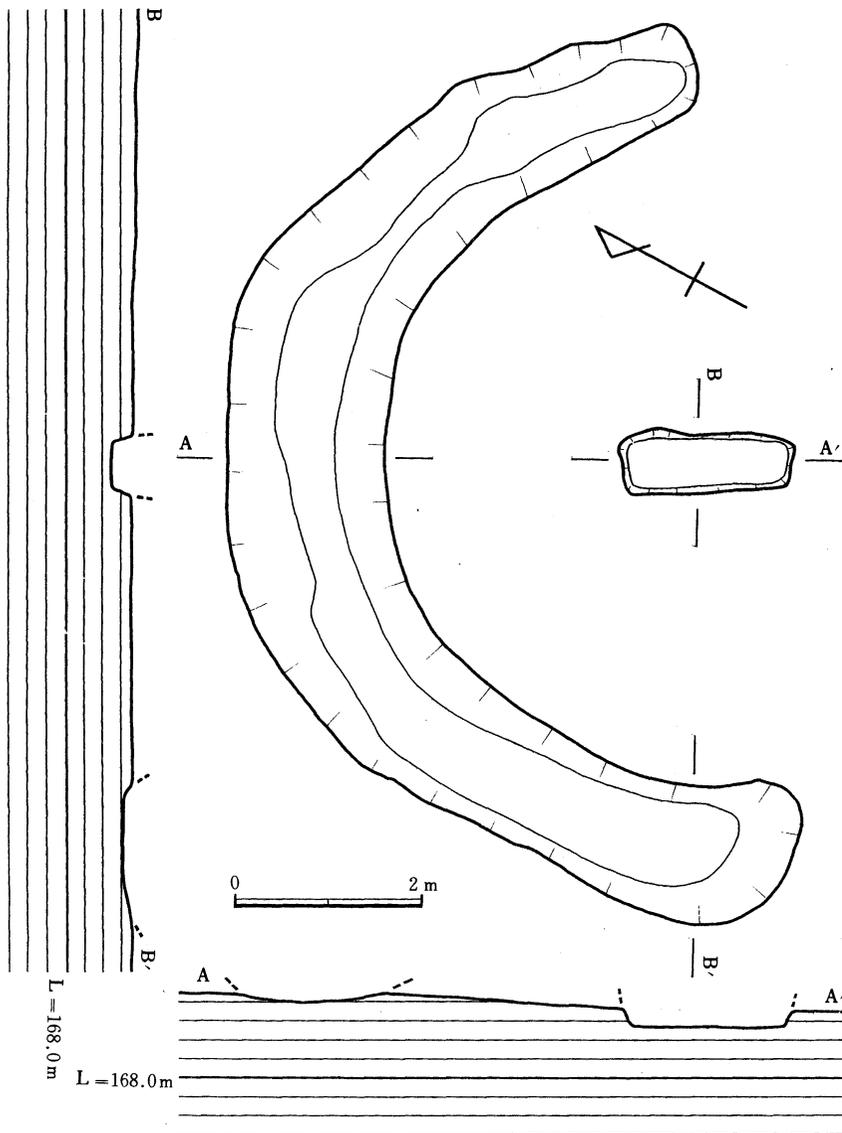
第2節 弥生時代の遺構

遺跡の中央部から西側にかけて、標高差の著しい区域に20基の円形周溝墓と2基の方形周溝墓が検出された。更に、3基の土壌が発見された。円形周溝墓と方形周溝墓には完全な共伴遺物は確認されなかった。しかしこの時期の遺構には共通して埋土に火山灰層が認められる。

1号円形周溝墓（第5図参照）

位置：G-14区，G-15区から検出され，標高は約169.60mである。

平面形：基本的には約半径4mの円形である。表土を重機を使って剥ぎ取ったあと第3層面



まで、掘り下げて検出したが、残りが悪く周溝埋土断面図は書けない状態であった。周溝が半分確認できないが、陸橋部が存在したためか残りが悪いためか不明である。

周溝：深さは5cm程度しかない。

埋土表面に他の周溝墓の周溝に埋土火山灰の下部に見られる硬く締まった土を確認できる。遺物は出土していない。

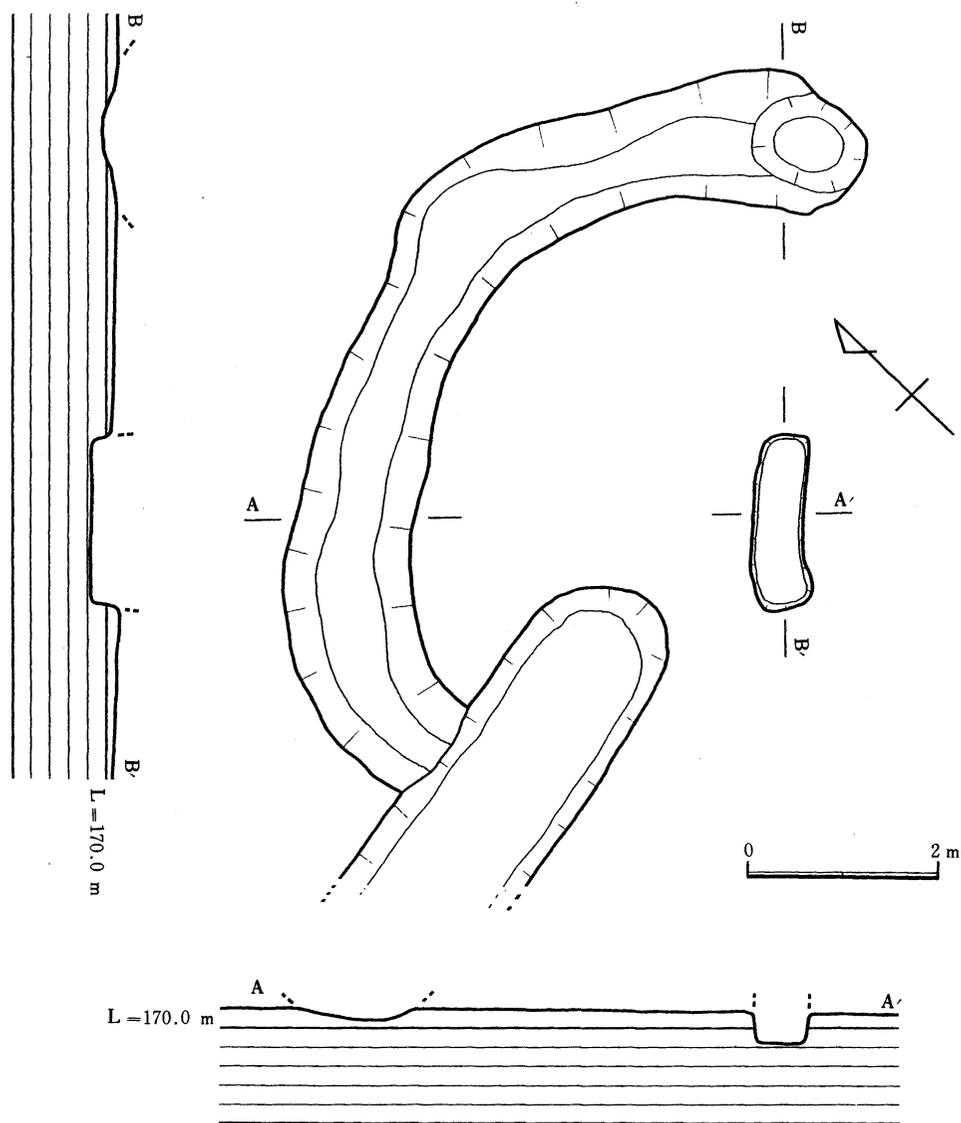
第5図 1号円形周溝墓検出状況

主体部：1m70cm × 50cm の方形で長軸は南東に向く。深さは20cm程度である。壁面に板や石を使った跡は認められない。埋土にアカホヤのブロックを含む。人骨その他の出土遺物はなかった。

2号円形周溝墓（第6図参照）

位置：2号円形周溝墓は1号円形周溝墓の北西約2m，G-16区に位置し，標高は約170.00mである。

平面形：基本的には半径約5mの円形であるが，遺構全体の残りが悪く，周溝が半分しか確認できない。さらに周溝端が南北にのびる1号溝に切られており，陸橋部が存在したか断定はできない。



第6図 2号円形周溝墓検出状況

周溝：深さは5cm程度しかなかったため、周溝埋土断面図は書けない状態であった。しかし埋土表面に他の周溝墓の周溝に埋土火山灰の下部に見られる硬く締まった土を確認できる。遺物は出土していない。

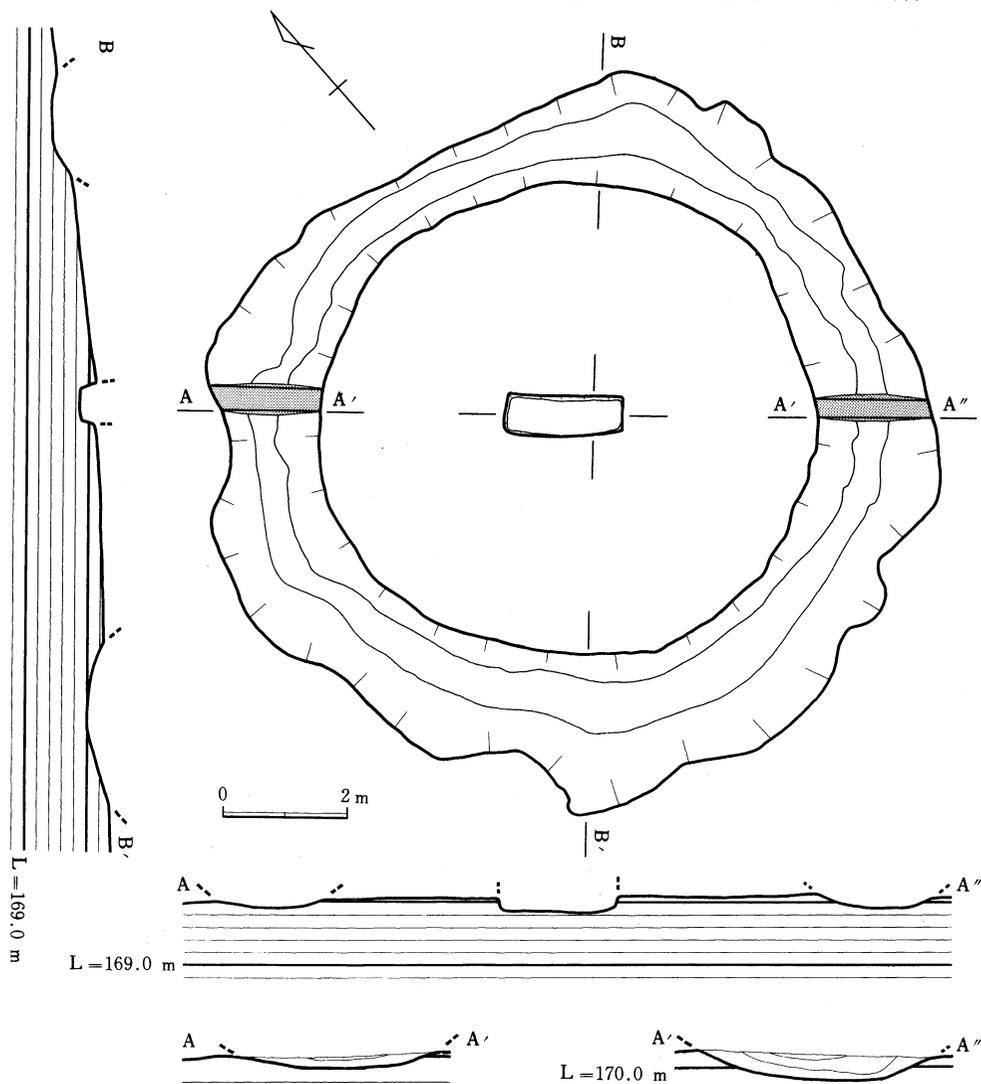
主体部：180cm × 50cm の方形で長軸は南東に向く。深さは30cm程度である。壁面に板や石を使った跡は認められない。埋土にアカホヤのブロックを含む。人骨その他の出土遺物はなかった。

3号円形周溝墓（第7図参照）

位置：G-17区から検出され、北側に若干傾斜する地形である。標高は約170.00mである。

平面形：半径4mの円形である。第3層面で検出したが、全体的に残りはよい。周溝が完全な円を描き陸橋部は認められない。

周溝：深いところで30cm程度である。周溝埋土は3層に分かれ、上層は2層と同様の黒褐色



第7図 3号円形周溝墓検出状況

を呈し、中層は火山灰層で、下層が暗褐色の土壌である。若干北側に傾斜する地形のため、北側が浅くなっている。周溝埋土より瀬戸内系の高坏口縁部が出土している。

主体部：180cm×40cmの方形で長軸は東西に向く。周溝の残りが良い割には、主体部の深さは20cm程度しかなく、ちぐはぐである。遺物は出土していない。人骨その他の出土遺物はなかった。

4号円形周溝墓（第8図参照）

位置：G-18区、H-18区から検出され、3号円形周溝墓の北北西隣に位置し、北側に傾斜する地形である。標高は約170.00mである。

平面形：基本的には半径約3mの円形である。遺構中央部に表面土からのベルトを残した。ベルトの西側は掘りすぎのため、周溝が欠損している。陸橋部が存在するかどうか断定はできない。表土からのベルトを検討したが、墳丘は認められなかった。

周溝：深いところで50cm程度であるが、傾斜がきついため、北側に行くとも確認できなかった。埋土に火山灰層が含まれる。遺物は出土していない。

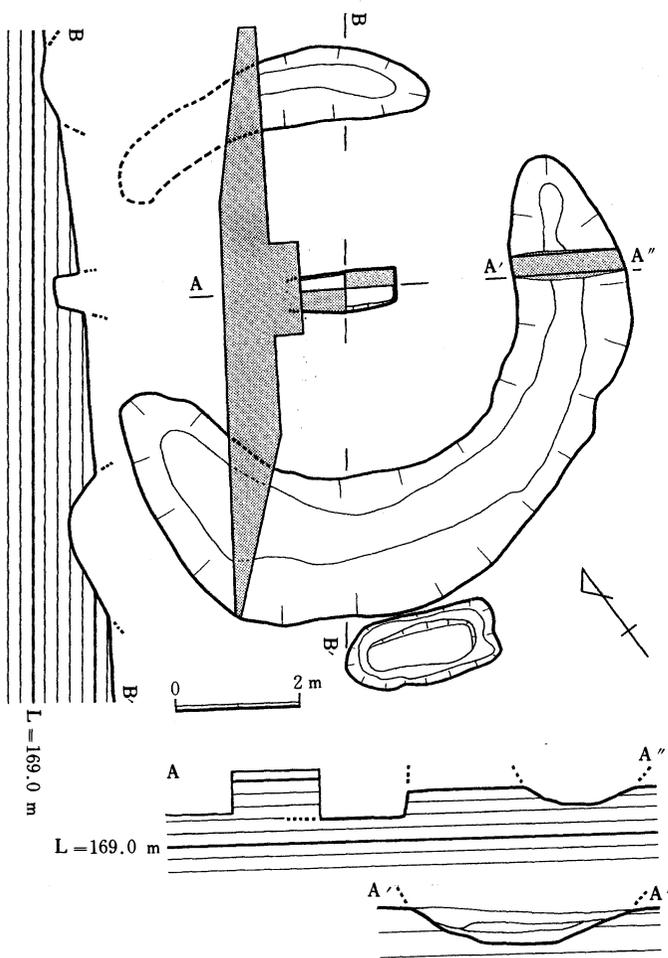
主体部：横に30cmの方形で長軸は東西に向く。主体部の深さは平均40cm程度である。遺構保存のため、表土からのベルトはそのまま保存した。よって主体部の全体像は確認できなかった。人骨その他の出土遺物はなかった。

5号円形周溝墓（第9図参照）

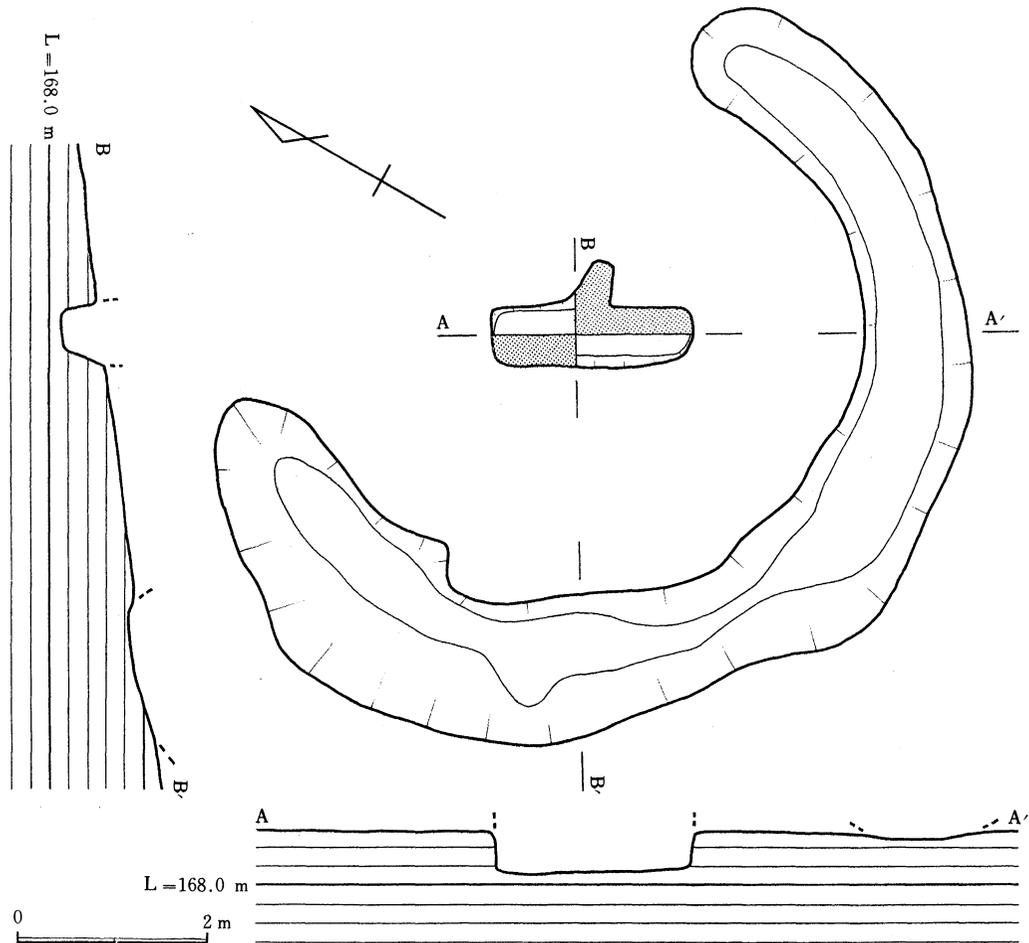
位置：H-19区から検出され、4号円形周溝墓の北西に位置し、北側に著しく傾斜する地形である。標高は約168.50mである。

平面形：基本的には半径約3mの円形である。全体的に残りが悪く、陸橋部が存在するかどうか断定はできない。

周溝：残りが悪く、深いところで5cm程度しかない。傾斜がきついため、遺構北側で周溝がなくなっている。周溝埋土断面図は書けない状態であ



第8図 4号円形周溝墓検出状況



第9図 5号円形周溝墓検出状況

ったが、埋土表面に他の周溝墓の周溝に埋土火山灰の下部に見られる硬く締まった土を確認できる。遺物は出土していない。

主体部：210cm×60cmの方形で長軸は南西に向く。主体部の深さは平均40cm程度である。人骨その他の出土遺物はなかった。

6号円形周溝墓（第10図参照）

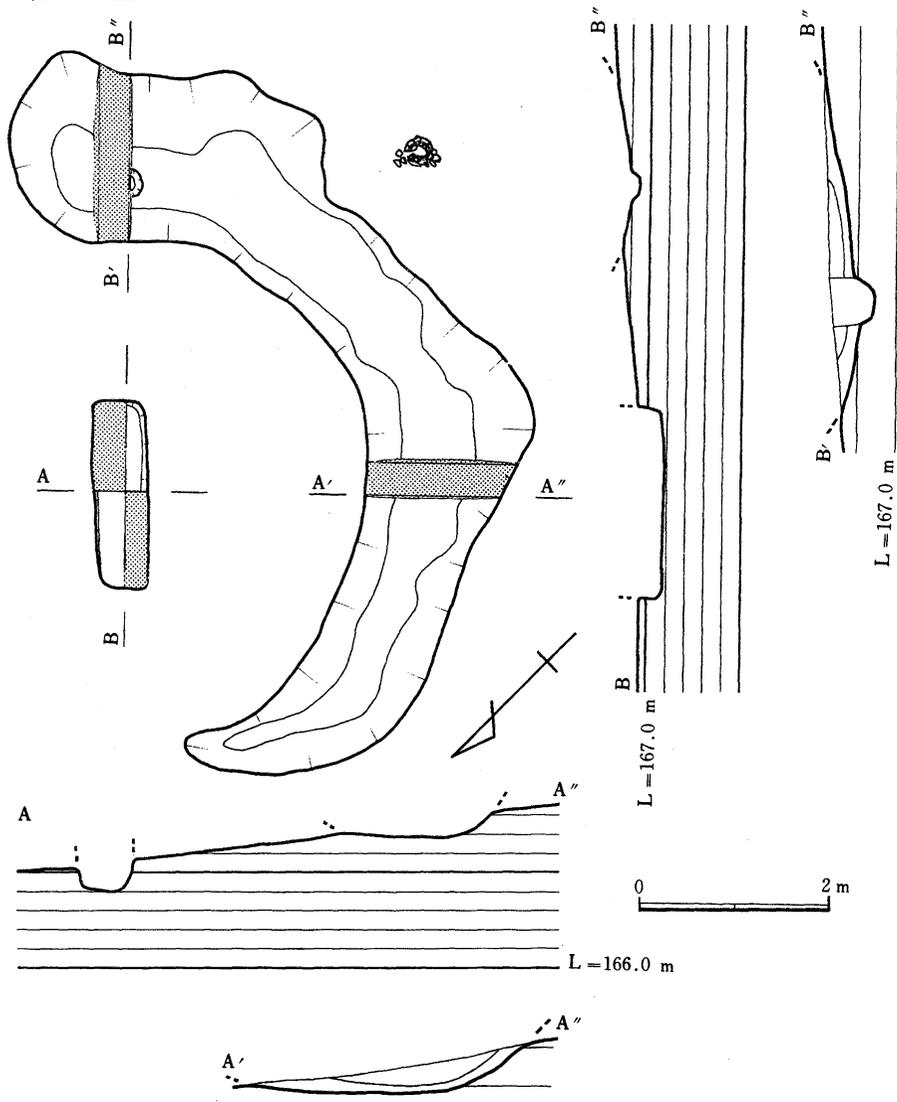
位置：H-20区，I-20区から検出され，5号円形周溝墓の西北西10mに位置し，北側に著しく傾斜する地形である。標高は約167.50mである。

平面形：基本的には半径約3mの円形である。全体的に残りが悪く，陸橋部が存在するかどうか断定はできない。

周溝：残りが悪く，深いところで5cm程度しかない。埋土表面に他の周溝墓の周溝に埋土火山灰の下部に見られる硬く締まった土を確認できる。傾斜がきついため，遺構北側で周溝がなくなっている。

主体部：200cm×60cmの方形で長軸は東西に向く。主体部の深さは平均30cm程度である。

人骨その他の出土遺物はなかった。



第10図 6号円形周溝墓検出状況

7号円形周溝墓（第11図参照）

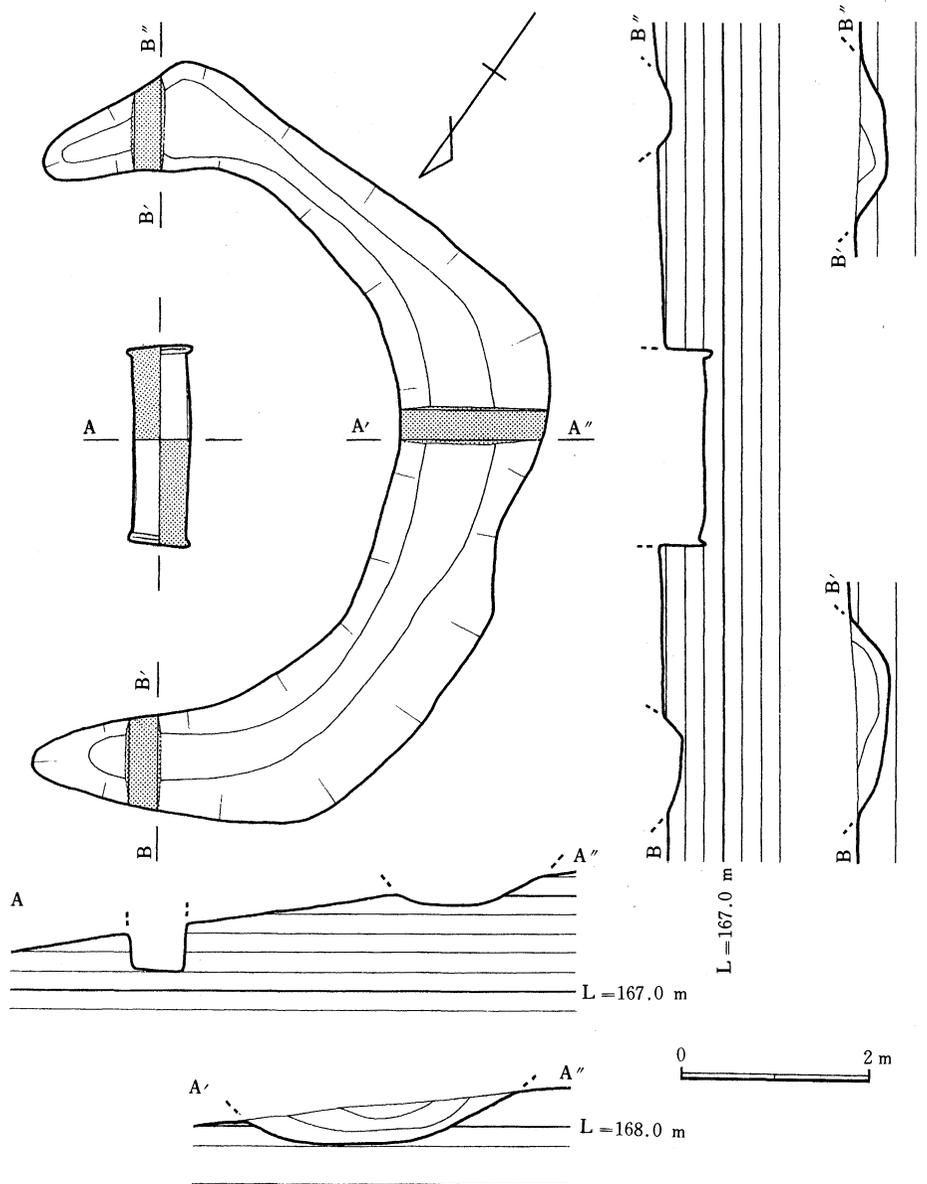
位置：H-21区から検出され、5号円形周溝墓の西約20mに位置し、北側に著しく傾斜する地形である。標高は約168.00mである。

平面形：基本的には半径3mの円形である。全体的に残りが悪く、北側半分が欠損している。陸橋部が存在するかどうか確認できない。

周溝：深いところで40cm程度であるが、傾斜がきついため、北側に行くと確認できなかった。埋土に火山灰層が含まれる。遺物は出土していない。

主体部：200cm×60cmの方形で長軸は東西に向く。主体部の深さは平均50cm程度である。

主体部短軸両端に板を使った跡が認められた。人骨その他の出土遺物はなかった。



第11図 7号円形周溝墓検出状況

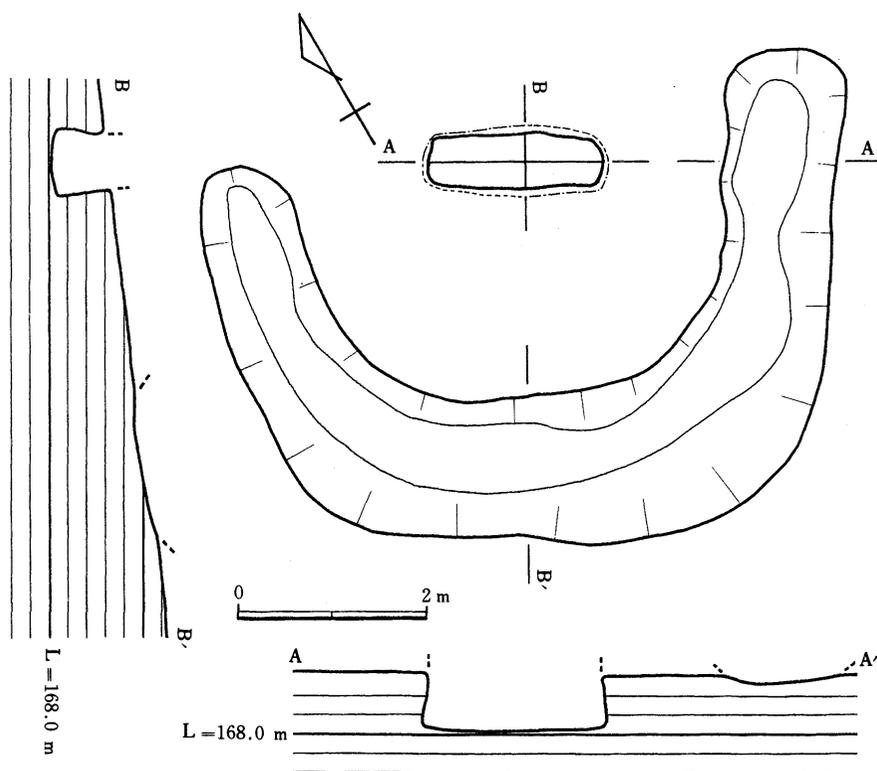
8号円形周溝墓（第12図参照）

位置：G-20区，H-20区から検出され，7号円形周溝墓の南東約10mに位置し，北側に著しく傾斜する地形である。標高は約169.00mである。

平面形：基本的には半径2.5mの円形である。全体的に残りが悪く，北側半分が欠損している。

陸橋部が存在するかどうか確認できない。

周溝：深いところで10cm程度であるが，傾斜がきついため，北側に行くと確認できなかった。



た。埋土に火山灰層が含まれる。遺物は出土していない。

主体部：190cm × 50cm の方形で長軸は東西に向く。主体部の深さは平均60cm程度である。人骨その他の出土遺物はなかった。

第12図 8号円形周溝墓検出状況

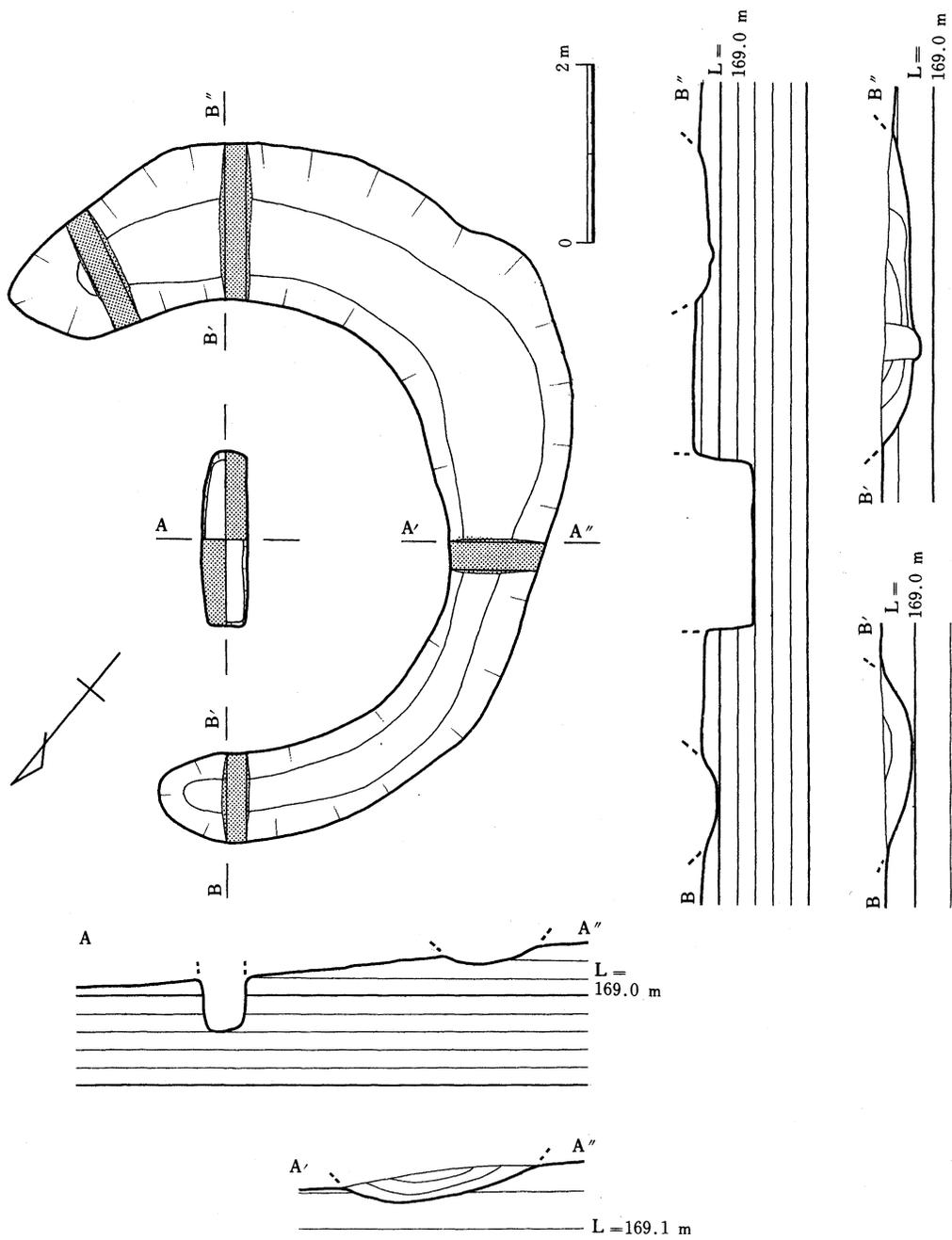
9号円形周溝墓（第13図参照）

位置：G-20区から検出され，7号円形周溝墓の南東10m，8号円形周溝墓の南西隣に位置し，北側に著しく傾斜する地形である。標高は169.50mである。

平面形：基本的には半径3mの円形であるが，北側半分が欠損している。陸橋部が存在するかどうか確認できない。

周溝：深いところで20cm程度であるが，傾斜がきついため，北側に行くと確認できなかった。埋土に火山灰層が含まれる。遺物は出土していない。

主体部：200cm × 50cm の方形で長軸は東西に向く。主体部の深さは平均60cm程度である。人骨その他の出土遺物はなかった。



第13图 9号凹形周溝墓検出状況

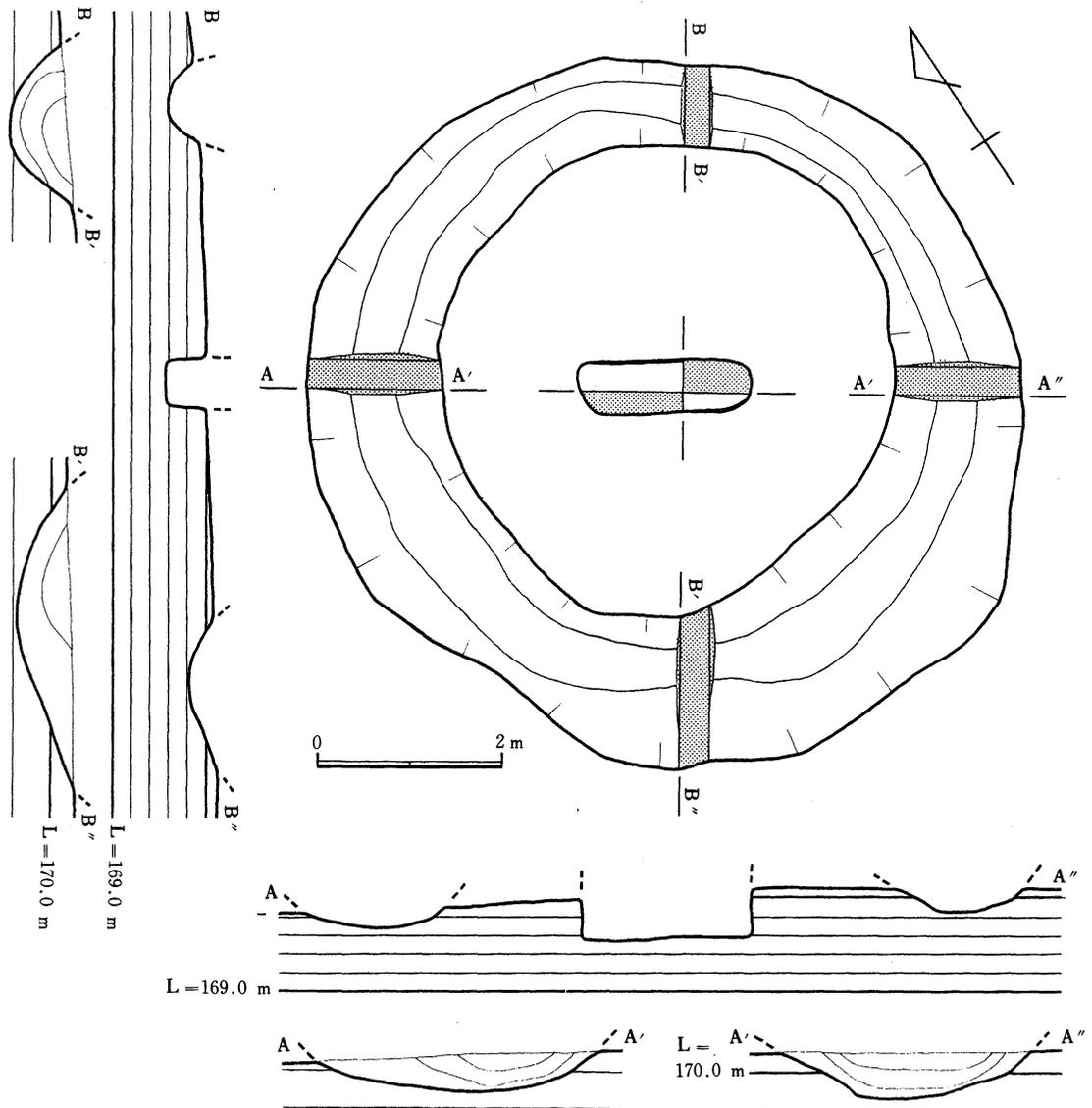
10号円形周溝墓（第14図参照）

位置：G-20区，F-20区から検出され，9号円形周溝墓の南隣に位置する。西側に若干傾斜する地形である。標高は約170.00mである。

平面形：基本的には半径約3mの円形である。全体的に残りはよく，周溝が完全な円を描き陸橋部は認められない。

周溝：深いところで40cm程度である。若干北側に傾斜する地形のため，北側が浅くなっている。周溝埋土は3層に分かれ，火山灰層が確認できる。遺物は出土していない。

主体部：190cm×50cmの方形で長軸は東西に向く。主体部の深さは平均50cm程度である。人骨その他の出土遺物はなかった。



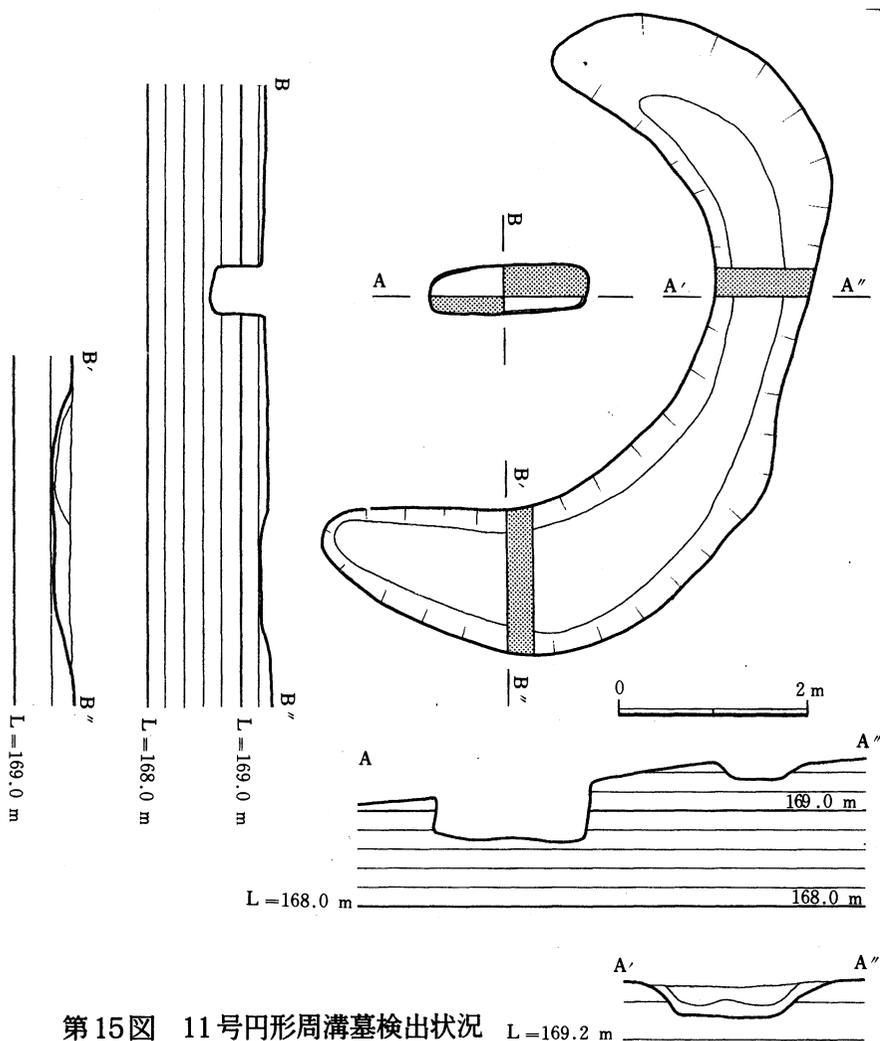
第14図 10号円形周溝墓検出状況

11号円形周溝墓（第15図参照）

位置：F-21区から検出され、10号円形周溝墓の西南西約7m、2号溝の南約10mに位置し西側に傾斜する地形である。標高は約169.50mである。

平面形：基本的には半径約2.5mの円形で、傾斜する西側にかけて周溝が欠損している。

周溝：深いところで20cm程度である。周溝埋土は3層に分かれ、火山灰層が確認できる。遺物は出土していない。
 主体部：170cm×50cmの方形で長軸は東西に向く。主体部の深さは平均60cm程度である。人骨その他の出土遺物はなかった。



第15図 11号円形周溝墓検出状況 L=169.2 m

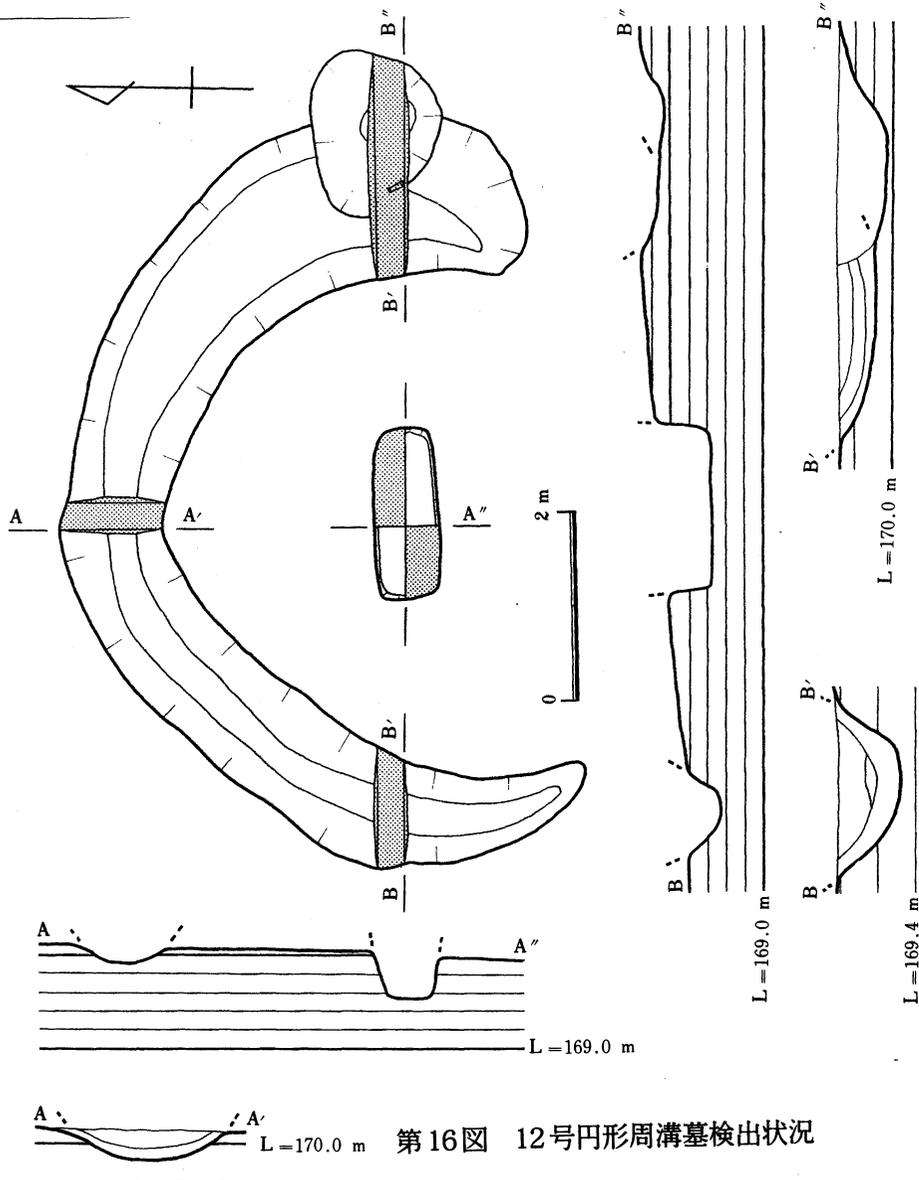
12号円形周溝墓（第16図参照）

位置：F-20区、E-20区から検出され、11号円形周溝墓の南東約10mに位置し、南側に傾斜する地形である。標高は170.00mである。

平面形：基本的には半径約2.5mの円形で、傾斜する南側にかけて周溝が欠損している。周溝南東端が木の根による攪乱を受けている。攪乱のところから弥生時代中期の長頸壺の口縁部が出土している。

周溝：深いところで30cm程度である。周溝埋土は3層に分かれ、火山灰層が確認できる。

主体部：180cm×70cmの方形で長軸は東西に向く。主体部の深さは平均50cm程度である。
 人骨その他の出土遺物はなかった。



第16図 12号円形周溝墓検出状況

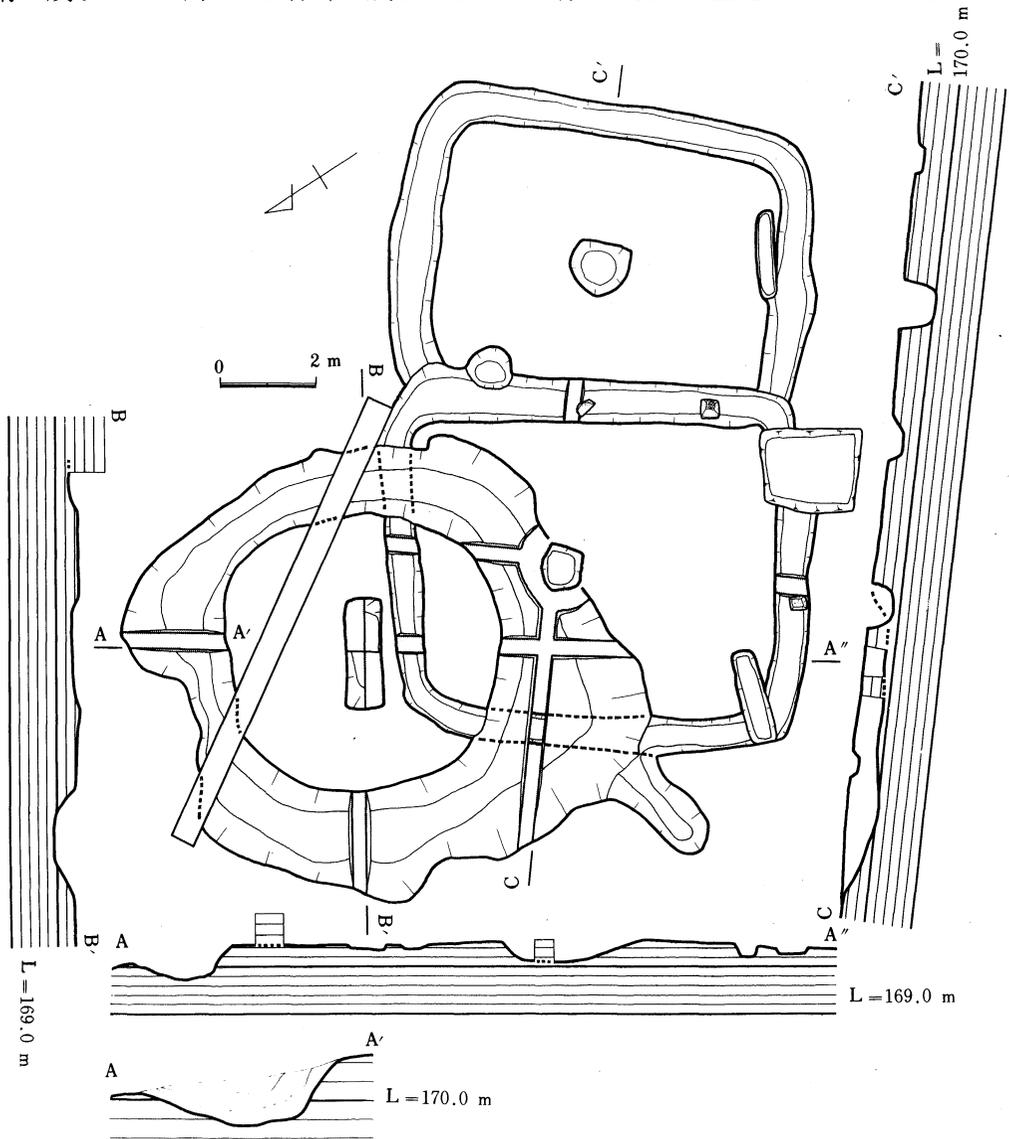
13号円形周溝墓（第17図参照）

位置：G-19区，F-19区から検出され，10号円形周溝墓東約5mに位置する。標高は約170.50mである。

平面形：基本的には半径約3mの円形である。全体的に残りはよく，周溝が完全な円を描き陸橋部は認められない。遺構中央部に表面土からのベルトを残した。表土からのベルトを検討したが，墳丘は認められなかった。遺構南側にかけて1号方形周溝墓により切られている。

周溝：深いところで70cm程度で、非常に残りが良い。13号円形周溝墓と1号方形周溝墓が切りあっている部分を断面を確認したところ、1号方形周溝墓が新しいことが確認された。周溝埋土は3層に分類され中間に、他の周溝墓にみられる火山灰層が確認された。

主体部：240cm × 70cm の方形で長軸は東西に向く。主体部の深さは10cm程度しかない。周溝の残りがよい割には主体部の残りが悪い。人骨その他の出土遺物はなかった。



第17図 13号円形周溝墓・1号・2号方形周溝墓検出状況

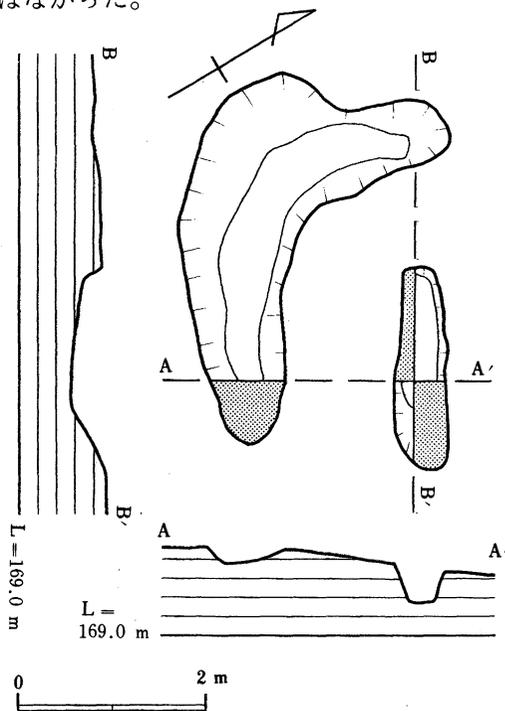
14号円形周溝墓（第18図参照）

位置：G-19区から検出され、13号円形周溝墓の北となりに位置する。標高は約170.00mである。

平面形：基本的には半径約2mの円形であるが、北側方向に著しく傾斜する地形であるため、周溝南東方向に4分の1程度残存するのみである。陸橋部の有無は確認できなかった。

周溝：深いところで10cm程度で、残りは悪い。断面では確認できなかったが、周溝埋土表面に硬い火山灰層が認められた。

主体部：210cm×50cmの方形で長軸は東西に向く。主体部の深さは40cm程度である。人骨その他の出土遺物はなかった。



第18図 14号円形周溝墓検出状況

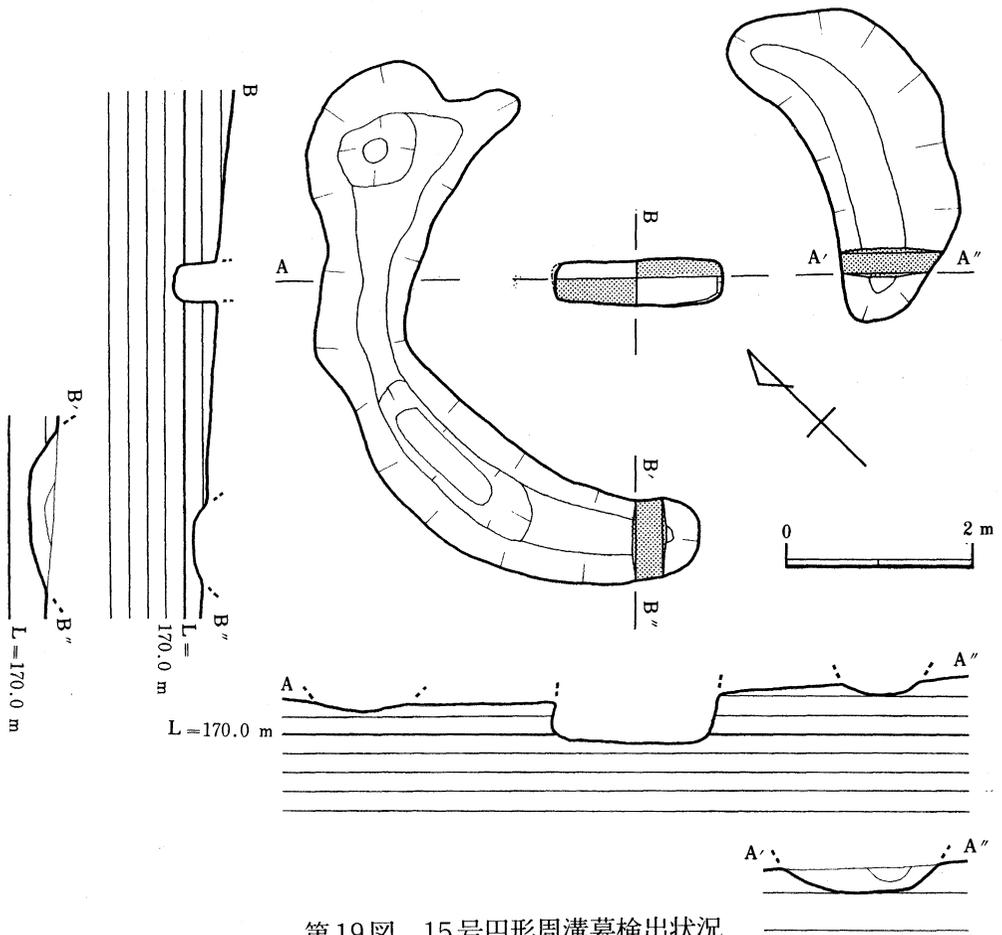
15号円形周溝墓（第19図参照）

位置：D-17区、E-17区から検出され、標高約170.50mの南側に若干傾斜する地形である。

平面形：基本的には半径約2mの円形であるが、周溝が一部欠損している。陸橋部の有無は確認できなかった。

周溝：深いところで20cm程度である。断面では確認できなかったが、周溝埋土表面に硬い火山灰層が認められた。

主体部：180cm×50cmの方形で長軸は東西に向く。主体部の深さは50cm程度である。人骨その他の出土遺物はなかった。



第19图 15号円形周溝墓検出状況

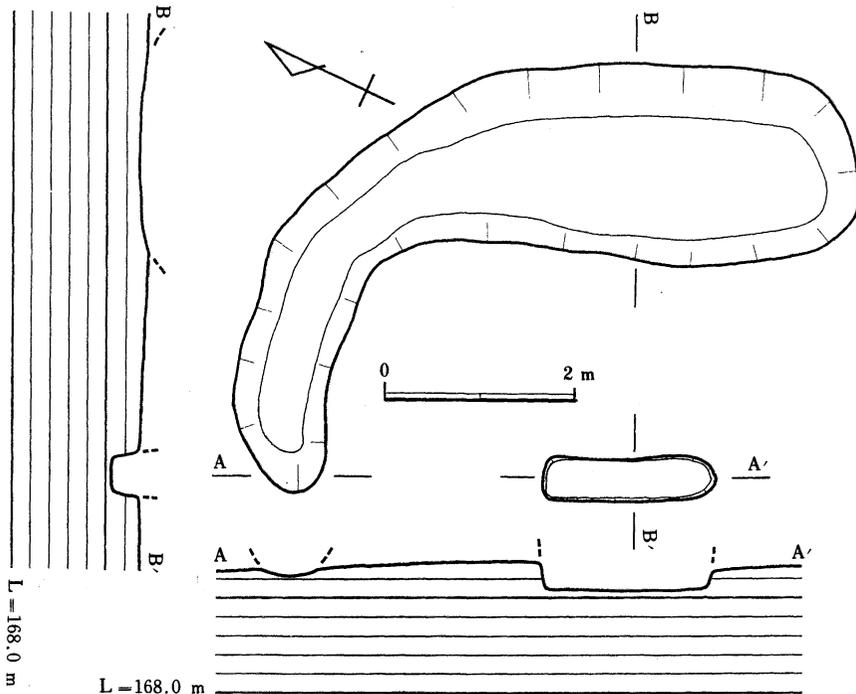
16号円形周溝墓（第20図参照）

位置：F-14区から検出され、1号円形周溝墓の南東隣に位置する。標高約169.50mである。

平面形：基本的には半径約2mの円形であるが、遺構全体の残りが悪いため、周溝も一部しか残っていなかった。

周溝：深いところで5cm程度で残りは非常に悪い。断面では確認できなかったが、周溝埋土表面に硬い火山灰層が認められた。

主体部：180cm×50cmの方形で長軸は東西に向く。主体部の深さは30cm程度である。人骨その



第20図 16号円形周溝墓検出状況

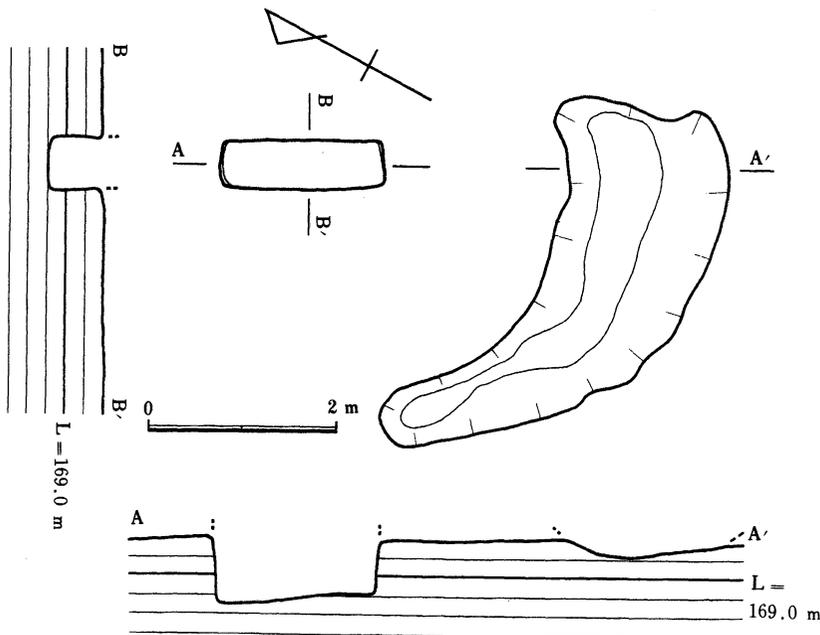
他の出土遺物はなかった。

17号円形周溝墓

（第21図参照）

位置：F-12区から検出され、16号円形周溝墓の東約10mに位置する。標高約169.50mである。

平面形：基本的には半径約2mの円形であるが、遺構全体の残りが悪いため、周溝も一部しか残っておらずはっきり確認できなかった。



第21図 17号円形周溝墓検出状況

陸橋部の有無は確認できなかった。

周溝：深いところで10cm程度で残りは非常に悪い。断面では確認できなかったが、周溝埋土表面に硬い火山灰層が認められた。

主体部：170cm × 50cm の方形で長軸は東西に向く。主体部の深さは60cm程度である。人骨その他の出土遺物はなかった。

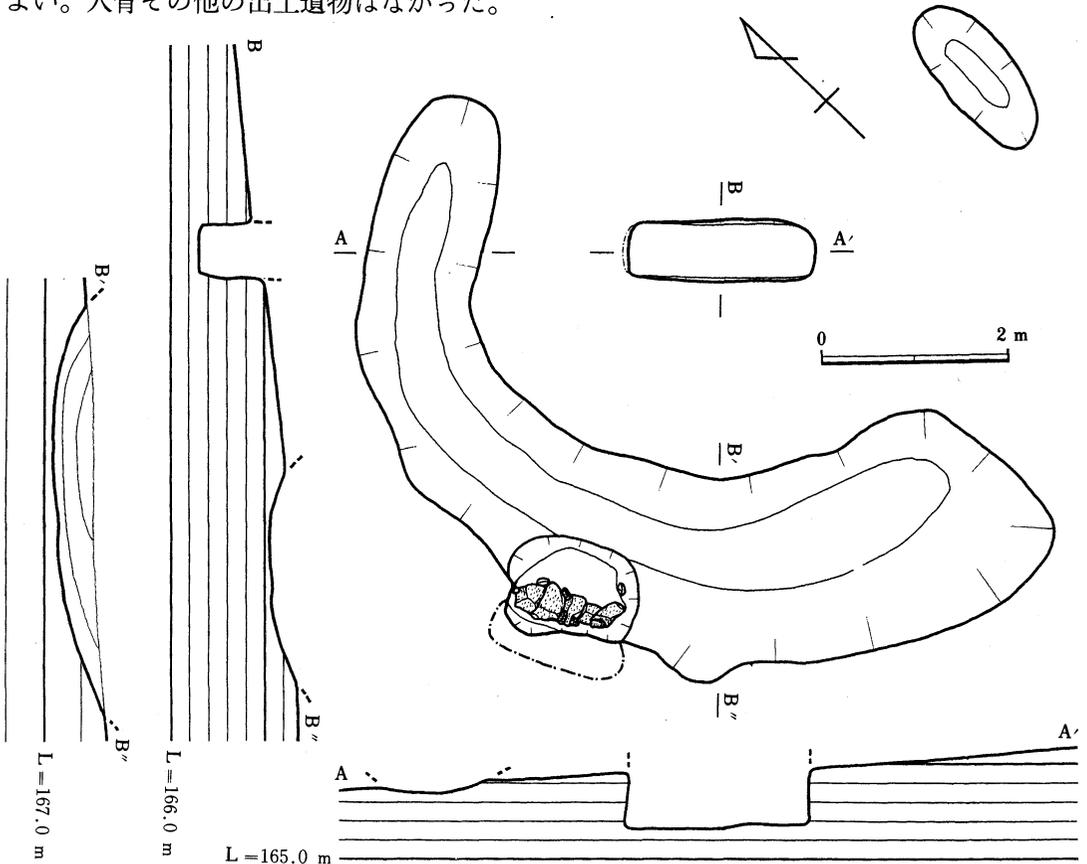
18号円形周溝墓（第22図参照）

位置：H-23区から検出され、円形周溝墓群の西端で、19号円形周溝墓の北西約10mに位置する。標高約167.00mである。

平面形：基本的には半径約2mの円形であるが、北側に傾斜する地形のため、周溝は南側にかけて半分しか残っていない。陸橋部の有無は確認できなかった。

周溝：深いところで50cm程度である。周溝埋土は3層に分類され中間に、他の周溝墓にみられる火山灰層が確認された。周溝南隅に2号地下式横穴墓が切り合った状態で検出されたが切り合い関係は確認できなかった。

主体部：190cm × 60cm の方形で長軸は東北東に向く。主体部の深さは70cm程度で残りがよい。人骨その他の出土遺物はなかった。



第22図 18号円形周溝墓検出状況

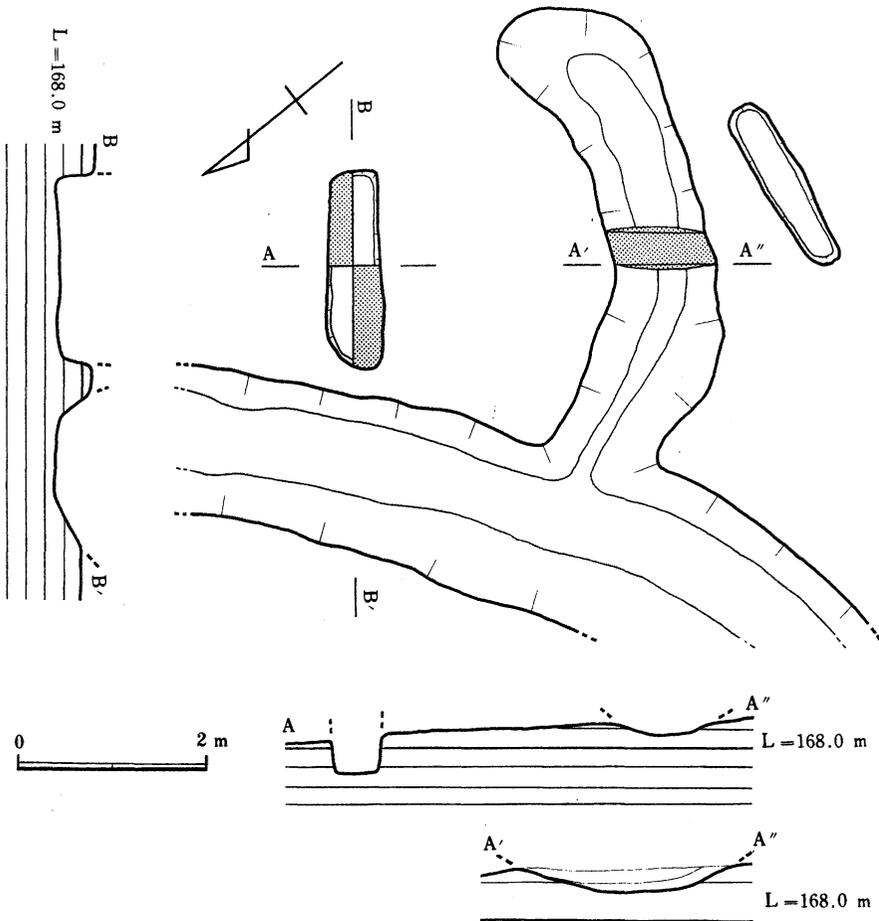
19号円形周溝墓（第23図参照）

位置：G-22区から検出され、7号円形周溝墓の北西約5m、20号円形周溝墓の北西約3mに位置する。標高約168.00mである。

平面形：基本的には半径約2mの円形であるが、北側に傾斜する地形のため、周溝は南側にかけて半分しか残っていない。陸橋部の有無は確認できなかった。

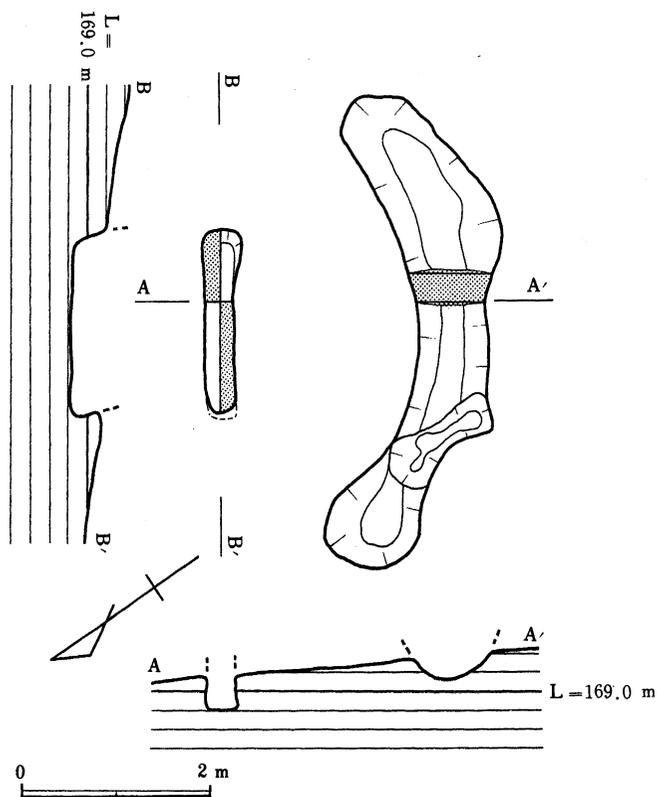
周溝：深いところで50cm程度である。周溝埋土は2層に分類され上層に、他の周溝墓にみられる火山灰層が確認された。遺構西側で2号溝から切られている。2号溝には他の円形周溝墓にみられる火山灰層は無いため、中世の遺構と思われる。

主体部：
200cm ×
50cmの方
形で長軸
は北東に
向く。主
体部の深
さは50cm
程度で残
りがよい。
人骨その
他の出土
遺物はな
かった。



第23図 19号円形周溝墓検出状況

20号円形周溝墓（第24図参照）



第24図 20号円形周溝墓検出状況

位置：G-21区から検出され、19号円形周溝墓の南東約5m、10号円形周溝墓の北西約3mに位置する。標高約169.00mである。

平面形：基本的には半径約2mの円形であるが、北側に傾斜する地形のため、周溝は南側にかけて半分しか残っていなかった。陸橋部の有無は確認できなかった。

周溝：深いところで20cm程度である。残りが悪いため断面では確認できなかったが、他の周溝墓にみられる火山灰層が周溝埋土表面に確認された。

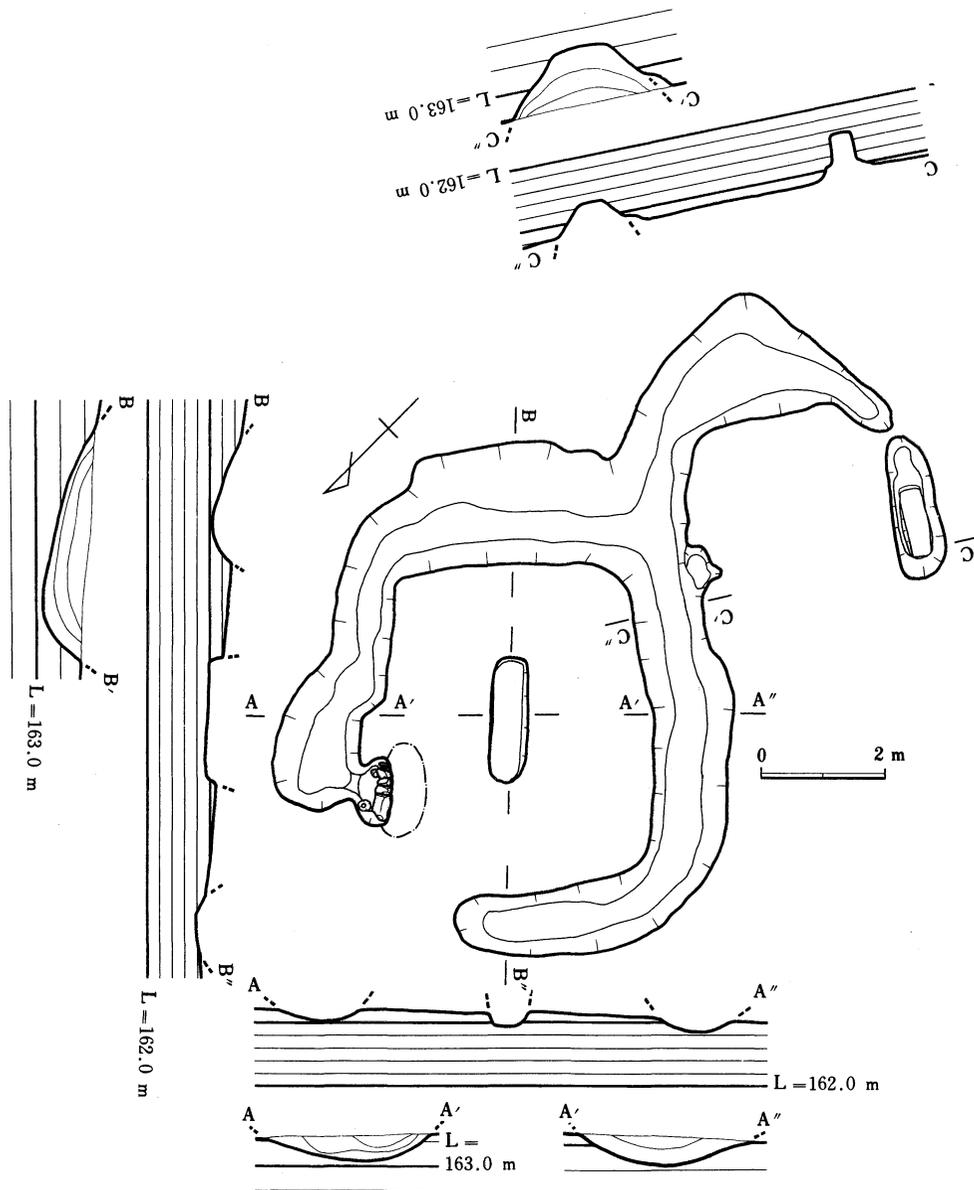
主体部：190cm×30cmの方形で長軸は東西に向く。主体部の深さは40cm程度である。人骨その他の出土遺物はなかった。

3号方形周溝墓（第25図参照）

位置：H-27区から検出され、調査区域の西端に位置する。標高約163.00mである。

平面形：基本的には8m×6mの方形であるが、西側に傾斜する地形のため、周溝は北西にかけて一部欠損している。遺構の南東隅から周溝が外に弧を描いた状態で突出している。

周溝：深いところで50cm程度である。周溝埋土は3層に分類され、中間層に他の周溝墓にみられる火山灰層が確認された。周溝北西隅に8号地下式横穴墓が検出されたが周溝埋土の残りが悪いため切り合い関係は確認できなかった。



第25図 3号方形周溝墓検出状況

主体部：200cm × 25cm の方形で長軸は東西に向く。主体部の深さは20cm 程度である。人骨その他の出土遺物はなかった。

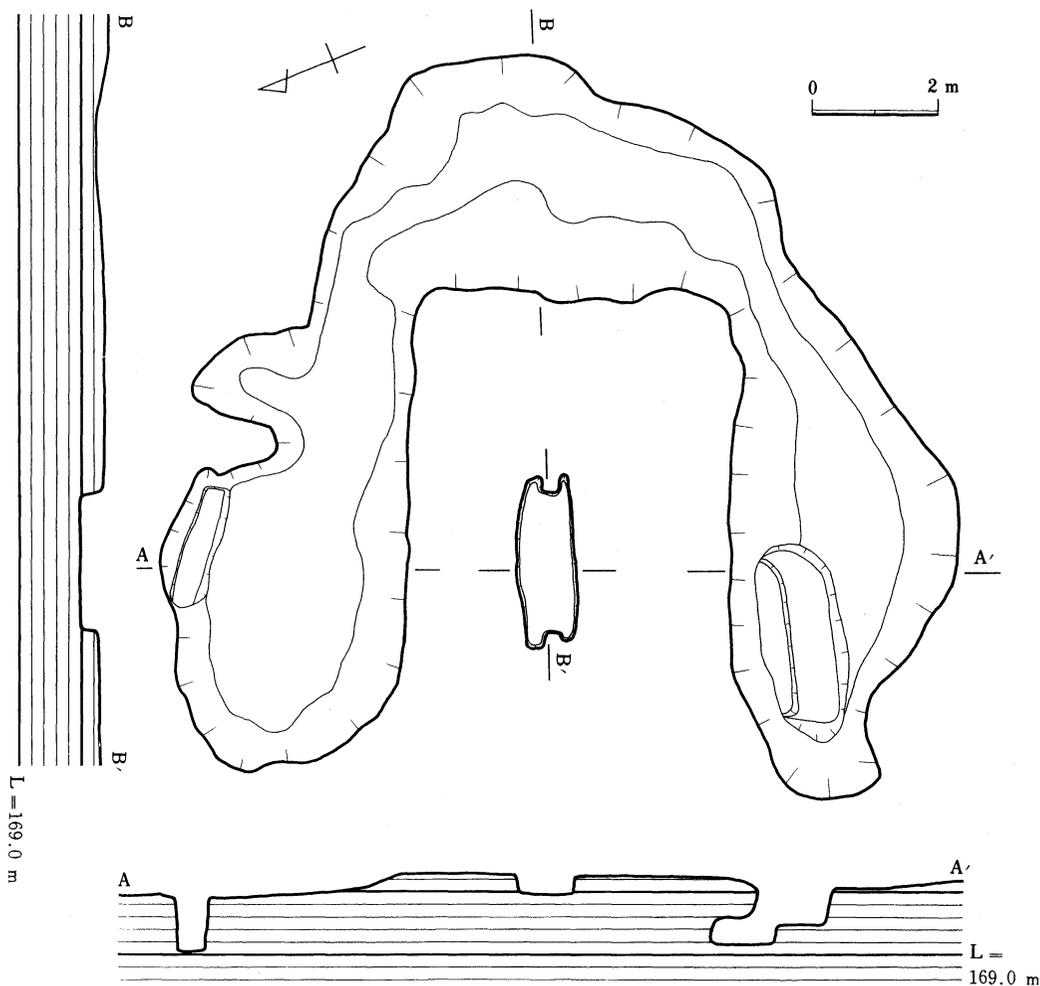
4号方形周溝墓（第26図参照）

位置：， F - 16区から検出され， 2号円形周溝墓の南西約5m に位置する。標高約170.00m である。

平面形：基本的には7m × 5m の方形であるが， 周溝は東側にかけて一部欠損している。

周溝：深いところで10cm 程度で， 残りは悪い。周溝埋土断面では確認できなかったが， 埋土表面に他の周溝墓にみられる火山灰層が確認された。周溝北東に9号地下式横穴墓が検出されたが周溝埋土の残りが悪いため切り合い関係は確認できなかった。

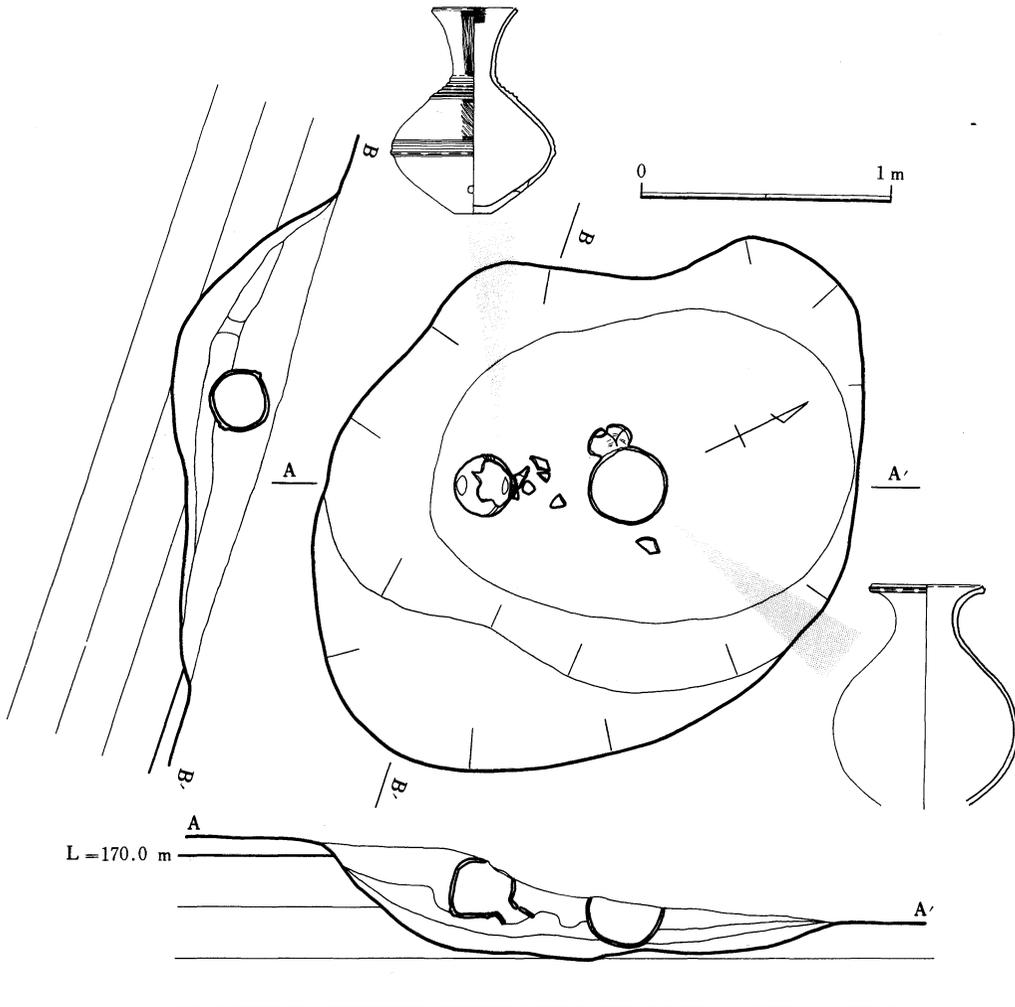
主体部：140cm × 60cm の方形で長軸は東西に向く。主体部の深さは30cm 程度である。主体部両隅が突出しており両脇に板を用いた可能性がある。人骨その他の出土遺物はなかった。



第26図 4号方形周溝墓検出状況

1号祭祀土壌（第27図参照）

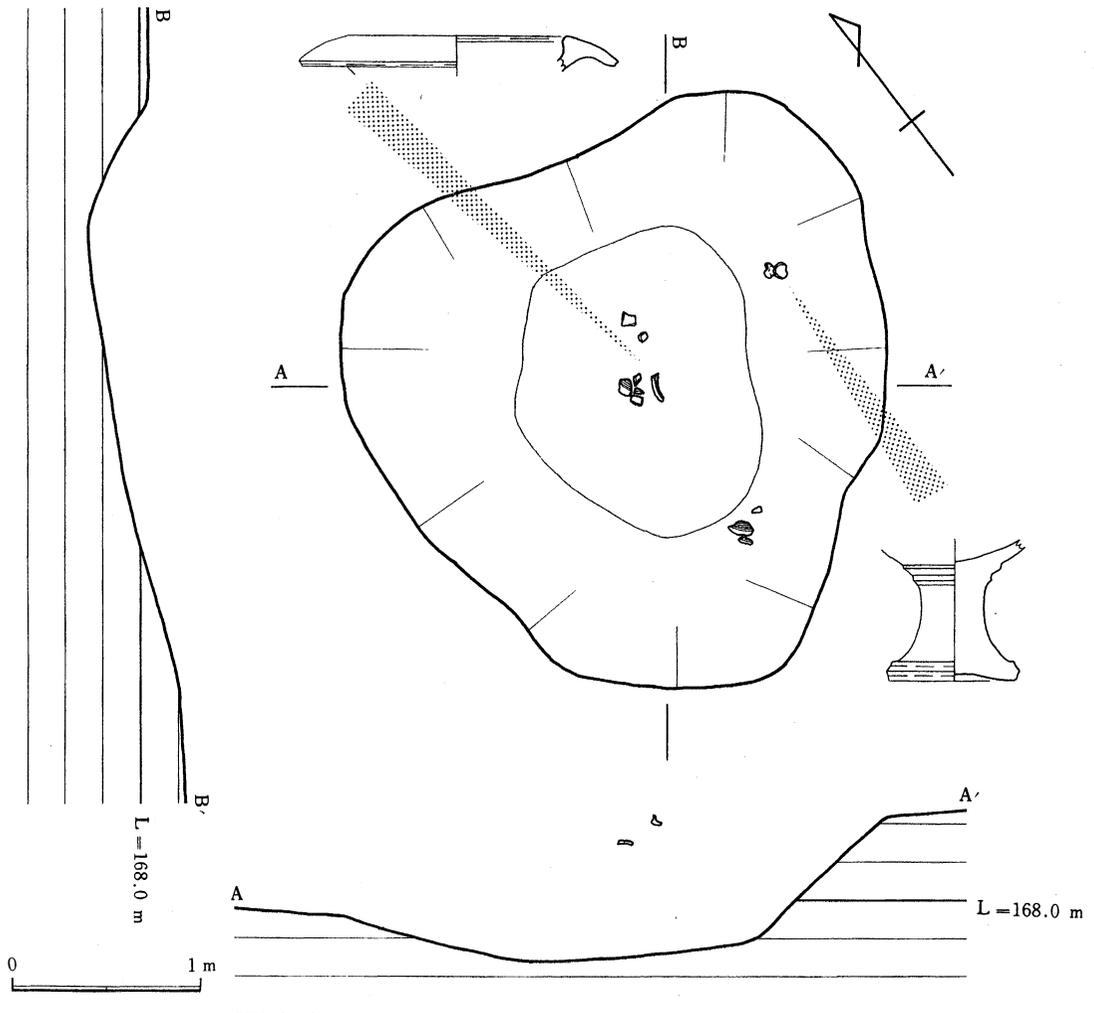
G-20区から検出され、13号円形周溝墓の北西隣に位置する。標高約170.00mである。基本的に長軸220cm×150cmの楕円形である。北側に傾斜する地形のため北側の残りが悪い。埋土は3層にわかれ、中間層に他の周溝墓にみられる火山灰層が堆積している。遺構中央部に倒れた状態で、ほぼ原形のままの壺形土器が二点出土している。そのうちの一つは胴部に穿孔を伴った長頸壺で祭祀用の壺と思われる。



第27図 1号祭祀土壌検出状況

2号祭祀土壇（第28図参照）

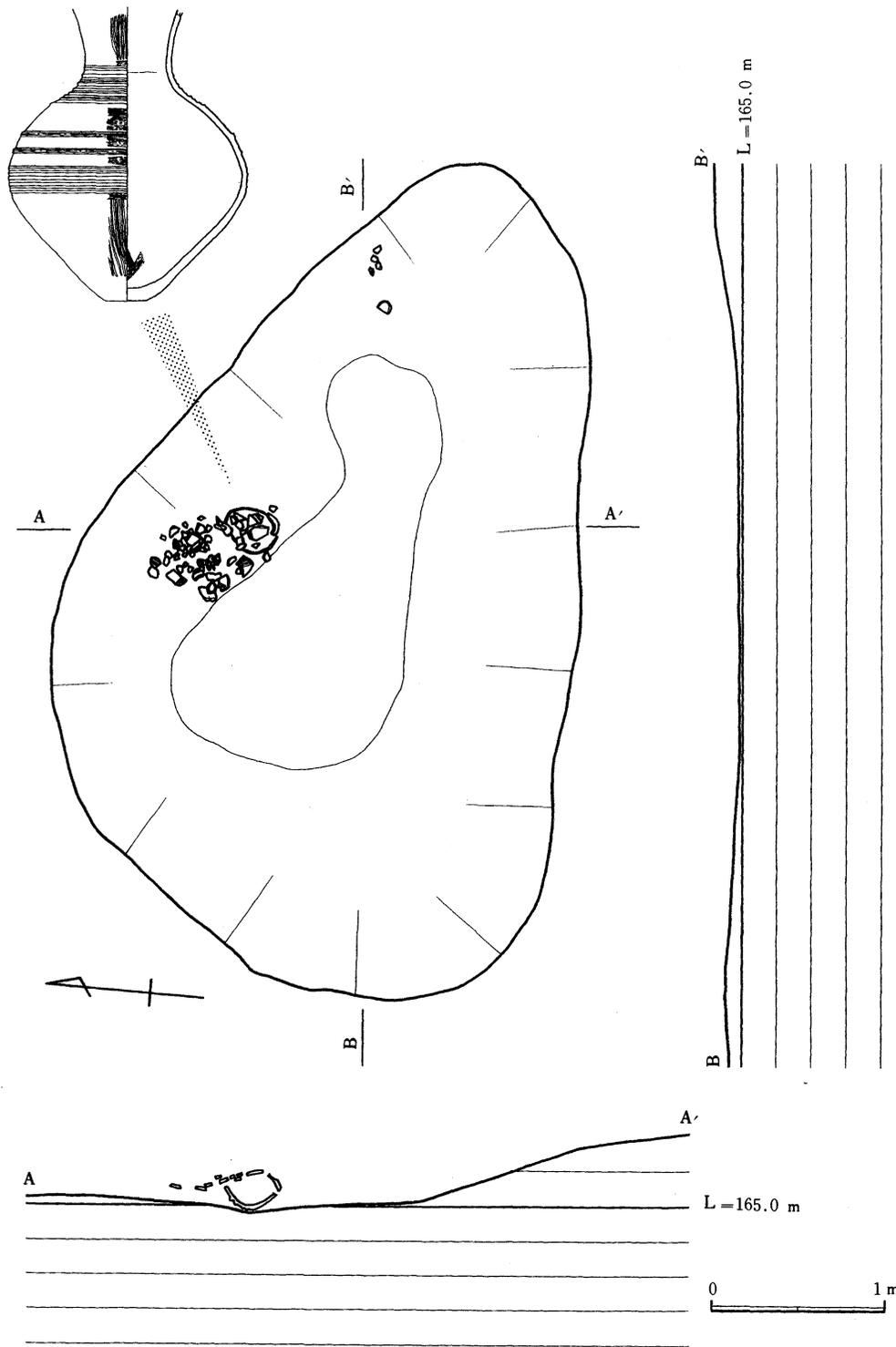
G-22区から検出され、18号円形周溝墓の南東約5mに位置する。標高約168.00mである。基本的に半径150cmの円形である。埋土断面では確認できなかったが、埋土表面に他の周溝墓にみられる火山灰層が確認された。また土壇埋土内より壺形土器や甕形土器の土器片が出土した。



第28図 2号祭祀土壇検出状況

3号祭祀土壇（第29図参照）

H-25区から検出され、5号地下式横穴墓の北隣に位置する。標高約165.00mである。基本的に長軸480cm×短軸300cmの楕円形で、北西側にかけて残りが悪い。埋土断面では確認できなかったが、埋土表面に他の周溝墓にみられる火山灰層が確認された。土壇北東隅より壺形土器がまとまった状態で出土した。



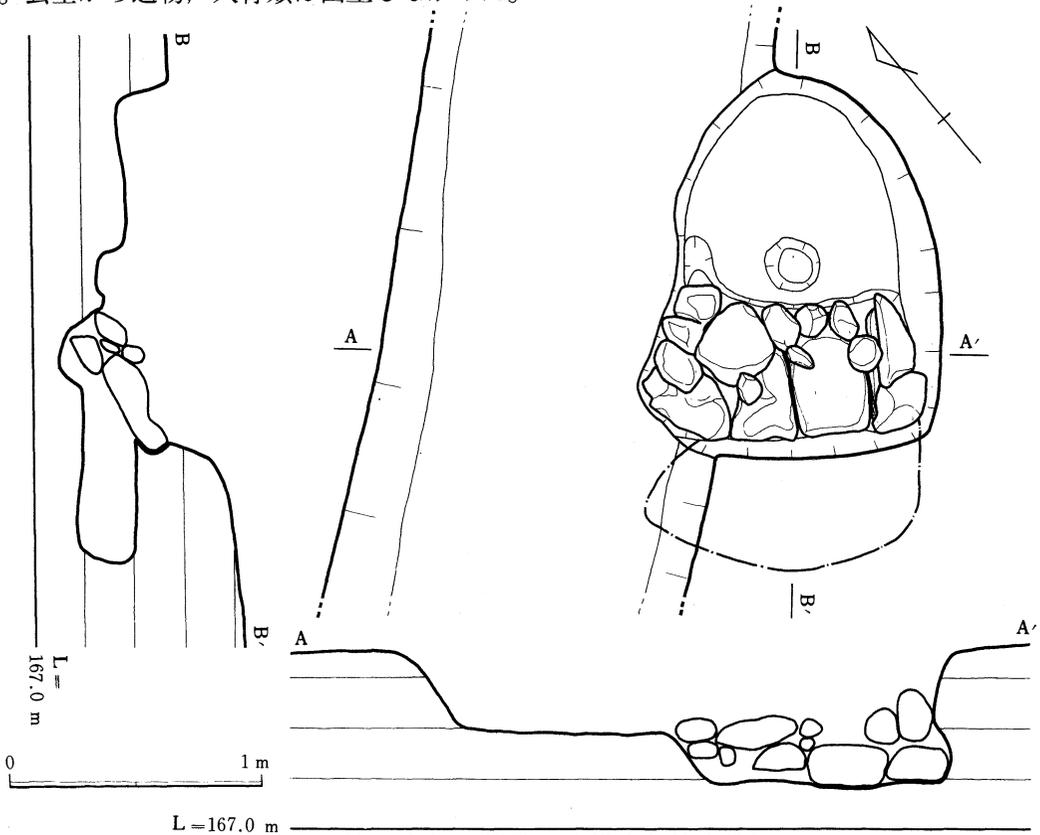
第29図 3号祭祀土壌検出状況

第3節 古墳時代の遺構

遺跡の中央部から西側にかけて、標高差の著しい区域に9基の地下式横穴墓が検出された。その内4基の地下式横穴墓が凝灰岩の蓋石を伴って検出された。また、2号、8号、9号の地下式横穴墓が円形周溝墓、あるいは方形周溝墓と切り合った状態で検出されたが、いずれも切り合い関係は確認できなかった。

1号地下式横穴墓（第30図参照）

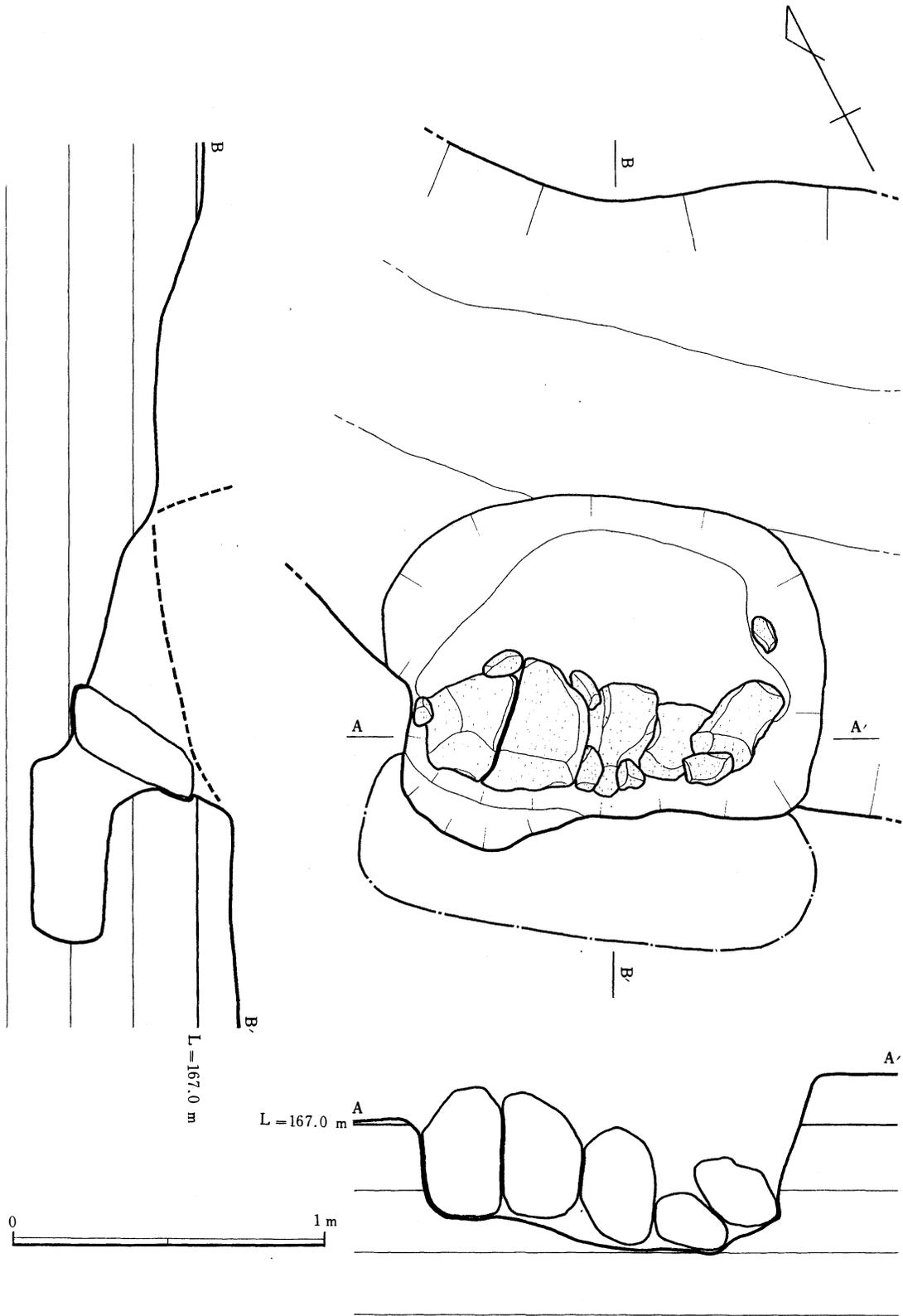
H-22区から近世の2号溝を切った状態で検出された地下式横穴墓である。標高は約167.50mである。竪坑は長軸150cm×短軸110cmの大きさで、検出面から30cm深さである。そこから東側に長軸110cm×短軸50cm、高さ20cmの玄室を掘込んでいる。また凝灰岩の蓋石を施している。蓋石は大きいもので長さ45cm、幅25cm、厚さ15cmのものもある。玄室から遺物、人骨類は出土しなかった。



第30図 1号地下式横穴墓検出状況

2号地下式横穴墓（第31図参照）

H-23区の18号円形周溝墓の周溝と切り合った状態で検出された地下式横穴墓である。標高は約167.00mである。18号円形周溝墓との切り合い関係は確認できなかった。竪坑は長軸140cm×短軸100cmの方形で、検出面から40cm深さである。そこから東側に長軸150cm×短軸50cm、高さ25cmの玄室を掘込んでいる。また凝灰岩の蓋石を施している。

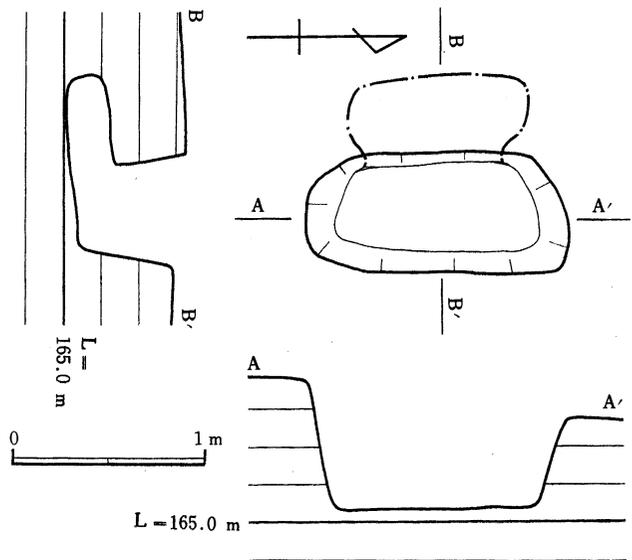


第31图 2号地下式横穴墓検出状況

蓋石は大きいもので長さ45cm、幅25cm、厚さ15cmのものもある。玄室から遺物、人骨類は出土しなかった。

3号地下式横穴墓（第32図参照）

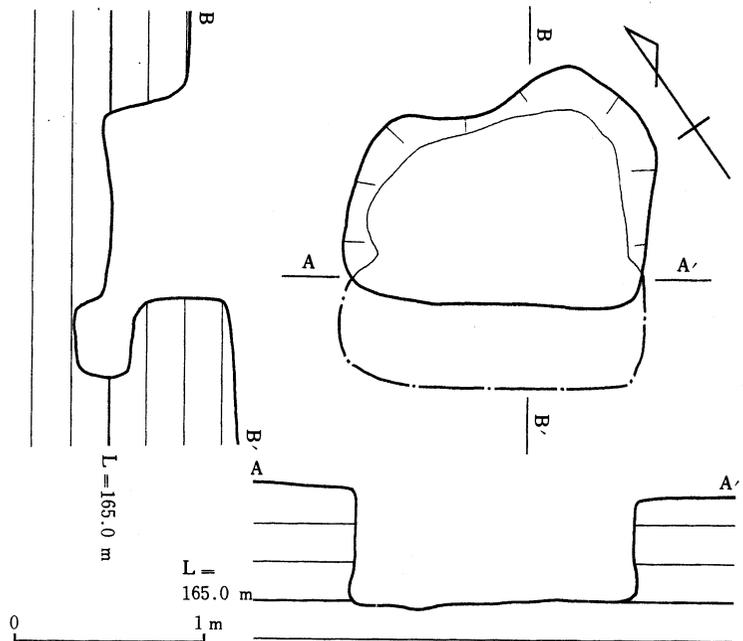
I-24区から検出され、18号円形周溝墓の北西約10mに位置する地下式横穴墓である。標高は約165.50mである。竖坑は長軸140cm×短軸60cmの方形で、検出面から50cmの深さまで掘込んでいる。そこから西側に長軸100cm×短軸40cm、高さ20cmの玄室を掘込んでいる。玄室が竖坑に対して小さい地下式横穴墓である。玄室から遺物、人骨類は出土しなかった。



第32図 3号地下式横穴墓検出状況

4号地下式横穴墓（第33図参照）

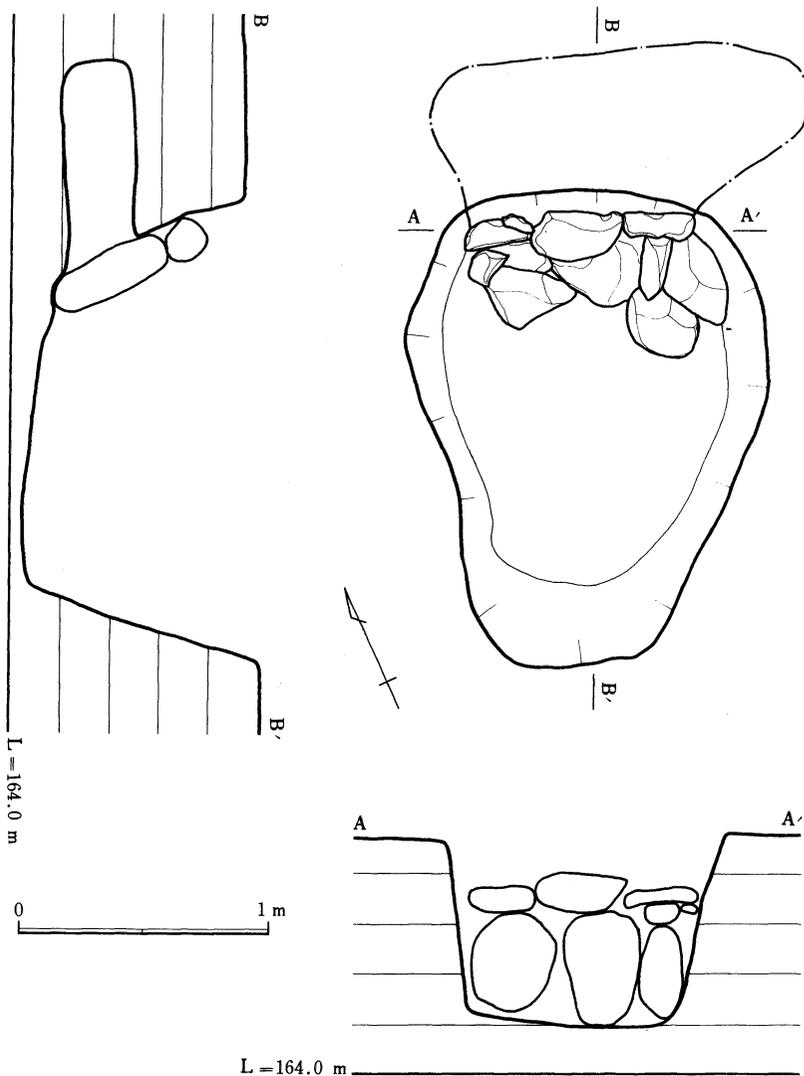
H-24区から検出され、5号地下式横穴墓の東隣に位置する。標高約165.50mである。竖坑は長軸160cm×短軸100cmの方形で検出面から60cmの深さまで掘込んでいる。そこから南側に長軸160cm×短軸20cm、高さ30cmの玄室を掘込む。玄室から遺物、人骨類は出土しなかった。



第33図 4号地下式横穴墓検出状況

5号地下式横穴墓（第34図参照）

H-25区から検出され、4号地下式横穴墓と6号地下式横穴墓のあいだに位置する。標高は約165.00mである。竖坑は長軸190cm × 短軸140cmのほぼ長方形で、検出面から90cm深さまで掘込む。そこから北側に長軸150cm × 短軸70cm、高さ30cmの玄室を掘込んでいる。また凝灰岩の蓋石を施している。蓋石は大きいもので長さ50cm、幅30cm、厚さ20cmのものもある。玄室から遺物、人骨類は出土しなかった。

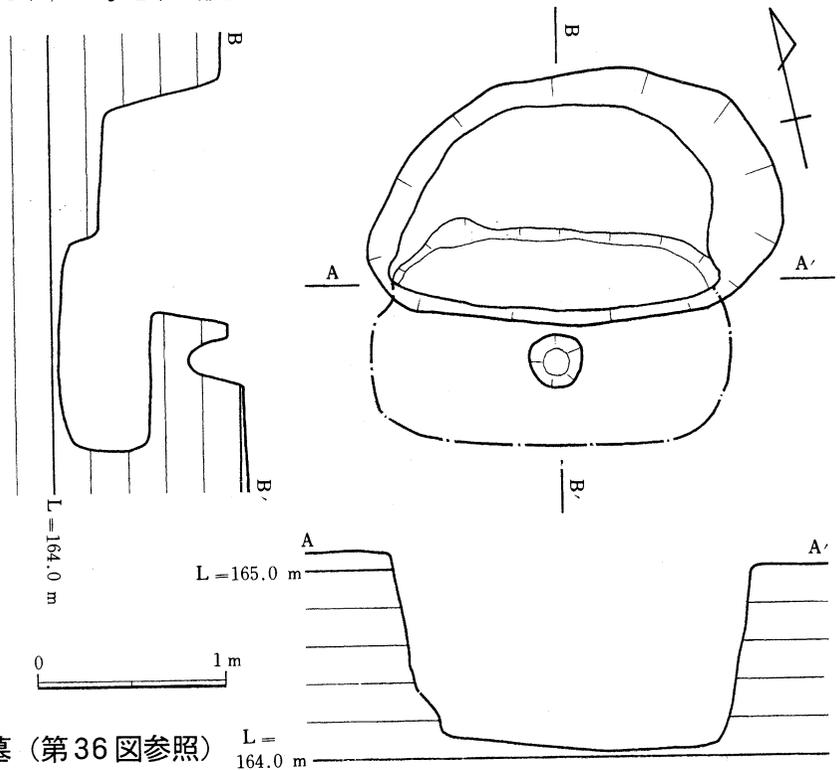


第34図 5号地下式横穴墓検出状況

6号地下式横穴墓（第35図参照）

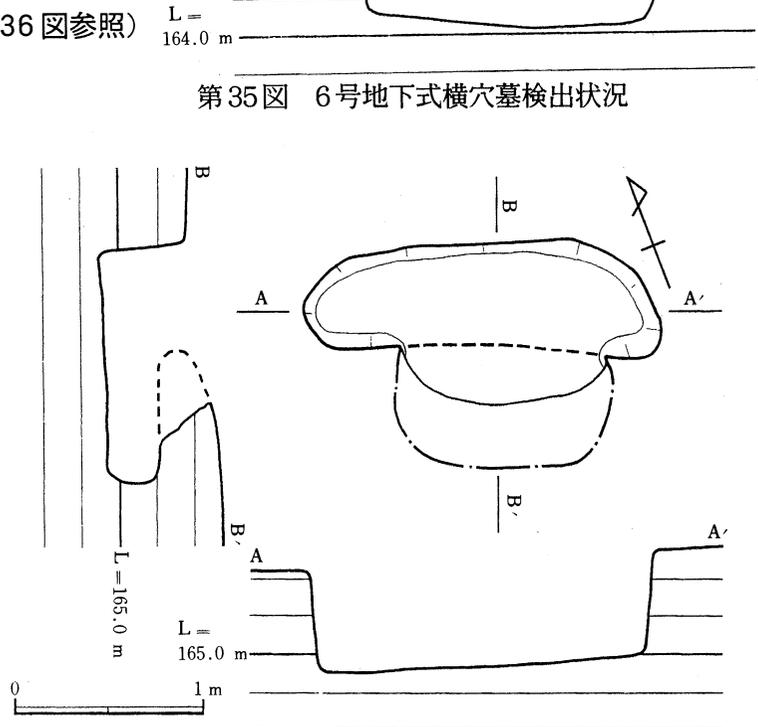
H-25区から検出され、5号地下式横穴墓の西隣に位置する。標高は約165.00mである。

竪坑は長軸200cm × 短軸120cmのほぼ方形で検出面から100cmの深さまで掘込んでいる。そこから南側に長軸180cm × 短軸70cm、高さ40cmの玄室を掘込む。玄室から遺物、人骨類は出土しなかった。



7号地下式横穴墓（第36図参照）

G-24区から検出され、5号地下式横穴墓の南約10mに位置する。標高は約165.50mである。竪坑は長軸180cm × 短軸50cmのほぼ方形で検出面から60cmの深さまで掘込んでいる。そこから南側に長軸110cm × 短軸60cm、高さ30cmの玄室を掘込む。玄室から遺物、人骨類は出土しなかった。

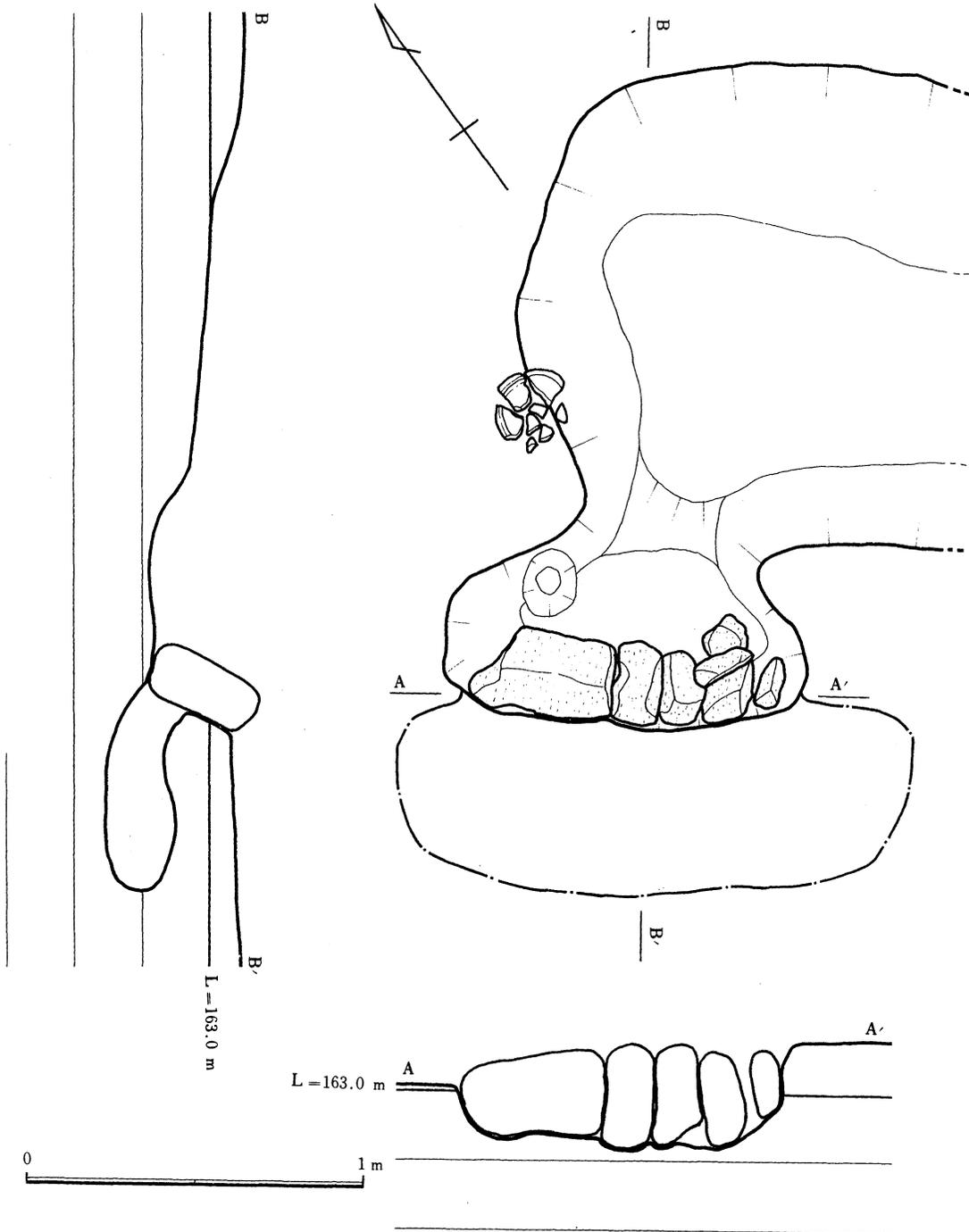


第35図 6号地下式横穴墓検出状況

第36図 7号地下式横穴墓検出状況

8号地下式横穴墓（第37図参照）

3号方形周溝墓の周溝から検出された地下式横穴墓である。標高は約165.50mである。3号方形周溝墓との切り合い関係は確認できなかった。竪坑は長軸100cm×短軸50cmの方形



第37図 8号地下式横穴墓検出状況

で、検出面から20cm深さである。そこから南側に長軸150cm×短軸50cm、高さ20cmの玄室を掘込んでいる。また凝灰岩の蓋石を施している。蓋石は大きいもので長さ30cm、幅40cm、厚さ15cmのものもある。玄室から遺物、人骨類は出土しなかった。

9号地下式横穴墓（第26図参照）

16号方形周溝墓の周溝から検出された地下式横穴墓である。標高は約170.00mである。4号方形周溝墓との切り合い関係は確認できなかった。竪坑は長軸240cm×短軸140cmの方形で、検出面から40cm深さである。そこから南側に長軸180cm×短軸60cm、高さ40cmの玄室を掘込んでいる。玄室から遺物、人骨類は出土しなかった。

第4節 中世の遺構

遺跡のほぼ中央部、標高が約170.50mの地点から2基の方形周溝墓が検出された。

1号方形周溝墓（第17図参照）

位置：F-19区から検出され、10号円形周溝墓東約5mに位置する。標高は約170.50mである。

平面形：基本的には8m×6mの方形である。全体的に残りはよく、陸橋部は認められない。遺構北西側にかけて13号円形周溝墓を切っている。さらに東側に2号方形周溝墓があり、互いに切り合っているが切り合い関係は確認できなかった。

周溝：深いところで30cm程度である。周溝埋土には火山灰層は認められない。周溝埋土より古石塔の傘石が出土している。

主体部：90cm×90cmのほぼ正方形である。主体部の深さは60cm程度である。人骨その他の出土遺物はなかった。

2号方形周溝墓（第17図参照）

位置：F-18区から検出され、1号方形周溝墓東隣に位置する。標高は約170.50mである。

平面形：基本的には8m×6mの方形である。全体的に残りはよく、陸橋部は認められない。遺構西側にかけて1号方形周溝墓と切り合っているが切り合い関係は確認できなかった。

周溝：深いところで20cm程度である。周溝埋土には火山灰層は認められない。

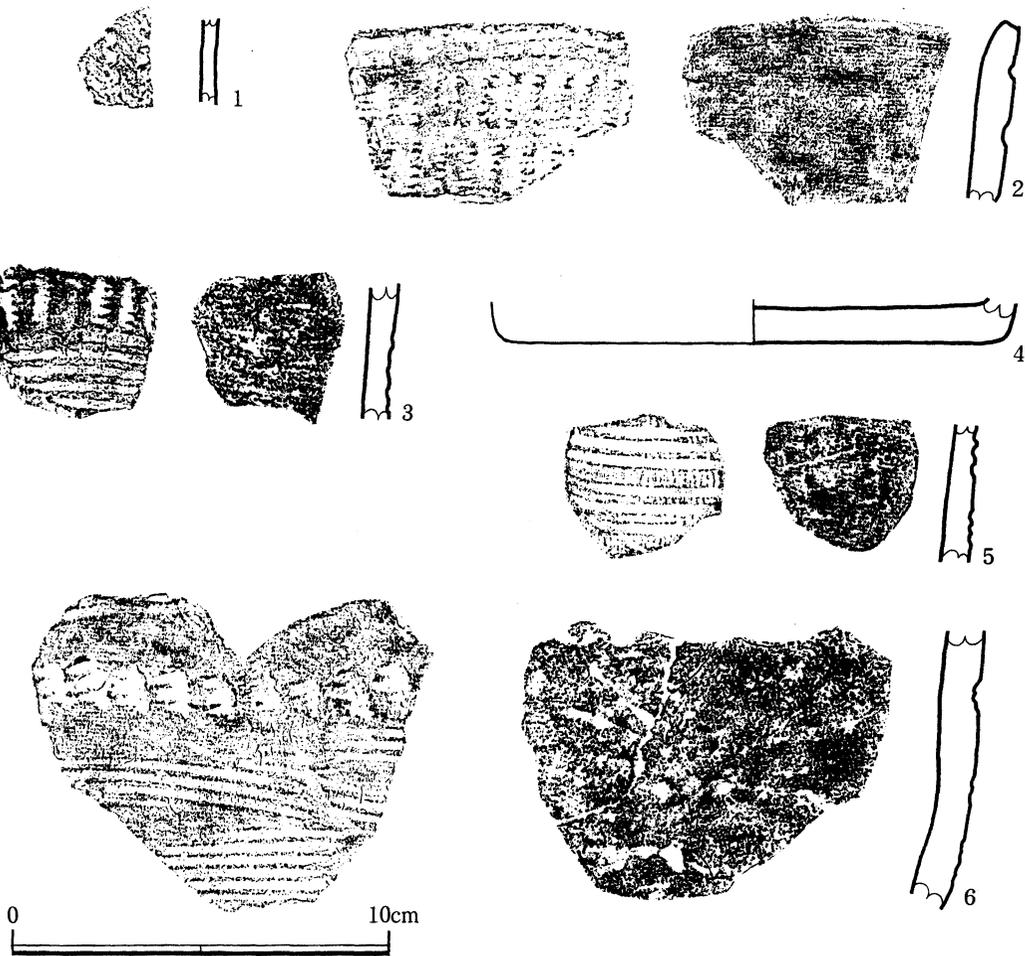
主体部：100cm×110cmのほぼ正方形である。主体部の深さは60cm程度である。人骨その他の出土遺物はなかった。

第5節 縄文時代の遺物

縄文時代の土器は早期，中期，後期，晩期に該当するものがある。早期に該当するものは調査区域の南東端より数点出土している。中期の土器は調査区域の南東側から多数出土し，後期，晩期の土器は遺跡の東側に広く分布していた。

早期の土器（第38図1～6）

1は貝殻による縦方向に刺突を施す胴部の小片である。河口氏の定義による前平式に該当するものと思われる。2は口縁部上部に横方向に連続して刺突を施し，その下に縦方向の貝殻による刺突を連続して施文している。3は上部に貝殻による縦方向の刺突を連続して施し，その下に貝殻条痕を施すものである。2と3は吉田式に該当するものと思われる。5は撚糸による施文をした後，貝殻条痕を施している。6は器壁は厚く，外面に貝殻刺突と条痕を施す胴部片である。5，6とも塞ノ神式土器の範疇に入るものと思われる。



第38図 出土遺物（1）

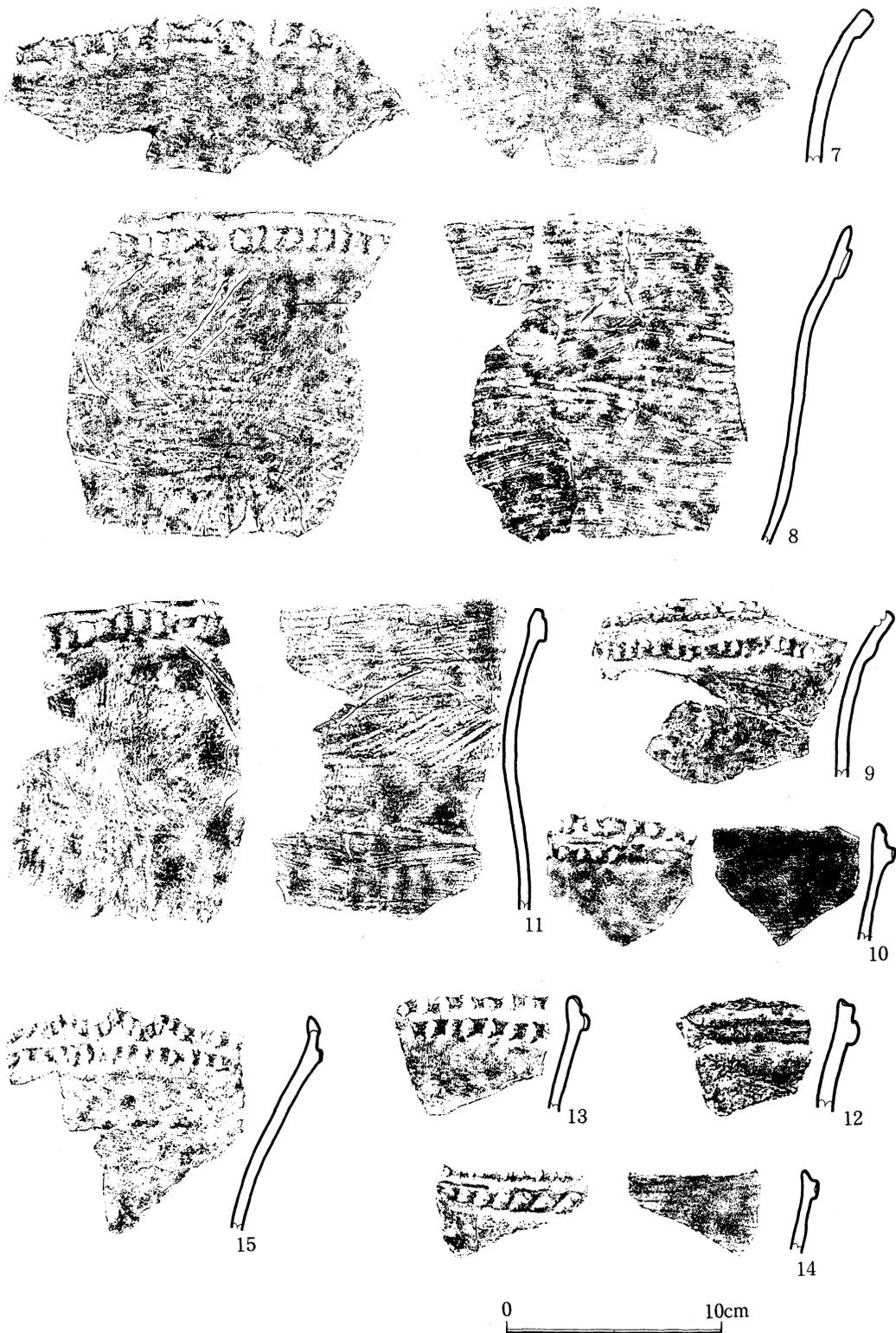
中期の土器（第39図7～第42図37）

中期の土器は大まかに分けて2種類に分かれる。一つは口縁部が外反し肥厚させるか、口縁部付近に突帯を付すもの（7～20, 23, 26, 28, 29, 30）。もう一つは口縁部を内湾させ、キャリパー状になるものである（21, 22, 24, 25, 31～36）。7は口縁部が外反するとともに、肥厚させている。さらに、口縁部に比較的大まかな刻みを付している。8, 11は口縁部を外反させ、口縁部直下に突帯を有し、そこに刻みを施すのものである。9, 10, 12～15は口縁部直下に刻みを施した突帯を有するが同時に口唇部にも刻みを施している。9は外反する器形であるが、その他はあまり外反しない。特に15は口唇部に凹凸があり、凸部ではやや内湾する。16はあまり外反せず、口唇部が波状になり、凸部ではやや内湾する。17はほぼ直行し口縁部直下に粗い刻みを施す突帯を有する。18は口縁部を肥厚させさらに直下に突帯を有し、それぞれに刻みを施す。19は口縁部は外反するが、若干内側に張り出す器形である。口縁部直下に波状の突帯を有し、それに貝殻による刺突を施している。20は器形は19と同様であるが、口縁部直下に波状の突帯を有し、その下にも突帯を突帯を施し、そこに貝殻による刺突を施す。23は紋様形態は19とほぼ同一であるが、口縁部が波状になっており山形頂部である。そのため頂部では若干内側に張り出す器形である。また口唇部が平坦になっており平坦部に貝殻による刺突を施している。26, 29は口縁部が外反するが、突帯などは有さず、平坦な口唇部に刻みを施すものである。28は器形は26, 29と同様であるが口唇部に一部三角状の張出しを有し、その部分はやや内湾する。30はあまり外反しない器形である。また口縁部の一部に張出しを持ち、その部分と口唇部に深い刺突を施す。また外面に櫛描状の沈線を施す。21, 24, 25, 27, 31～36は口縁部がキャリパー状に内湾する器形である。21, 25は外面に粗い刻みを施す突帯を有する。24はキャリパー状に内湾する器形であるが紋様帯が口縁部下部に掛けて張り出している。紋様帯には刺突を横方向に連続して、三列施している。27は口縁部外面には紋様は施さないが、口唇部に貝殻による刺突を連続して施文する。34は口縁部外面に渦巻状の沈線を規則的に施文している。また胎土には金ウンモが多量に含まれており明らかに他の土器とは異なるものである。37は形式は不明であるが胎土にかっせきを含んでいるため、この時期のものと思われる。これらの土器はおおよそ春日式土器の範疇に含まれるものと思われる。

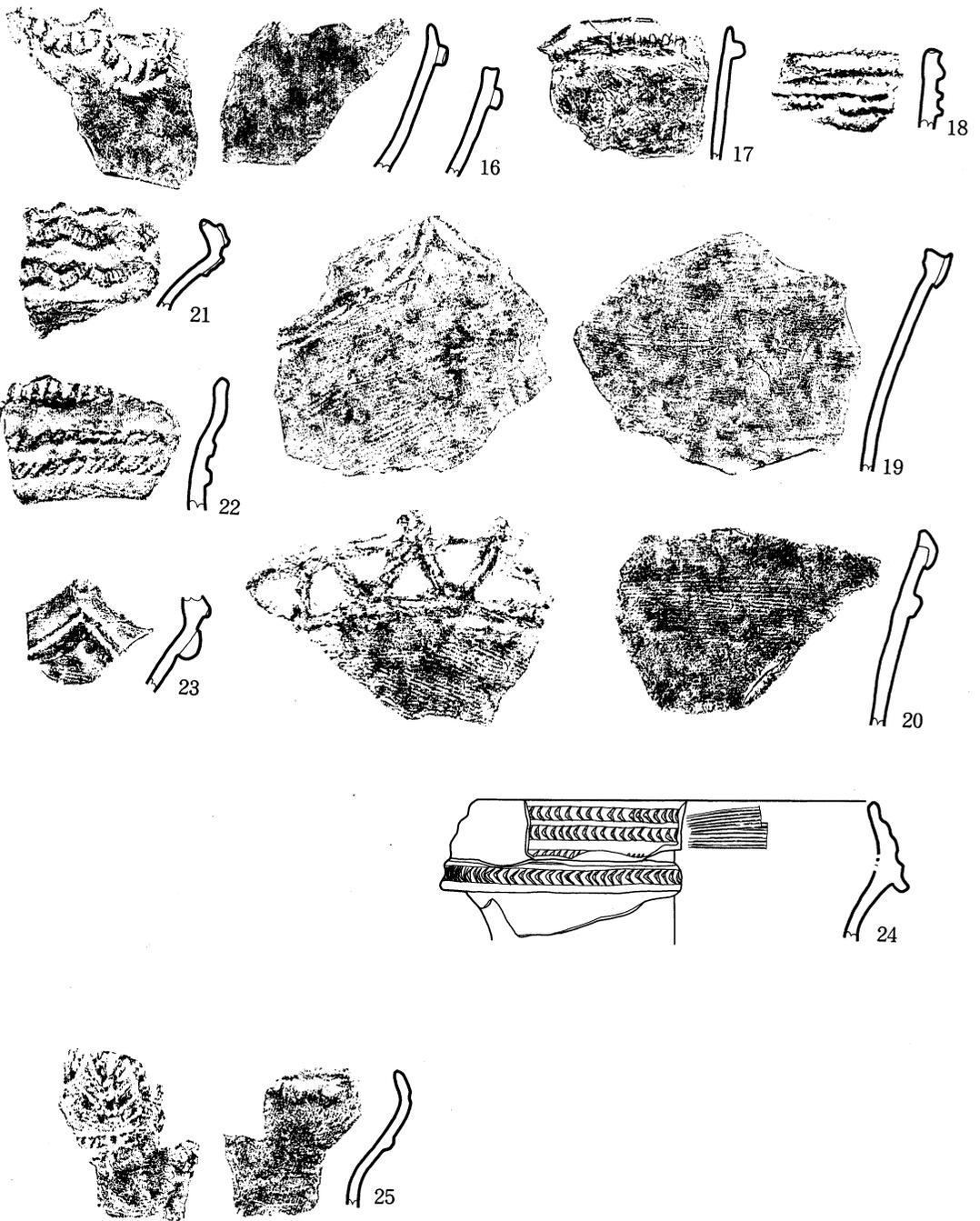
後期の土器（第43図38～第44図53）

後期の土器は小片が少量出土した。この時期の土器は口縁部が若干外反し、肥厚する器形である。38は山形口縁部の頂部で外面に刺突や凹線を幾何学状に施文している。39は外面を貝殻により調整した後、貝殻刺突を斜めに連続して施文し、口縁部紋様帯には押し引きによる凹線文を施す。40は口縁部紋様帯に押し引きによる凹線文と刺突を組み合わせている。42は口縁部紋様帯が狭まり、そこに円形の工具による深い刺突を連続して施文している。40は口唇部が肥厚し、そこに沈線を二条施文している。これらの土器は松山式あるいは市来式に該当するものと思われる。

44～49は頸部にくびれを持ち、口縁部を肥厚させ紋様帯とし、外面に横方向に貝殻により

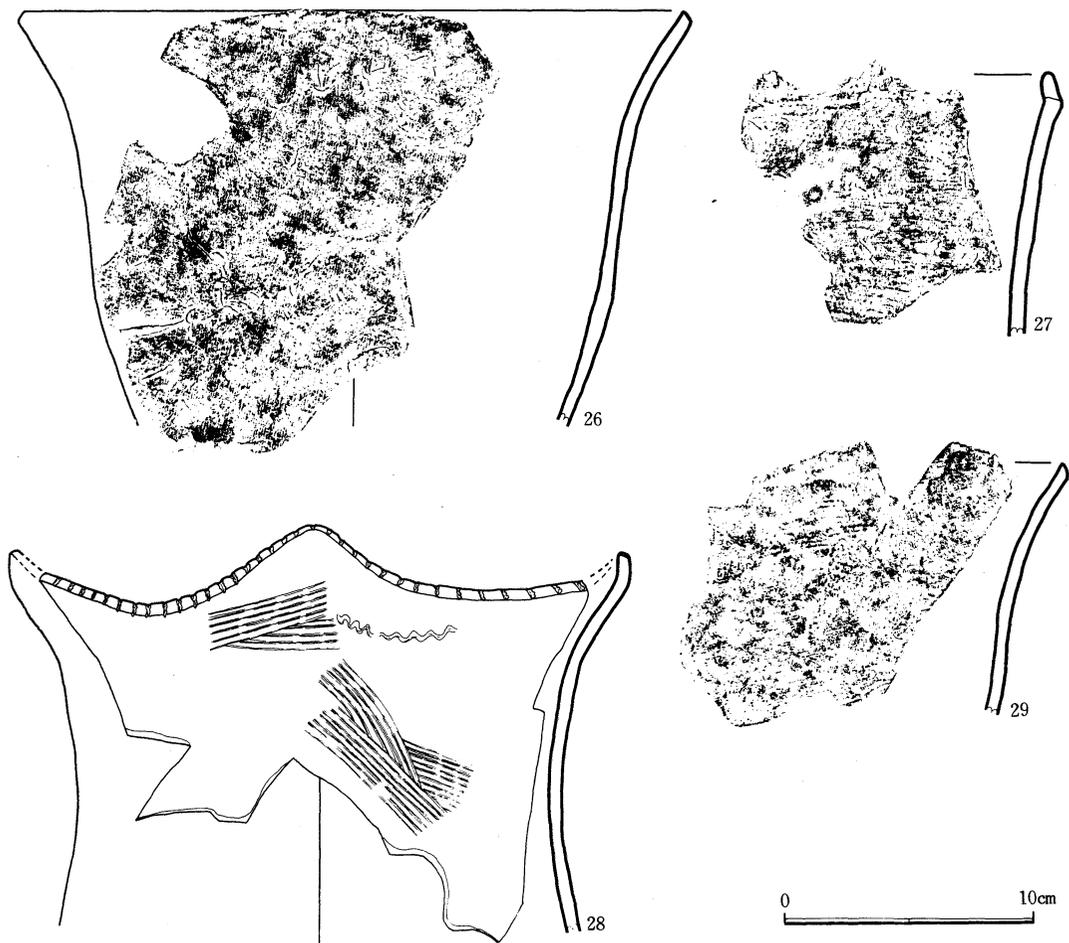


第39图 出土遺物 (2)



0 10cm

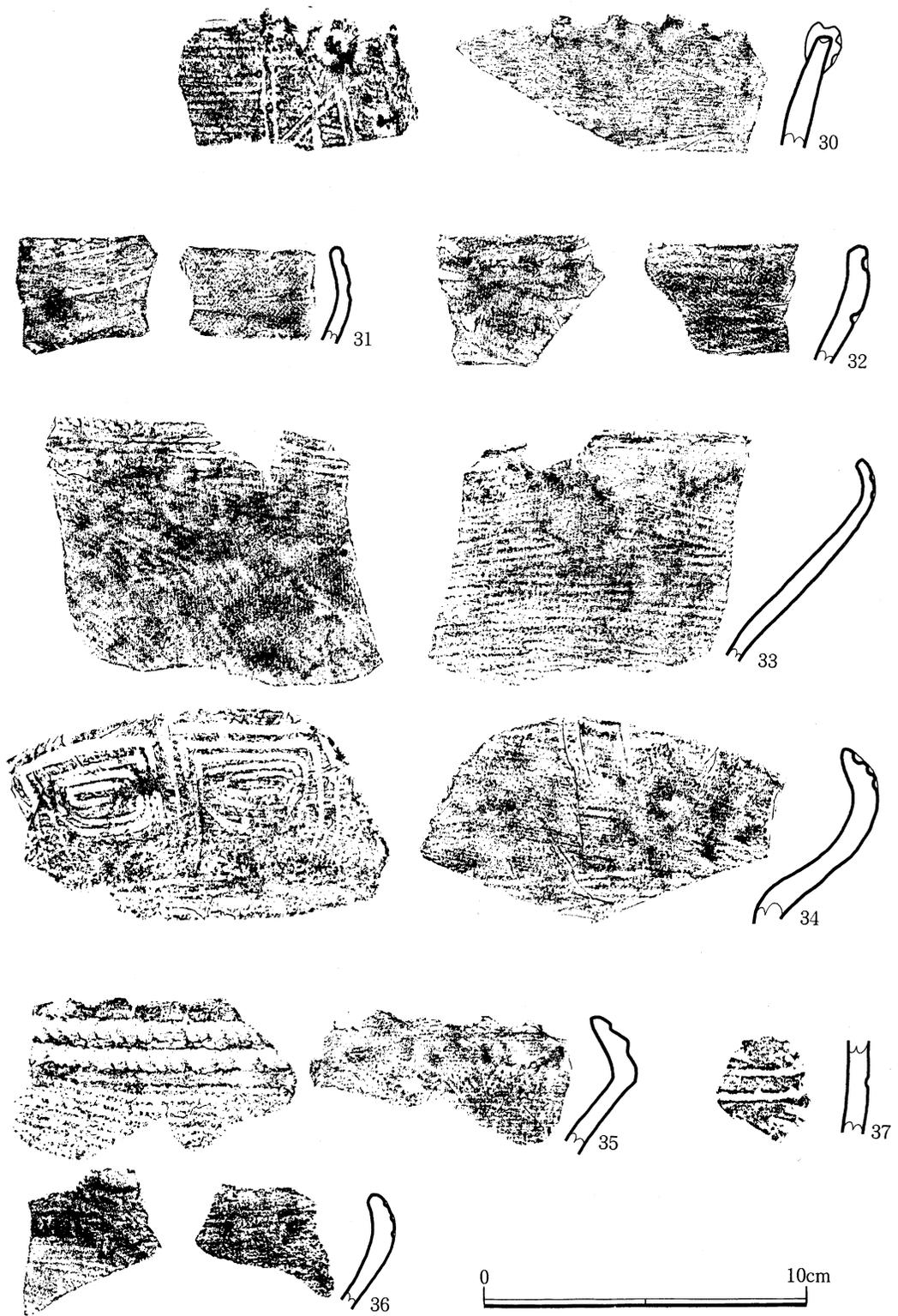
第40图 出土遺物 (3)



第41図 出土遺物(4)

調整を行った後、斜め方向の櫛描文を交互に連続して施す土器である。44は口縁部外面に粘土を貼り付け肥厚させているため、頸部に明瞭な段を持つ。外面には46は胎土に金ウンモを多量に含む。47は胎土が粗く金ウンモや石英、砂粒を多く含む。50は器形は44～49と同様であるが、外面を貝殻で調整した後、工具による短い押し引き状の沈線を交互に施文している。51は口縁部はあまり肥厚しないが頸部にはくびれを持つ器形である。51は山形口縁部の頂部で口縁部は肥厚せず、頸部から口縁部にかけておよそ垂直にたちあがる器形である。外面に幾何学状の浅い沈線を施文している。その他の土器とはややタイプが異なるものである。52は底部から口縁部付近まで残る土器である。底部は平底で張出し、それから胴部にかけて緩やかに広がり頸部にくびれを持つ器形である。小型ではあるが、器形、外面調整、施文方法とも44～49と同じタイプと思われる。53の器形は44～49と同様であるが、外面に凹線を幾何学状に施文している。

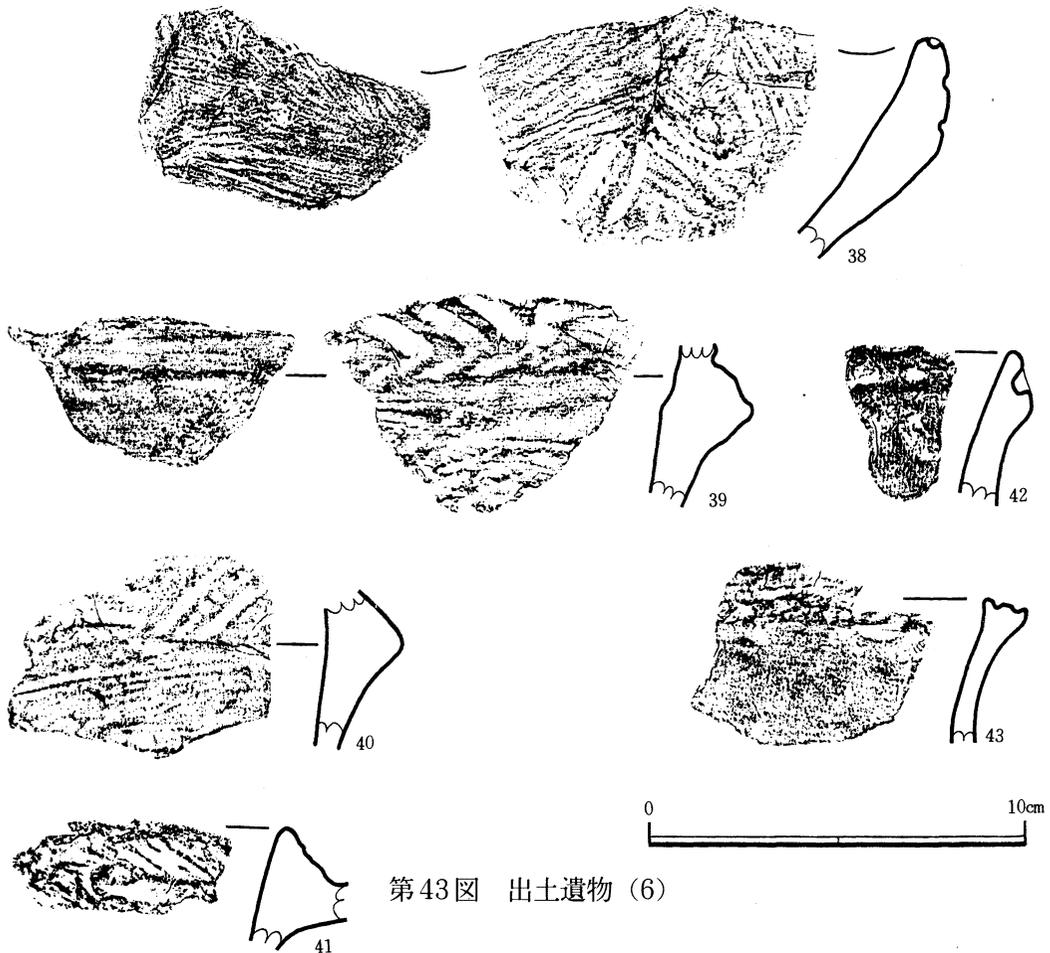
この施文方法の土器はこの他に数点出土している。44～53の土器は大平式土器の範疇に含まれるものと思われる。



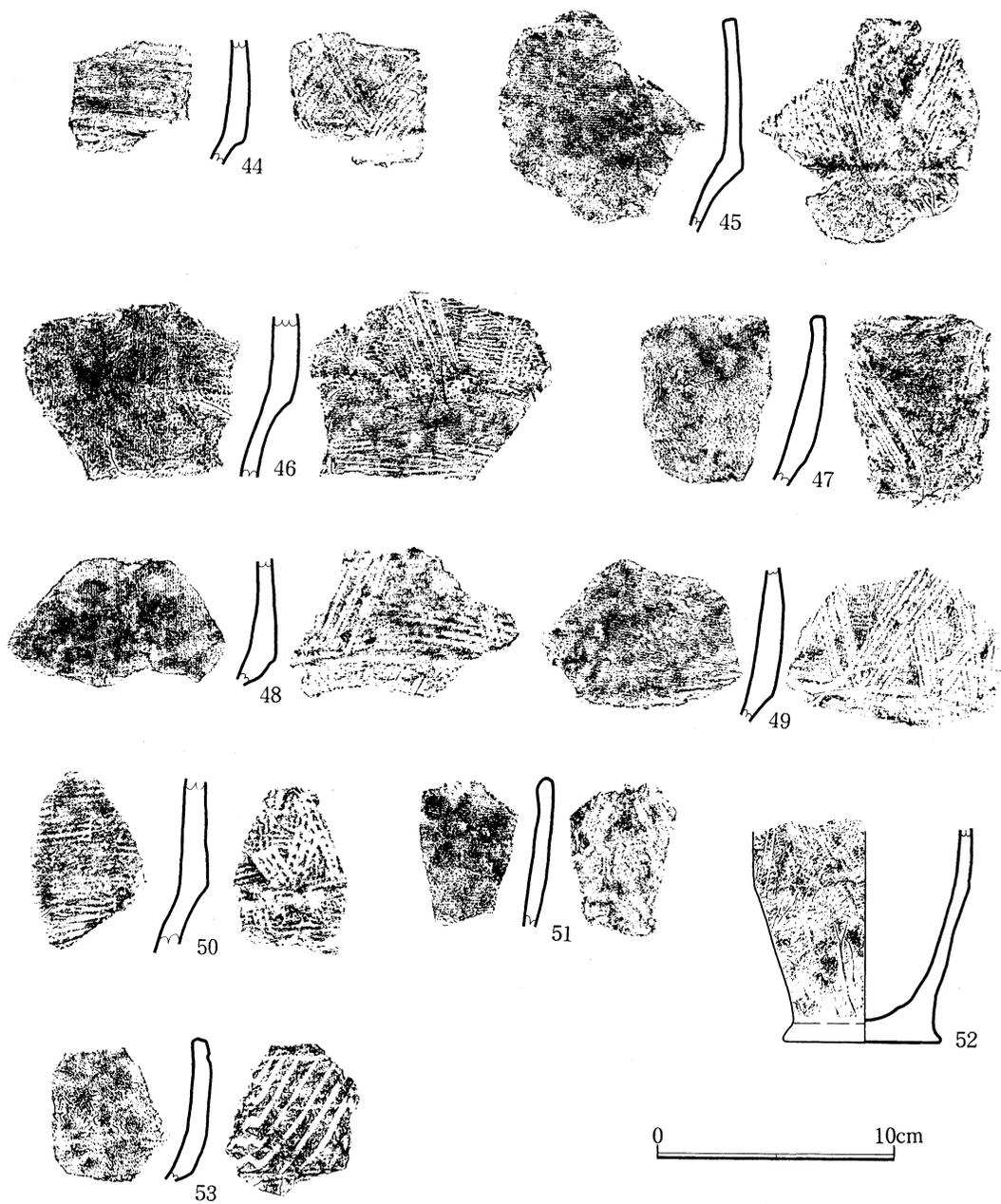
第42図 出土遺物(5)

晩期の土器（第45図54～第48図92）

晩期に該当すると思われる土器は大まかに分けて深鉢（54～78）と浅鉢（79～92）に分けられる。深鉢は二種類に分かれる。口縁部が外反し肥厚するが外面に平坦面を持つ器形のもの（54～57, 69～73）。同じく口縁部は外反し肥厚するが外面に平坦面を持たないもの（58～64, 74, 75）。54～57は口縁部外面に平坦面を持ち、そこに三条から六条の沈線あるいは凹線を施す。内外面ともミガキ調整をしている。69～73は器形は同様であるが無文で、ミガキによる調整をしているが全体的に粗く、粗いナデ仕上げのものもある。58～64は口縁部外面に平坦部を持たず、口唇部が丸くなる器形で全体的に器壁は厚い。口唇部に口唇部に一条から二条の凹線を施し、胴部には二条の凹線の下に三日月文を二つ並べて施文する（62, 66～68）。内外面ともミガキによる調整を施している。74, 75は口縁部先端を著しく肥厚させる器形で、無文である。内外面ともミガキによる調整を施しているが比較的粗い。この他に口縁部が外反するが、口縁部内面に凹線やくびれをもつものもある（76, 77）。これらは無文で内外面ともミガキによる調整を施しているが比較的粗い。78は頸部で屈曲し「く」字状になる器形で、無文である。



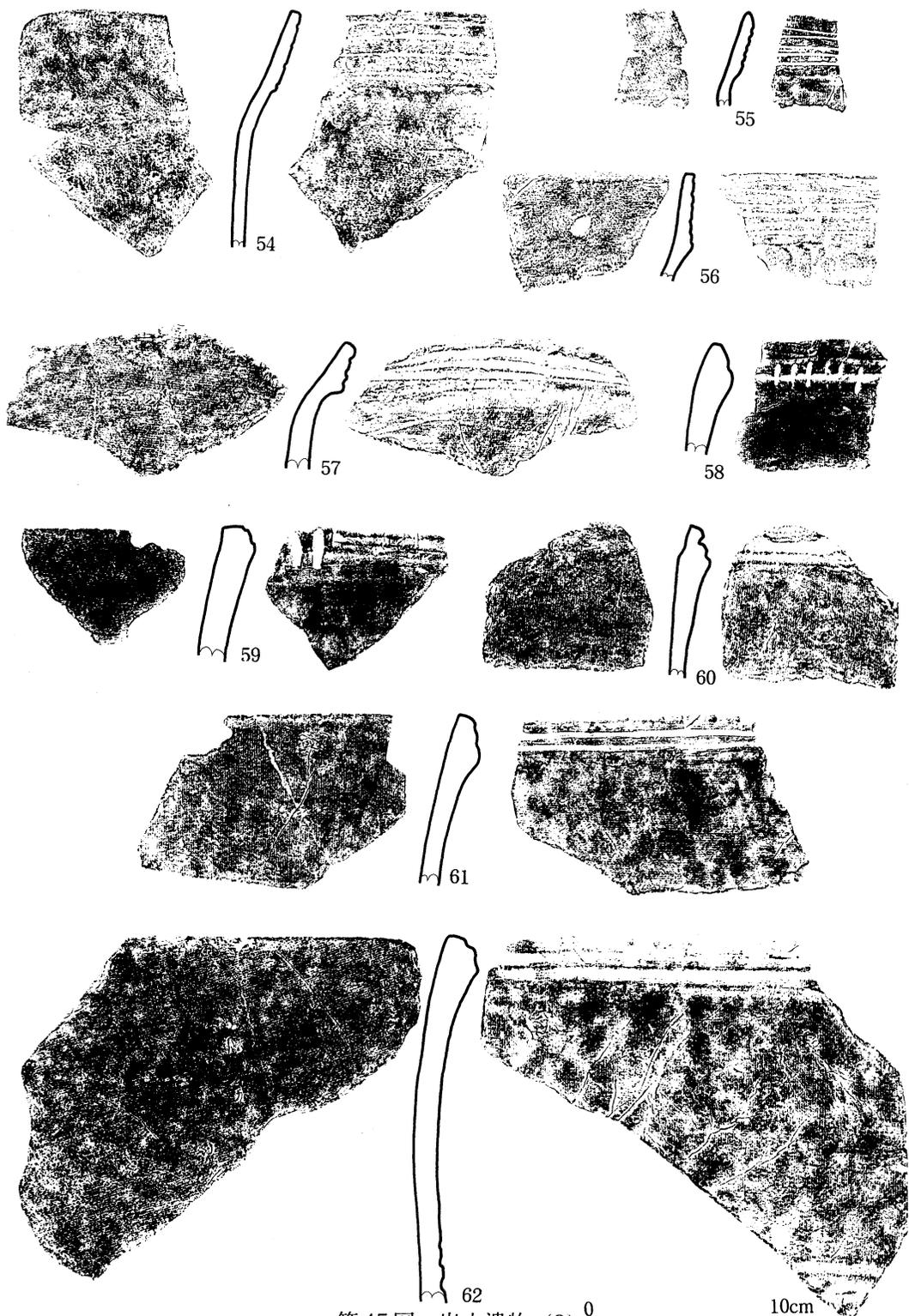
第43図 出土遺物（6）



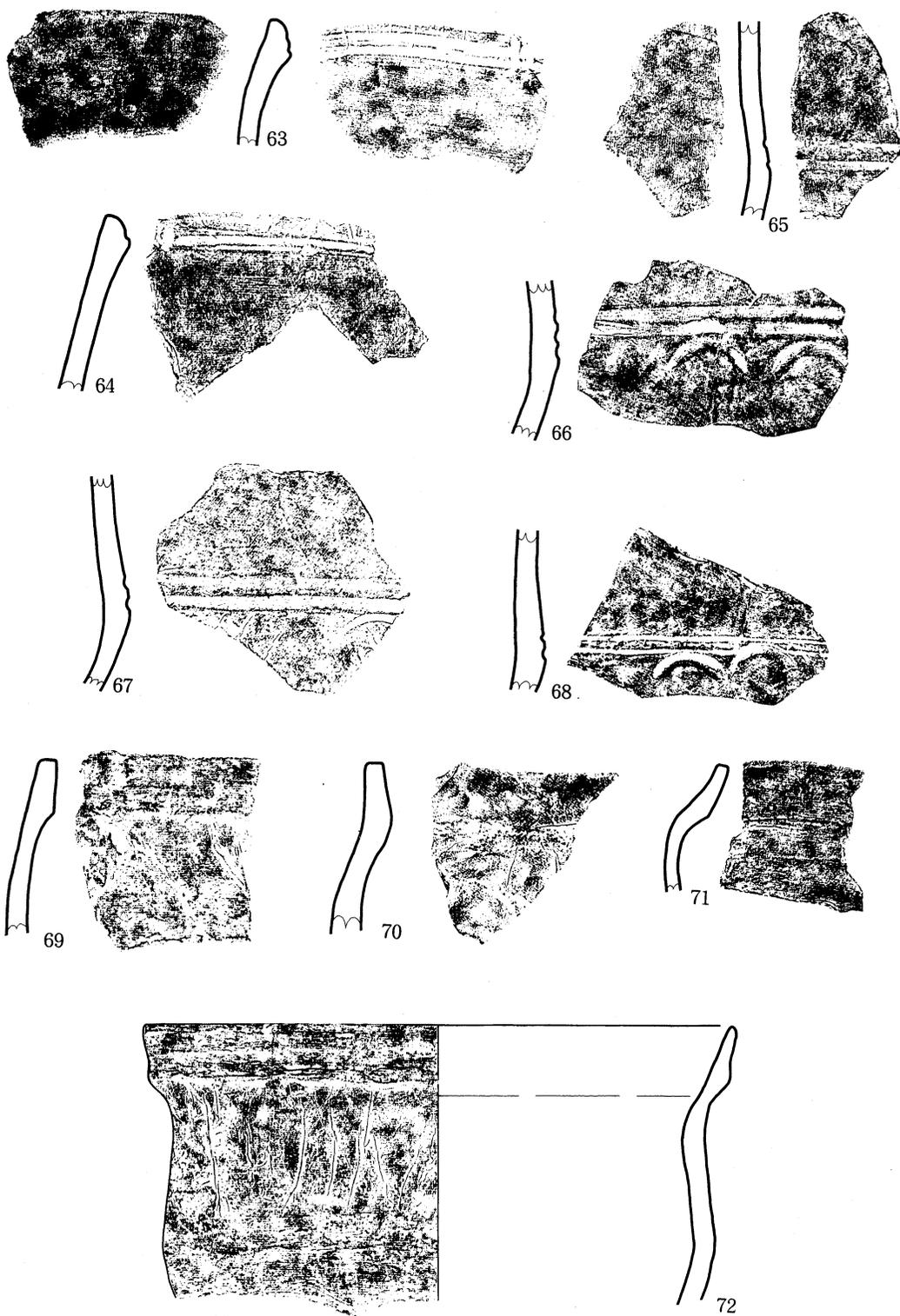
第44図 出土遺物(7)

調整は内外面とも粗いナデ仕上げである。

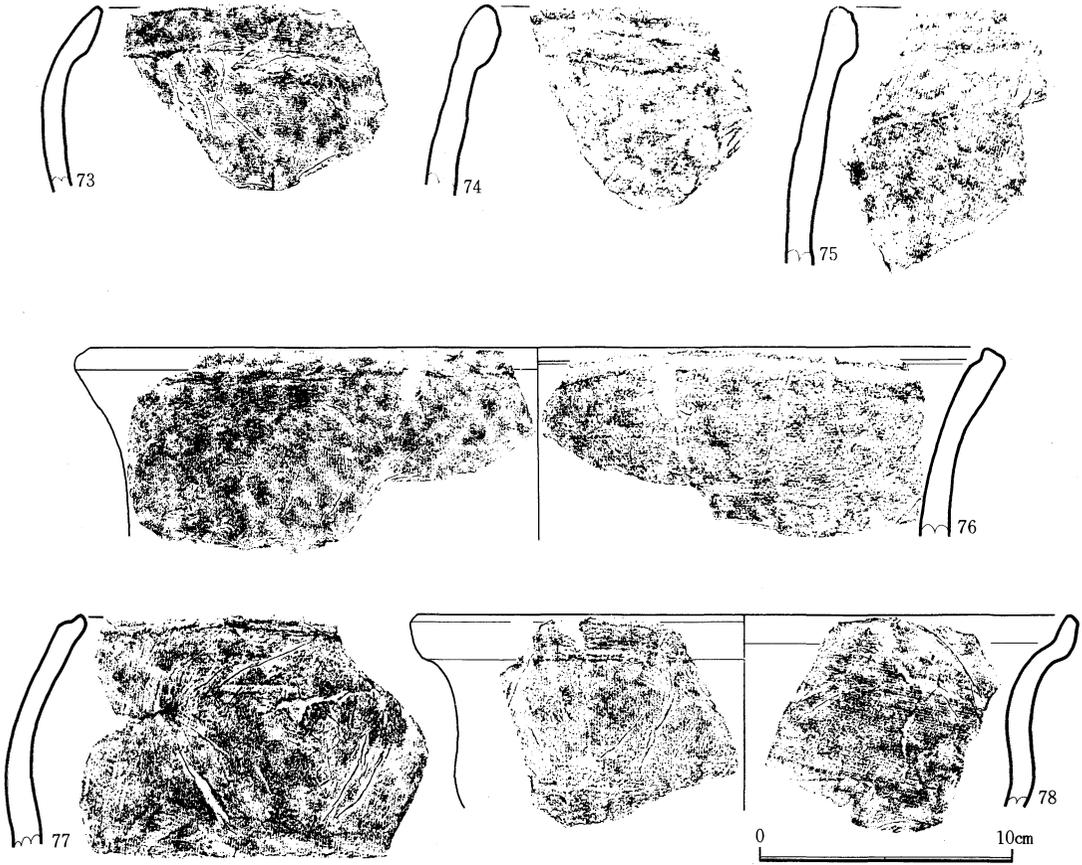
浅鉢は大まかに三種類に分類される。胴部から肩部にかけてやや内湾気味に立ちあがり頸部で屈曲し、口縁部にかけて外反するもの(79~84)。頸部と肩部で屈曲し、肩部から頸部に描けて大きく外反するもの(85~91)。肩部から口縁部にかけて斜め直行ぎみに外反するもの(92)。79~84の器面は横位のミガキ調整である。外面に沈線などはないが、83は頸部が凹線状に屈曲している。84は口縁部先端は丸くまとまらず内外面の調整もやや粗い。85



第45図 出土遺物(8)

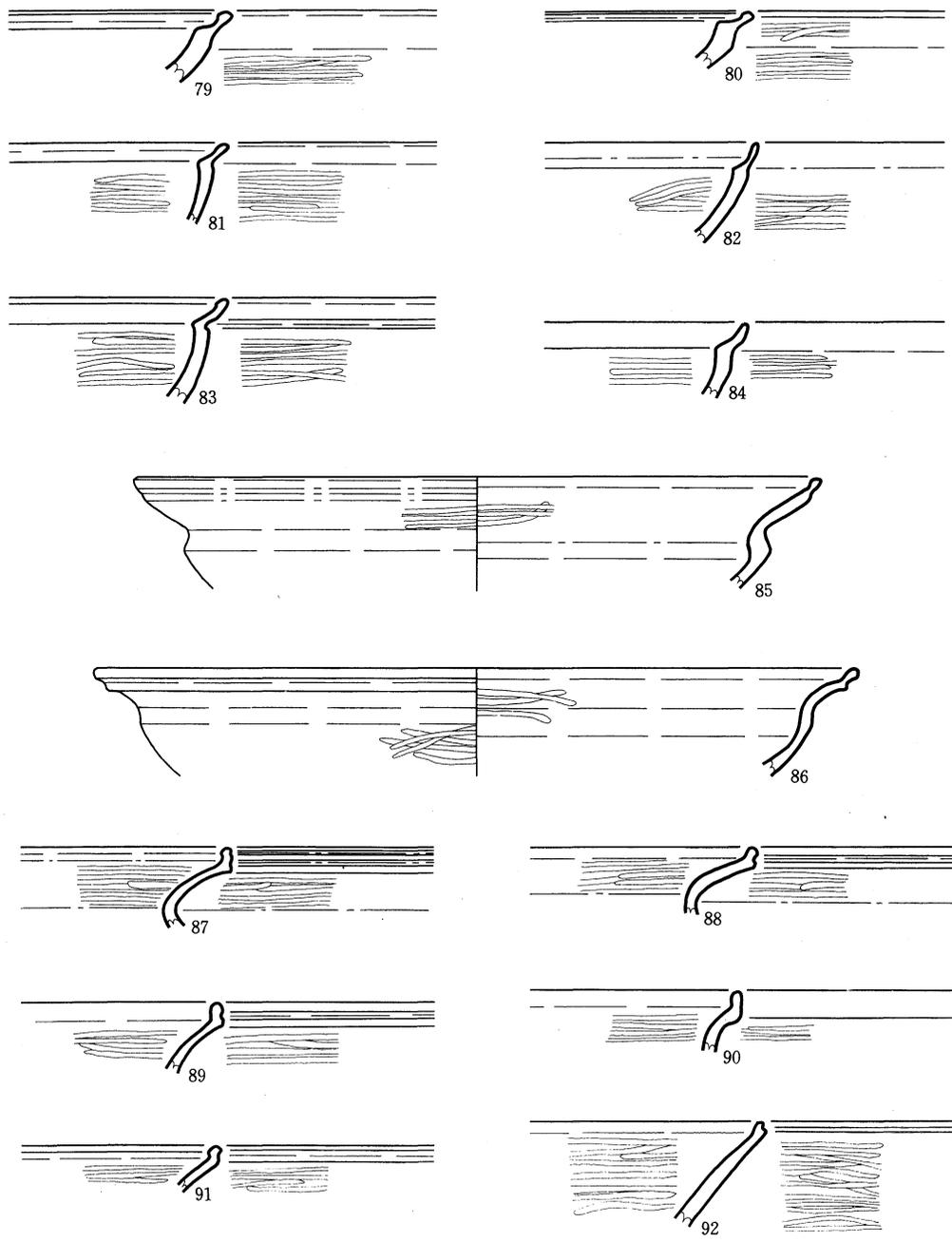


第46图 出土遺物(9)



第47図 出土遺物(10)

~89, 91も横位のミガキ調整であるが、丁寧に調整を施している。87~89, 91は口縁部外面に一条の沈線を施す。90はナデ調整で、外面には沈線などはなく、他の土器と比べると調整は粗い。92は内外面とも横位のミガキである。口縁部に一条の沈線を有する。



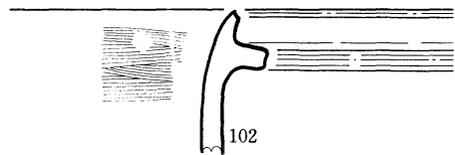
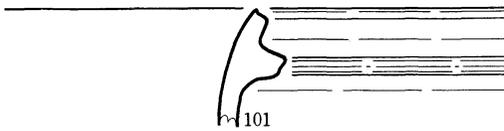
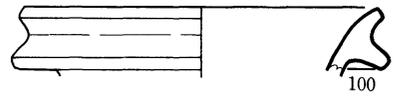
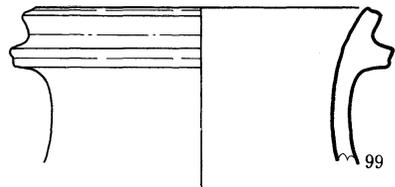
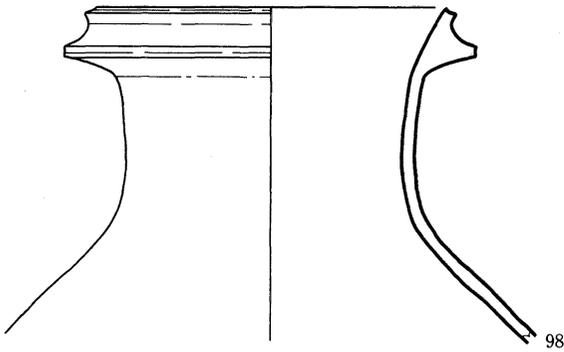
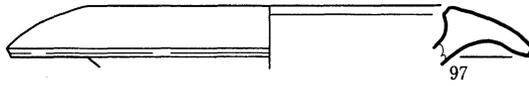
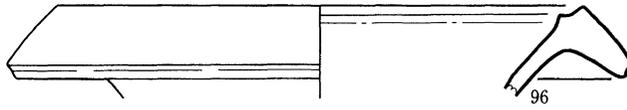
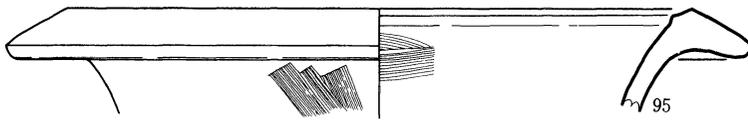
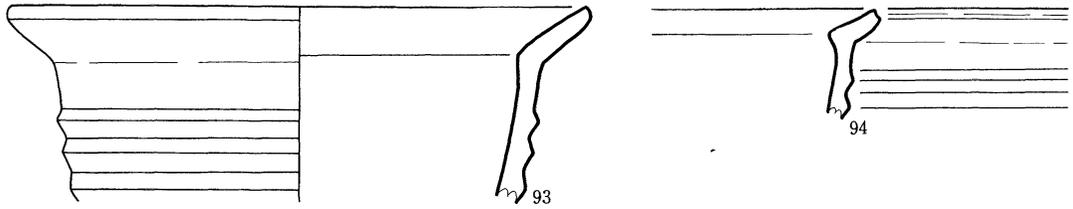
0 10cm 第48図 出土遺物 (11)

第6節 弥生時代の遺物

弥生時代の遺物は調査区域の北西側から出土し、甕形土器、壺形土器、その他の土器に分けられる。

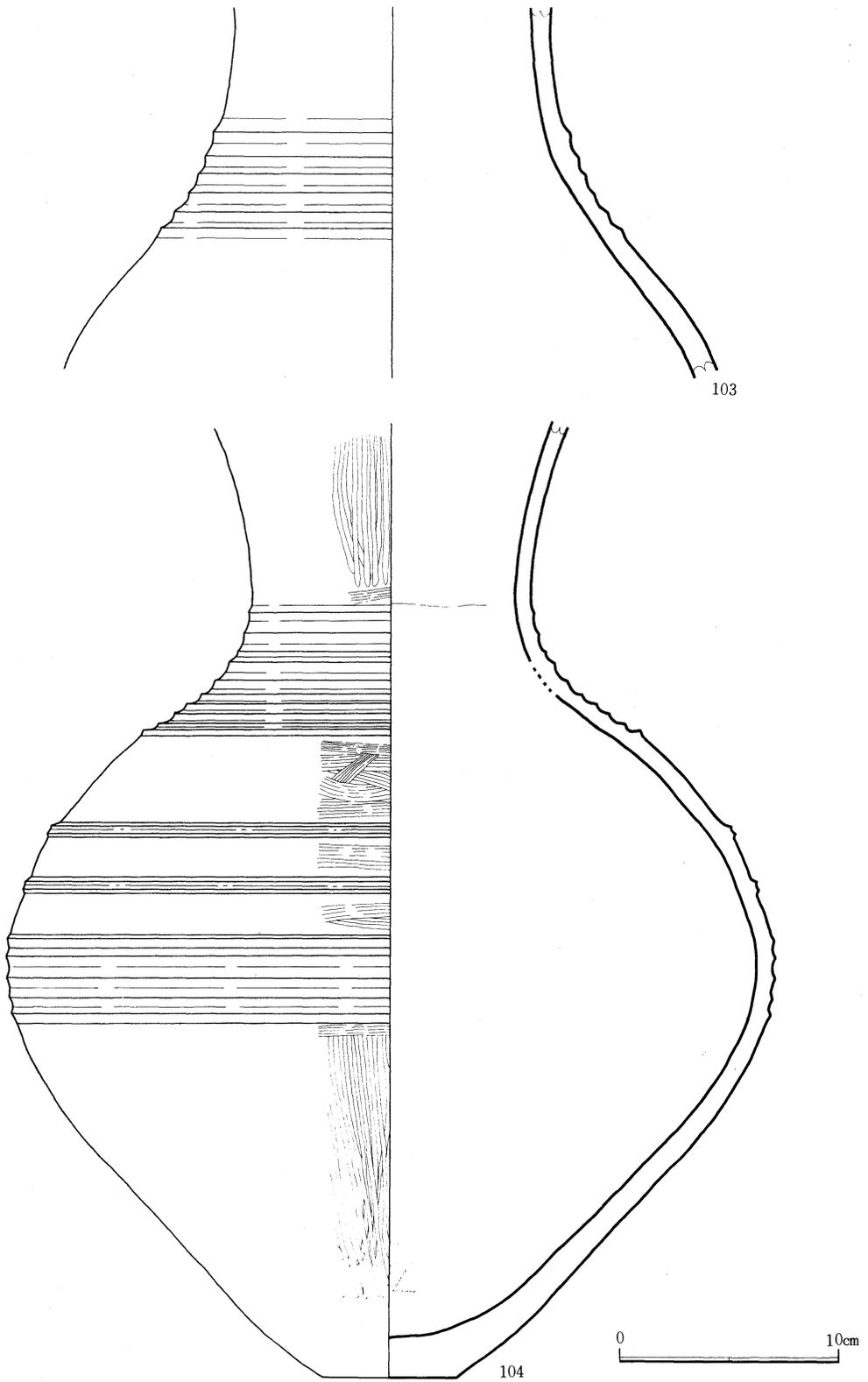
甕形土器 (93, 94)

口縁部は「く」字状になり、内面が張り出す器形である。口縁部下に幾条かの突帯を巡らす。

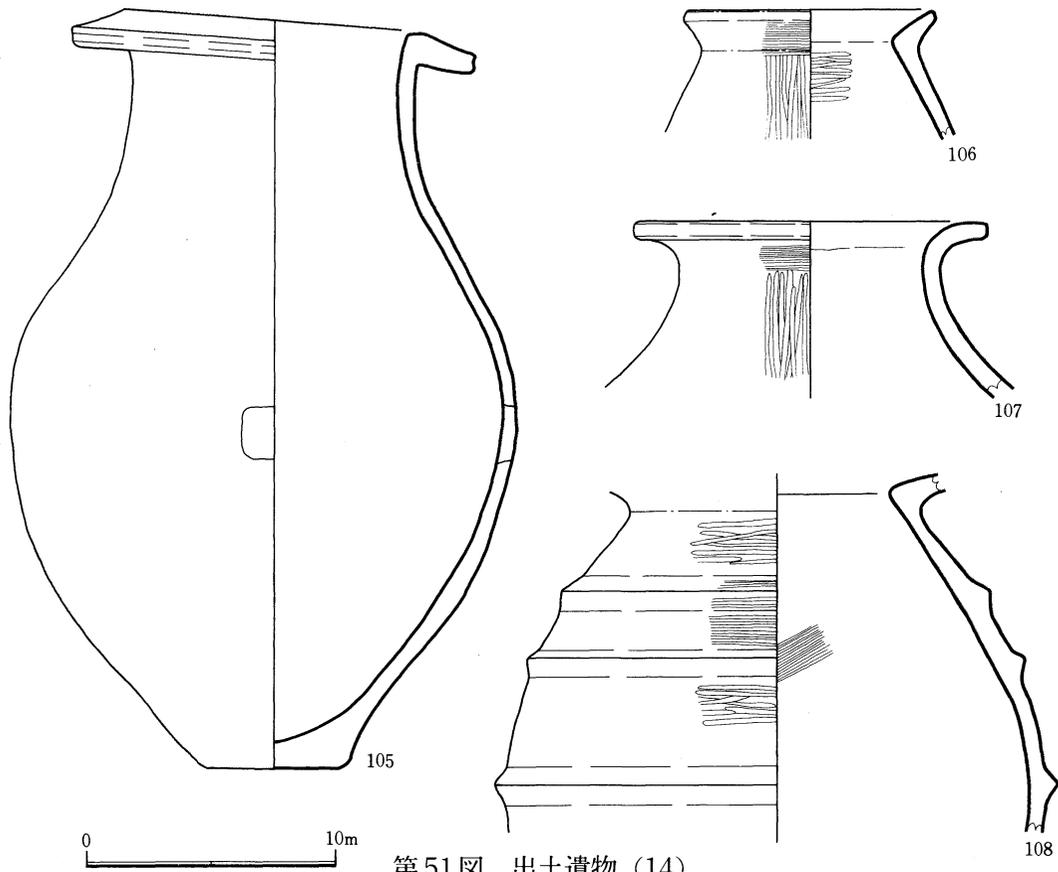


0 10cm

第49図 出土遺物 (12)



第50図 出土遺物 (13)

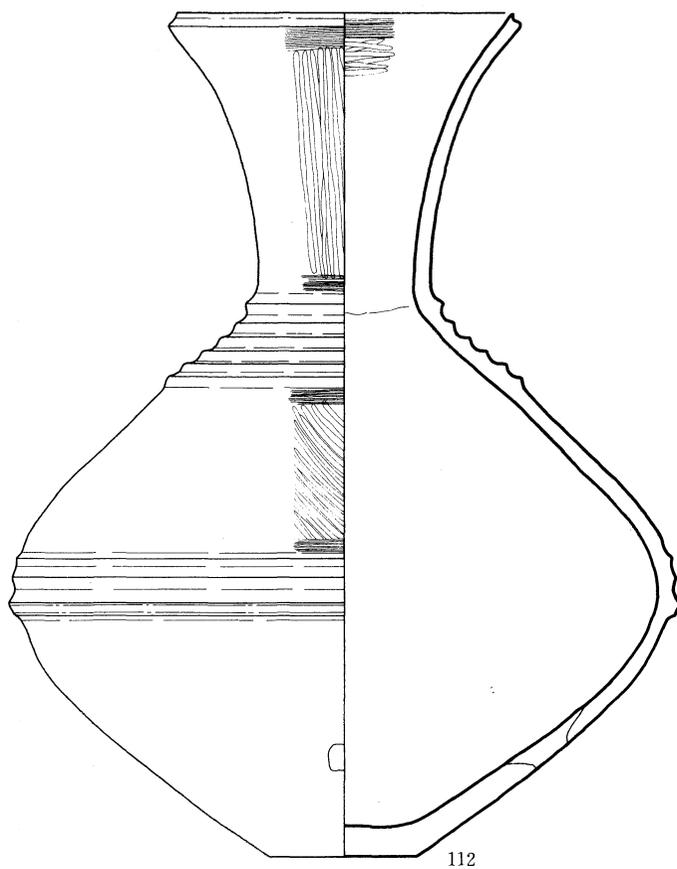
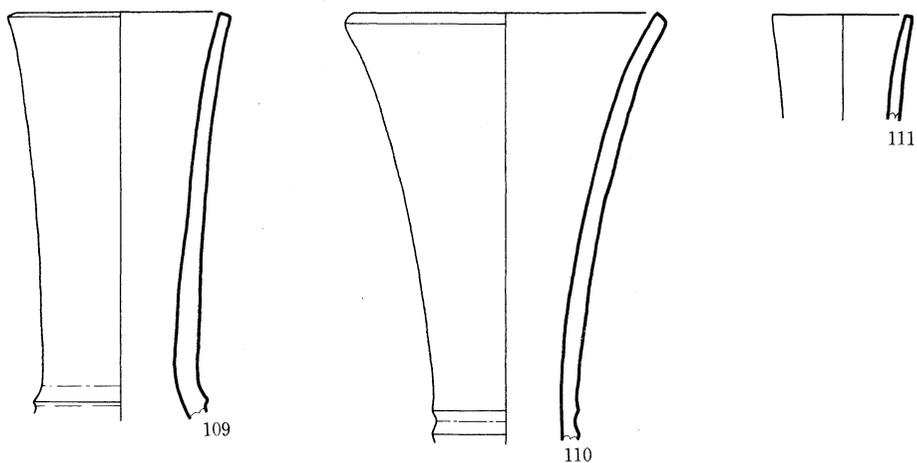


第51図 出土遺物 (14)

90は外面にススが付着している。91は口唇部にくぼみを持つ。今回の調査では甕形土器は二点しか出土していない。

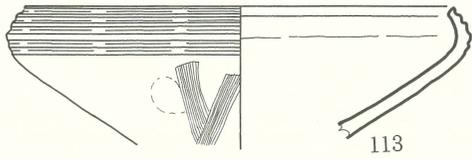
壺形土器 (95~112)

95~97は肩部から頸部にかけて外反し、口縁部は「L」字状になるが、口縁部先端が下がり、内面が張り出す器形である。98~102は二又状口縁あるいは口縁部直下に台形状突帯を巡らす土器である。98は確認調査で出土したもので内外面とも磨滅が著しく調整は不明である。104は底部から頸部付近まで残る土器である。底部は平底で、胴部、肩部に幾条の三角状突帯を巡らし、その間に二条の「M」字状突帯を付する。外面はミガキによる調整ののち、なで調整を施す。105は口縁部が「L」字状になる器形で、完形品である。口縁部が若干傾き、胴部に穿孔をともなう。確認調査で出土した土器である。106は頸部で屈曲するとともに内面が張出す器形である。内外面ともミガキによる調整を施す。107は頸部で締めり口縁部が外反する土器で外面にミガキによる調整を施す。108は胴部から頸部までの土器片で頸部で締めり口縁部が外反する器形である。胴部に三条の三角突帯を巡らす。外面はミガキによる調整の後、なで調整を施す。胎土に金ウンモを多く含み、他の土器胎土とは異なる。109~112は頸部でしまり、直線的に外反する土器で頸部から肩部にかけて三角状突帯を幾

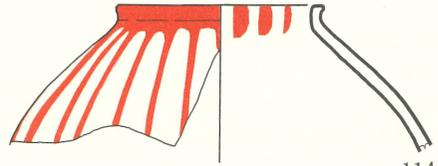


第52図 出土遺物 (15)

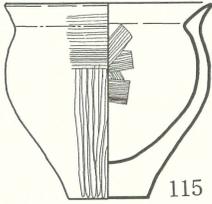




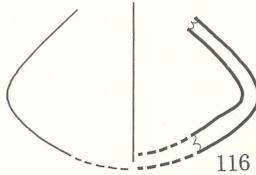
113



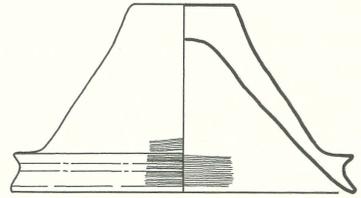
114



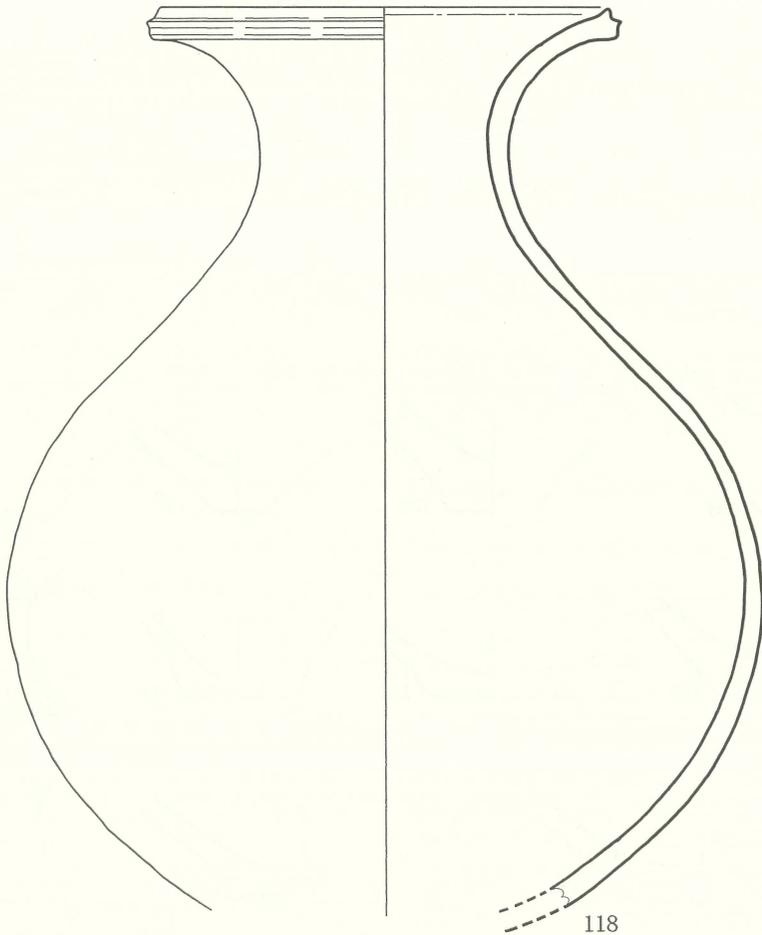
115



116



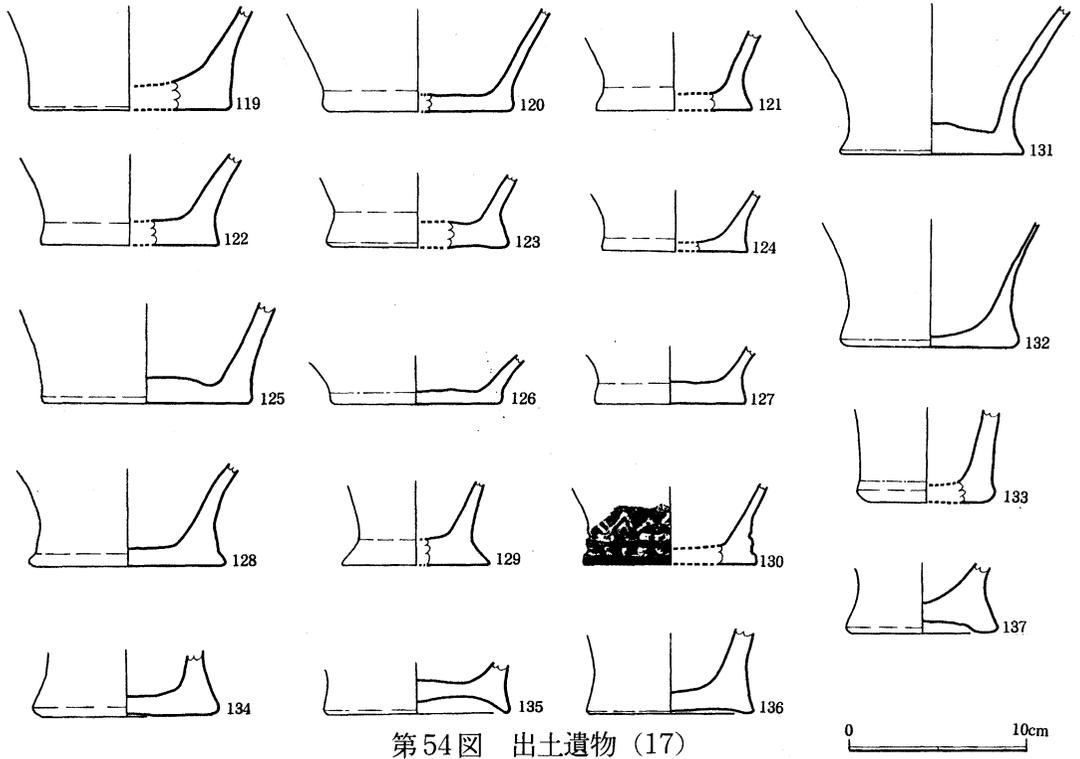
117



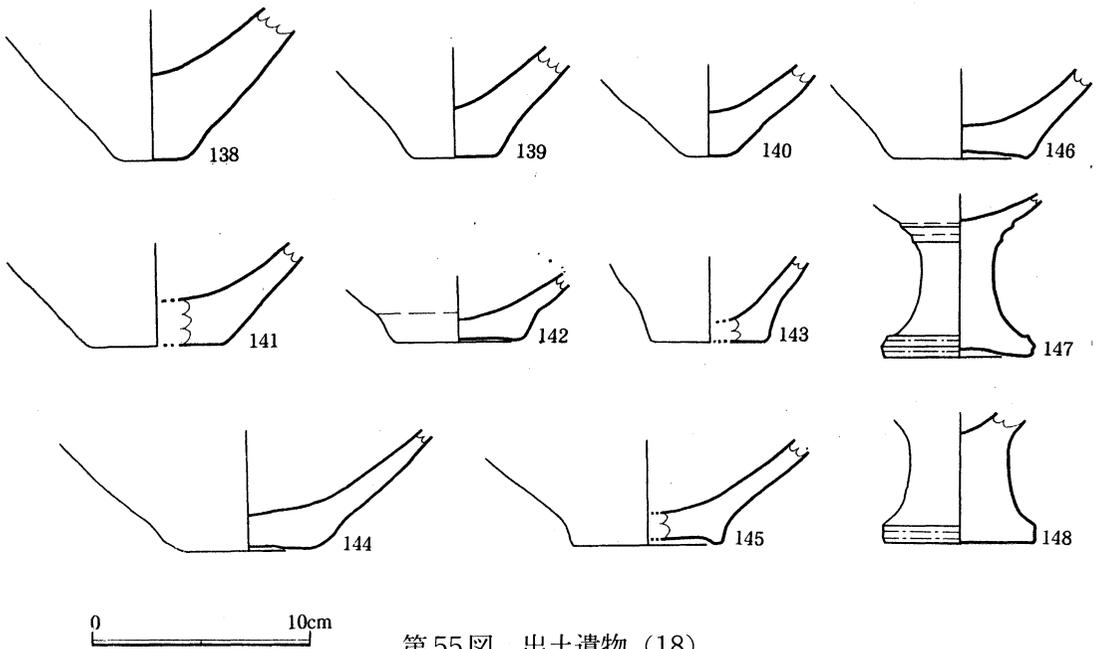
118

0 10cm

第53図 出土遺物(16)



第54图 出土遺物 (17)

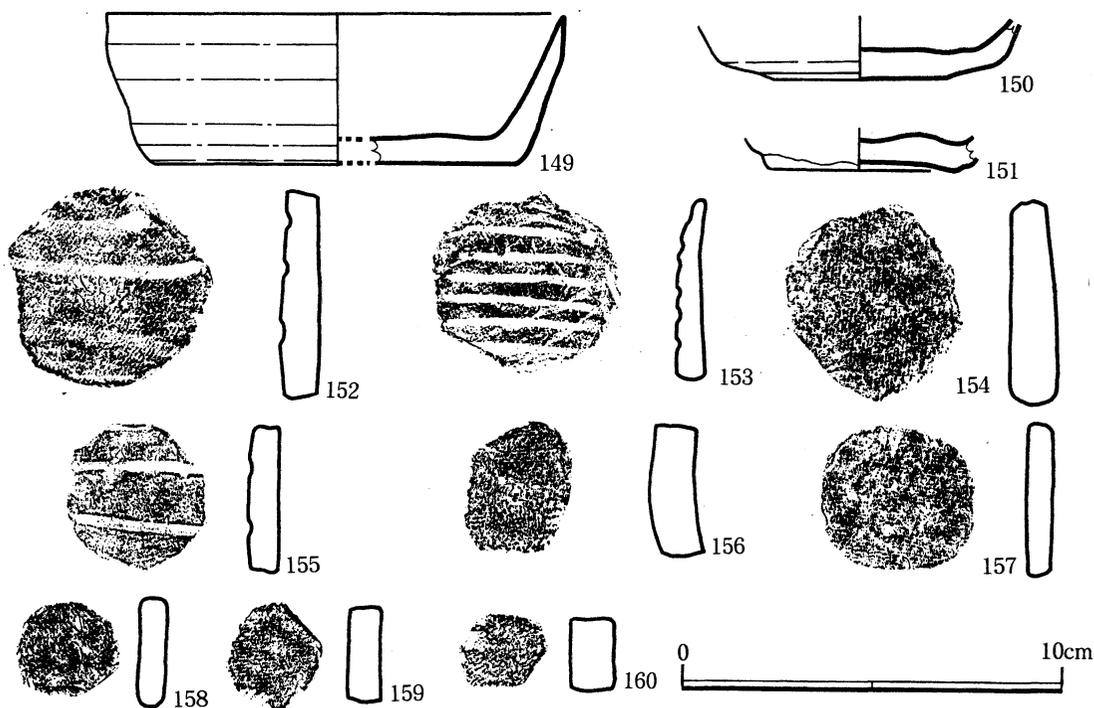


第55图 出土遺物 (18)

条巡らす土器である。112は頸部から肩部にかけて六条の三角状突帯を巡らし、さらに胴部に二条の三角状突帯とその下に一条の「M」字状突帯を巡らす。全体的にあまりスマートではない。外面はミガキによる調整の後、横位のなで調整を施す。底部は平底で、胴部下部に穿孔を伴う。1号土壌から出土した完形品の土器である。

その他の土器 (113~118)

113は胴部が大きく広がり、頸部から口縁部にかけて内湾する器形の高坏形土器片である。口唇部から頸部にかけて四条の凹線文を巡らす。外面に刷毛なで調整を行った後、指によるなで調整を施す。脚部に矢羽根透しを有する高坏形土器と類似する。3号円形周溝墓の周溝埋土から出土した。114は同部が張り、胴部から頸部にかけてしまり、口縁部が直立する壺形土器である。外面になで調整した後、朱を施す。115は底部は平底で同部がやや張り、胴部から頸部にかけて締め、口縁部先端が外反する器形で、頸部内面が張出しを持つ。壺のミニチュアである。外面はミガキ調整の後、なでを施す。内面は刷毛なで調整である。116は小型の壺形土器の胴部である。117は蓋形土器である。つまみ部は平面で口縁部先端上部に貼付突帯を巡らす。内外面ともなで調整である。118は壺形土器である。胴部が丸く張



第56図 出土遺物 (19)

り、胴部から頸部にかけて締め、口縁部が外反する器形である。口唇部上端に三角状突帯を巡らし口唇部にくぼみを持つ。胎土はもろく他の土器の胎土と類似しない。内外面とも磨滅がひどく調整は不明である。1号土壌から112の土器と共伴して出土した。

底部（119～148）

底部は大まかに次のように分けられる。平底で底部先端が張り出すもの（119～134）。上げ底のもの（135～137）。平底あるいは若干上げ底で底部先端が張り出さないもの（138～146）。脚台に近いもの（147，148）。119～137は縄文土器の底部と思われる。130は外面に工具による横位の押し引き状の刺突文を二条巡らし，その上に刺突紋を連続して二条幾何学的に施文している。138～148は弥生土器の底部で，138～146は壺形土器の底部，147，148は甕形土器の底部と思われる。147は底部先端上面に三角状突帯を一条巡らし，脚部上面に三角状突帯を二条巡らす。内外面とも磨滅が著しく調整は不明である。

第7節 中世の遺物（149～151）

中世の遺物は第1号方形周溝墓の周辺から数点出土した。149～151は土師器である。150，151は糸きり底である。149は磨滅がひどいため不明である。

第8節 土製品（152～160）

土製品は調査区域の東側より数点出土した。大きいものは直径4～5で，小さいものでも2はある。152～155は土器口縁部片を利用したものである。153は口縁部上端が一部原形を留めており，そこから丸く削ったものと思われる。156は胴部屈曲部を利用したものと思われる。

表1 土器観察表(1)

番号	層	器種	色調	器面調整		胎土	備考
				内面	外面		
1	VI	深鉢	明褐色	—	—	石英	貝殻刺突
2	VI	深鉢	茶褐色	ナ	デ	砂	貝殻刺突, 凹線文
3	VI	深鉢	暗褐色	ナ	デ	砂, 石英	貝殻刺突
4	VI	深鉢	茶褐色	—	—	石英	
5	VI	深鉢	明褐色	ナ	デ	—	撚糸文, 沈線文
6	VI	深鉢	茶褐色	ナ	デ	貝殻条痕	砂, 石英
7	III	深鉢	明褐色	貝殻条痕のちナデ	貝殻条痕のちナデ	石英	外面にスス附着
8	III	深鉢	暗褐色	貝殻条痕のちナデ	貝殻条痕のちナデ	砂, カクセン	貼付突帯1条
9	III	深鉢	茶褐色	貝殻条痕のちナデ	貝殻条痕のちナデ	石英	貼付突帯1条, 口唇部に刻み
10	III	深鉢	明褐色	貝殻条痕のちナデ	ナ	デ	砂
11	III	深鉢	暗褐色	貝殻条痕	貝殻条痕のちナデ	砂, 石英	貼付突帯1条
12	III	深鉢	明褐色	貝殻条痕のちナデ	貝殻条痕のちナデ	石英	貼付突帯1条, 口唇部に刺突
13	III	深鉢	暗褐色	貝殻条痕のちナデ	貝殻条痕のちナデ	石英, カクセン	口唇部貼付突帯2条
14	III	深鉢	明褐色	貝殻条痕のちナデ	—	砂	貼付突帯1条, 口唇部に刻み
15	III	深鉢	明褐色	貝殻条痕のちナデ	ナ	デ	砂
16	III	深鉢	暗褐色	貝殻条痕のちナデ	ナ	デ	砂
17	III	深鉢	黒褐色	貝殻条痕のちナデ	貝殻条痕のちナデ	—	貼付突帯1条
18	III	深鉢	明褐色	貝殻条痕のちナデ	貝殻条痕のちナデ	砂	貼付突帯2条, 貼付突帯に貝殻刺突
19	III	深鉢	褐色	貝殻条痕のちナデ	貝殻条痕のちナデ	砂, 石英	貼付突帯1条, 貼付突帯に貝殻刺突
20	III	深鉢	暗褐色	貝殻条痕のちナデ	貝殻条痕のちナデ	砂, 石英	貼付突帯2条, 貼付突帯に貝殻刺突, 外面にスス附着
21	III	深鉢	明褐色	ナ	デ	貝殻条痕のちナデ	石英
22	III	深鉢	黒褐色	ナ	デ	石英	貼付突帯2条, 貝殻刺突
23	III	深鉢	明褐色	貝殻条痕のちナデ	貝殻条痕のちナデ	貼付突帯1条,	貼付突帯と口唇部に貝殻刺突
24	III	深鉢	暗褐色	貝殻条痕のちナデ	貝殻条痕のちナデ	石英	凹線文4条, 凹線文に刻み
25	III	深鉢	茶褐色	貝殻条痕のちナデ	貝殻条痕のちナデ	—	貼付突帯
26	III	深鉢	明茶褐色	貝殻条痕のちナデ	貝殻条痕のちナデ	砂	口唇部に刻み
27	III	深鉢	暗褐色	貝殻条痕のちナデ	貝殻条痕のちナデ	砂	
28	III	深鉢	黒褐色	貝殻条痕のちナデ	貝殻条痕のちナデ	口唇部に貝殻刺	突, スス附着
29	III	深鉢	茶褐色	貝殻条痕のちナデ	貝殻条痕のちナデ	砂	口唇部に刻み
30	III	深鉢	暗茶褐色	貝殻条痕のちナデ	貝殻条痕のちナデ	砂	口唇部に刺突, 沈線2条
31	III	深鉢	明褐色	ナ	デ	—	沈線3条, 口唇部に貝殻刺突
32	III	深鉢	明褐色	貝殻条痕のちナデ	貝殻条痕のちナデ	—	沈線2条, 刺突文
33	III	深鉢	黒褐色	貝殻条痕のちナデ	貝殻条痕のちナデ	石英	沈線2条
34	III	深鉢	明褐色	貝殻条痕のちナデ	貝殻条痕のちナデ	砂, 金ウンモ	渦巻状の凹線文
35	III	深鉢	茶褐色	ナ	デ	貝殻条痕のちナデ	砂
36	III	深鉢	暗茶褐色	貝殻条痕のちナデ	貝殻条痕のちナデ	石英	沈線3条
37	III	深鉢	黒褐色	貝殻条痕	—	カッセキ	沈線
38	III	深鉢	暗茶褐色	貝殻条痕	貝殻条痕	砂, 石英	凹線, 刺突
39	III	深鉢	明褐色	貝殻条痕のちナデ	貝殻条痕のちナデ	砂, 石英	凹線, 貝殻刺突
40	III	深鉢	明褐色	貝殻条痕のちナデ	貝殻条痕のちナデ	砂	凹線, 刺突
41	III	深鉢	橙褐色	—	—	石英	凹線, 刺突
42	III	深鉢	明茶褐色	—	ナ	デ	石英
43	III	深鉢	暗茶褐色	貝殻条痕のちナデ	貝殻条痕のちナデ	砂, 石英	口唇部に沈線2条
44	III	深鉢	暗茶褐色	貝殻条痕のちナデ	—	砂, 石英	櫛描文
45	III	深鉢	暗茶褐色	貝殻条痕のちナデ	ナ	デ	砂, 石英
46	III	深鉢	暗茶褐色	貝殻条痕のちナデ	貝殻条痕のちナデ	砂, 石英, 金ウンモ	櫛描文
47	III	深鉢	暗茶褐色	—	貝殻条痕のちナデ	砂, 石英, 金ウンモ	櫛描文
48	III	深鉢	暗茶褐色	貝殻条痕のちナデ	貝殻条痕のちナデ	砂, 石英	櫛描文
49	III	深鉢	暗茶褐色	貝殻条痕のちナデ	貝殻条痕のちナデ	砂, 石英	櫛描文
50	III	深鉢	明褐色	貝殻条痕のちナデ	貝殻条痕のちナデ	砂, 石英	刺突文

表2 土器観察表(2)

番号	層	器種	色調	器面調整		胎土	備考		
				内面	外面				
51	Ⅲ	深鉢	暗茶褐色	貝殻条痕のちナデ	—————	砂, 石英	凹線文		
52	Ⅲ	深鉢	暗茶褐色	貝殻条痕のちナデ	貝殻条痕のちナデ	砂, 石英, 金ウンモ	櫛描文		
53	Ⅲ	深鉢	暗褐色	貝殻条痕のちナデ	—————	砂, 石英	凹線文		
54	Ⅲ	深鉢	暗茶褐色	ナ	デ	砂, 石英, カクセン	沈線4条		
55	Ⅲ	深鉢	明褐色	ミ	ガキ	砂	沈線5条		
56	Ⅲ	深鉢	橙色	ナ	デ	砂, 石英	沈線6条		
57	Ⅲ	深鉢	暗茶褐色	ミ	ガキ	砂, 石英	凹線2条		
58	Ⅲ	深鉢	茶褐色	ミ	ガキ	砂, 石英	凹線2条		
59	Ⅲ	深鉢	暗茶褐色	ミ	ガキ	砂, 石英	浅い凹線1条		
60	Ⅱ	深鉢	茶褐色	ミ	ガキ	砂, 石英	凹線2条		
61	Ⅲ	深鉢	暗茶褐色	ミ	ガキ	砂, 石英	凹線2条		
62	Ⅱ	深鉢	暗茶褐色	ミ	ガキ	砂, 石英	浅い凹線2条		
63	Ⅲ	深鉢	茶褐色	ミ	ガキ	ナ	デ	砂, 石英	2条
64	Ⅲ	深鉢	暗茶褐色	ミ	ガキ	ミ	ガキ	砂	凹線1条
65	Ⅱ	深鉢	暗褐色	ミ	ガキ	ミ	ガキ	砂, 石英	凹線2条
66	Ⅲ	深鉢	暗茶褐色	ナ	デ	ミ	ガキ	砂, 石英	凹線2条, 三日月文
67	Ⅲ	深鉢	黒褐色	ミ	ガキ	ミ	ガキ	砂, 石英	凹線2条, 三日月文
68	Ⅲ	深鉢	暗茶褐色	ミ	ガキ	ミ	ガキ	砂, 石英	凹線2条, 三日月文
69	Ⅱ	深鉢	明褐色	ナ	デ	ナ	デ	石英	
70	Ⅱ	深鉢	明褐色	ナ	デ	ナ	デ	砂, 石英	
71	Ⅱ	深鉢	暗茶褐色	ミ	ガキ	ミ	ガキ	砂	
72	Ⅱ	深鉢	明茶褐色	ミ	ガキ	ミ	ガキ	砂	
73	Ⅱ	深鉢	明褐色	—————	ミ	ガキ	砂, 石英		
74	Ⅲ	深鉢	黒褐色	ナ	デ	ミ	ガキ	砂, 石英	
75	Ⅱ	深鉢	暗茶褐色	ミ	ガキ	ミ	ガキ	砂	
76	Ⅲ	深鉢	明茶褐色	ナ	デ	ナ	デ	砂	
77	Ⅱ	深鉢	暗茶褐色	ミ	ガキ	ミ	ガキ	砂, 石英	
78	Ⅲ	深鉢	明褐色	ナ	デ	ナ	デ	砂	
79	Ⅱ	浅鉢	明褐色	ナ	デ	ナ	デ	砂	
80	Ⅱ	浅鉢	明褐色	ミ	ガキ	ミ	ガキ	砂	
81	Ⅲ	浅鉢	黒褐色	ミ	ガキ	ミ	ガキ	砂	
82	Ⅲ	浅鉢	暗褐色	ミ	ガキ	ミ	ガキ	砂	
83	Ⅱ	浅鉢	暗褐色	ミ	ガキ	ミ	ガキ	砂	
84	Ⅱ	浅鉢	明橙色	ミ	ガキ	ミ	ガキ	砂	
85	Ⅱ	浅鉢	茶褐色	ミ	ガキ	ミ	ガキ	砂, カクセン	
86	Ⅱ	浅鉢	明褐色	ミ	ガキ	ミ	ガキ	砂	
87	Ⅲ	浅鉢	明褐色	ミ	ガキ	ミ	ガキ	砂	沈線2条
88	Ⅱ	浅鉢	明褐色	ミ	ガキ	ミ	ガキ	砂	沈線1条
89	Ⅱ	浅鉢	暗褐色	ミ	ガキ	ミ	ガキ	砂	沈線1条
90	Ⅱ	浅鉢	明褐色	ナ	デ	ナ	デ	砂	
91	Ⅱ	浅鉢	黒褐色	ミ	ガキ	ミ	ガキ	砂, 石英	凹線1条
92	Ⅱ	浅鉢	暗褐色	ミ	ガキ	ミ	ガキ	砂, 石英	沈線1条
93	Ⅱ	甕形土器	暗茶褐色	ヨ	コナデ	ヨ	コナデ	砂, 石英, 金ウンモ	突帯3条, 外面にスス付着
94	Ⅱ	甕形土器	暗橙色	ヨ	コナデ	ヨ	コナデ	砂, 石英, 金ウンモ	突帯2条
95	Ⅱ	壺形土器	明茶褐色	ヨ	コナデ	ヨ	コナデ	砂, 石英, 金ウンモ	内面張出
96	Ⅱ	壺形土器	橙色	ヨ	コナデ	ヨ	コナデ	石英	内面張出
97	Ⅱ	壺形土器	暗橙色	ヨ	コナデ	ヨ	コナデ	砂, 石英, 金ウンモ	
98	Ⅱ	壺形土器	明褐色	ヨ	コナデ	ヨ	コナデ	砂, 石英	二又状口縁
99	Ⅱ	壺形土器	茶褐色	ヨ	コナデ	ヨ	コナデ	砂	二又状口縁
100	Ⅱ	壺形土器	明褐色	ヨ	コナデ	ヨ	コナデ	砂	二又状口縁

表3 土器観察表 (3)

番号	層	器種	色調	器面調整		胎土	備考
				内面	外面		
101	Ⅱ	壺形土器	茶褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	石英, 金ウンモ	二又状口縁
102	Ⅱ	壺形土器	明褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	石英, 金ウンモ	二又状口縁
103	Ⅱ	壺形土器	明褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	砂, 金ウンモ	三角突帯6条
104	3号土壇	壺形土器	茶褐色	ヨコナデ	ミガキ	砂, 金ウンモ	三角突帯16条, 「M」状突帯2条
105	Ⅱ	壺形土器	明褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	砂	胴部に穿孔有り
106	Ⅱ	壺形土器	暗茶褐色	ミガキ	ミガキ	砂, 石英	
107	Ⅱ	壺形土器	明褐色	ヨコナデ	ミガキ	砂, 石英	
108	Ⅱ	壺形土器	茶褐色	————	ヨコナデ	砂, 金ウンモ	三角突帯3条
109	Ⅱ	壺形土器	明褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	砂, 金ウンモ	三角突帯1条
110	Ⅱ	壺形土器	茶褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	砂, 石英, 金ウン	三角突帯2条
111	Ⅱ	壺形土器	明褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	砂, 石英, 金ウン	
112	1号土壇	壺形土器	明褐色	ミガキ	ミガキ	砂, 石英, 金ウン	三角突帯8条, 「M」状突帯2条, 胴部に穿孔有り
113	3号円形	壺形土器	明褐色	ヨコナデ	板状工具	砂, 石英	凹線4条, 周溝埋土から出土
114	Ⅱ	壺形土器	橙褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	砂, 石英	外面に朱有り, 5号円形周溝墓付近より出土
115	Ⅱ	壺形土器	灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	砂	3号方形周溝墓付近より出土
116	Ⅱ	壺形土器	灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	砂	
117	3号形	蓋形土器	明橙	ヨコナデ	ヨコナデ	砂, 石英	周溝埋土より出土
118	1号土壇	壺形土器	黄褐色	————	————	砂, 石英	112と共伴出土
119	Ⅲ	深鉢	明橙褐色	————	貝殻条痕	砂, 石英	
120	Ⅲ	深鉢	明橙褐色	貝殻条痕	貝殻条痕のちナデ	砂	
121	Ⅲ	深鉢	明褐色	貝殻条痕のちナデ	ナデ	砂, 石英	
122	Ⅲ	深鉢	明橙褐色	————	貝殻条痕のちナデ	砂, 石英	
123	Ⅲ	深鉢	明褐色	貝殻条痕のちナデ	貝殻条痕のちナデ	砂	
124	Ⅲ	深鉢	茶褐色	貝殻条痕のちナデ	ナデ	砂, 石英	
125	Ⅲ	深鉢	明褐色	————	貝殻条痕のちナデ	砂, 石英	
126	Ⅲ	深鉢	茶褐色	貝殻条痕のちナデ	貝殻条痕のちナデ	砂, 石英	
127	Ⅲ	深鉢	暗褐色	————	貝殻条痕のちナデ	砂, 石英	
128	Ⅲ	深鉢	暗茶褐色	貝殻条痕	————	砂	
129	Ⅲ	深鉢	明褐色	貝殻条痕のちナデ	貝殻条痕のちナデ	砂	
130	Ⅲ	深鉢	明褐色	貝殻条痕のちナデ	————	砂	
131	Ⅲ	深鉢	明橙褐色	貝殻条痕のちナデ	————	砂	
132	Ⅲ	深鉢	暗褐色	貝殻条痕のちナデ	貝殻条痕のちナデ	砂, 石英	
133	Ⅲ	深鉢	明橙褐色	貝殻条痕のちナデ	貝殻条痕のちナデ	砂, 石英	
134	Ⅲ	深鉢	橙褐色	————	————	砂	
135	Ⅲ	深鉢	明褐色	ナデ	ナデ	砂	
136	Ⅲ	深鉢	橙褐色	貝殻条痕のちナデ	貝殻条痕のちナデ	砂, 石英	
137	Ⅲ	深鉢	灰黄色	貝殻条痕のちナデ	————	砂	
138	Ⅱ	壺形土器	茶褐色	————	ミガキ	砂, 石英	
139	Ⅱ	壺形土器	茶褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	砂, 石英	
140	Ⅱ	壺形土器	明茶褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	砂, 石英	
141	Ⅱ	壺形土器	明褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	砂, 石英	
142	Ⅱ	壺形土器	明褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	砂	
143	Ⅱ	壺形土器	茶褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	砂, 石英	
144	Ⅱ	壺形土器	茶褐色	————	ヨコナデ	砂, 石英	
145	Ⅱ	壺形土器	灰黄色	ヨコナデ	ヨコナデ	砂	
146	Ⅱ	壺形土器	灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	砂, 石英	
147	2号土壇	甕形土器	灰黄色	ヨコナデ	ヨコナデ	砂, 金ウンモ	
148	Ⅱ	甕形土器	茶褐色	————	ヨコナデ	砂, 石英, 金ウン	
149	Ⅱ	土師器皿	明褐色	ヨコナデ	ヨコナデ		糸切り底, 1号方形周溝墓付近より出土
150	Ⅱ	土師器皿	明褐色	ヨコナデ	ヨコナデ		糸切り底, 1号方形周溝墓付近より出土

表4 土器観察表(4)

番号	層	器種	色調	器面調整		胎土	備考
				内面	外面		
151	Ⅱ	土師器皿	橙 色	ヨ コ ナ デ	ヨ コ ナ デ	砂	糸切り底, 1号方形周溝墓付近より出土
152	Ⅲ	土製品	明 褐 色	—————	—————	砂	
153	Ⅲ	土製品	茶 褐 色	ナ デ	—————	砂, 石英	
154	Ⅲ	土製品	明 褐 色	—————	ナ デ	砂, 石英	
155	Ⅱ	土製品	茶 褐 色	貝殻条痕のちナデ	—————	砂	
156	Ⅱ	土製品	暗茶褐色	—————	—————	砂	
157	Ⅲ	土製品	茶 褐 色	貝殻条痕のちナデ	—————	砂, 石英	
158	Ⅲ	土製品	茶 褐 色	—————	—————	砂, 金ウンモ	
159	Ⅲ	土製品	暗茶褐色	—————	ミ ガ キ	砂	
160	Ⅲ	土製品	明 褐 色	—————	—————	砂, 石英	

第5章 まとめ

1. 遺構について

京ノ峯遺跡で検出された遺構は、第IV層において、円形周溝墓20基、方形周溝墓4基、祭祀土壇3基、地下式横穴墓9基、溝状遺構2基が確認された。その内弥生時代の遺構と考えられるのが、円形周溝墓20基と3号方形周溝墓、4号方形周溝墓、祭祀土壇3基である。京ノ峯遺跡の円形周溝墓、方形周溝墓には以下の特徴が認められる。

- ・墳丘を持たない。・陸橋部がない。
- ・一周溝墓に対して一主体部である。
- ・周溝埋土に火山灰層が認められる。
- ・主体部及び周溝内に副葬品をとまなわない。
- ・周溝墓が互いに切り合わない。

これらの点を考慮しながら特に円形周溝墓、方形周溝墓について若干の考察を行いたい。

円形周溝墓、方形周溝墓は家族墓的要素が認められ、一周溝墓に対して二～三の主体部を有する場合が一般的である。本遺跡においては一周溝墓に対して一主体部である。周溝内に複数の主体部を持つものは一例もみられない。また、主体部及び周溝内に副葬品をとまなわず、周溝墓のすぐ近くの土壇よりしている。本遺跡からは祭祀土壇と思われる遺構は3基しか検出されなかったが、それ以外にも周溝墓の付近にまとまった状態で祭祀に使用したと思われる壺形土器が出土している。さらに、周溝墓が互いに切り合った状態での出土はないことも大きな特徴である。これらのことから本遺跡の周溝墓群は比較的短い時期に集中して埋葬された可能性が高い。またこれらの周溝墓の周溝埋土より共通して検出される火山灰層は胴部に穿孔を持つ長頸壺が出土した1号祭祀土壇にもみられるため、このことが周溝墓の時期を決定する大きな要素になっている。この他に18号円形周溝墓、3号方形周溝墓、4号方形周溝墓の周溝と地下式横穴墓が切り合っていたが、切り合い関係は確認できなかった。特に18号円形周溝墓においては周溝埋土の残りがよく切り合い関係が確認できないということは18号円形周溝墓を2号地下式横穴墓が切っている可能性も残る。しかし、円形周溝墓が仮りに地下式横穴墓より新しいということになれば、周溝近辺に出土する祭祀に用いたと思われる弥生時代の壺形土器がまとまった状態で出土し、周溝内の遺物が小片ではあるが弥生時代の壺形土器に限られ、他の時代の遺構がみられない事は説明できなくなる。また、出土した弥生土器が祭祀に転用した壺形土器がほとんどで、甕形土器が極端に少ないことからこの遺跡が墓域であったことが伺える。また、周溝墓の主体部に木棺などを用いた跡が7号円形周溝墓と4号方形周溝墓以外に見られないのは、この遺構がアカホヤ層を掘込んで造られたものであるため、壁が比較的しっかりしており木棺などを用いる必要があまりなかったものと思われる。

今回の調査で中世の方形周溝墓が2基検出されたが、中世の方形周溝墓と弥生時代の方形周溝墓は形態が明らかに異なる。周溝のプランが中世のものになるに従って、正方形に近くなり、周溝断面形も弥生時代のものは「U」字形になるのに対し、中世のものは台形状を

呈す。また主体部においても中世のものはほぼ正方形で深くまで掘込んでいる。これは中世の棺桶の形態によるものと考えられる。

地下式横穴墓にもいくつかの特徴がみられる。竪坑に対し玄室が小さく横長の形態を呈す。また、8号地下式横穴墓などはかなり小さいため小児用であったと思われる。また、蓋石として加工しやすい凝灰岩を用いている。副葬品などはみられない。

2.土器について

土器は大きく分けると、縄文土器と弥生土器に分けられる。縄文土器は中期の土器と晩期の土器がほとんどであった。中期の土器は春日式土器と呼ばれるもので、京ノ峯遺跡に隣接する前谷遺跡においても多数の出土例がある。今回は前谷遺跡出土の春日式土器との簡単な比較を行いたいと思う。前谷遺跡出土の春日式土器器形は「胴部がやや張り頸部はわずかにしまる。口縁部は外開きから内湾してキャリパー状を呈し……………」である。それに対し京ノ峯遺跡出土の春日式土器は内湾してキャリパー状を呈するものも数点あるが、多くはキャリパー状を呈さず、口縁部が外反し口唇部に貼付突帯施し肥厚させるか、あるいは口縁部に貼付突帯を波状に施すものが多い。隣接する遺跡においてこの違いは注目すべきである。今後検討しなければならない。

以上遺構や土器について簡単にまとめてみたが、今回の調査で京ノ峯遺跡から弥生時代の円形周溝墓、方形周溝墓群が検出されたことは、この遺跡が前谷遺跡や前谷B遺跡などの弥生人の墓域であったと考えることができる。弥生時代の円形周溝墓や方形周溝墓が大隅半島のつけねに位置する松山町から発見されたことは今後の検討が必要だが、他の発掘調査であまり対象になりにくい丘陵状の地形の調査が進めば、今後出土例が出てくるものと思われる。この問題は京ノ峯遺跡だけではなく、今後の出土例から総合的に判断しなければならないと思われる。

参考文献

- 『前谷遺跡』松山町埋蔵文化財発掘調査報告書(1) 1986.3 松山町教育委員会
『前谷B遺跡』松山町埋蔵文化財発掘調査報告書(4) 1990.3 松山町教育委員会
重山 護「串間市大平出土の縄文式土器」『九州考古学』第1号 1957.5 九州考古学会



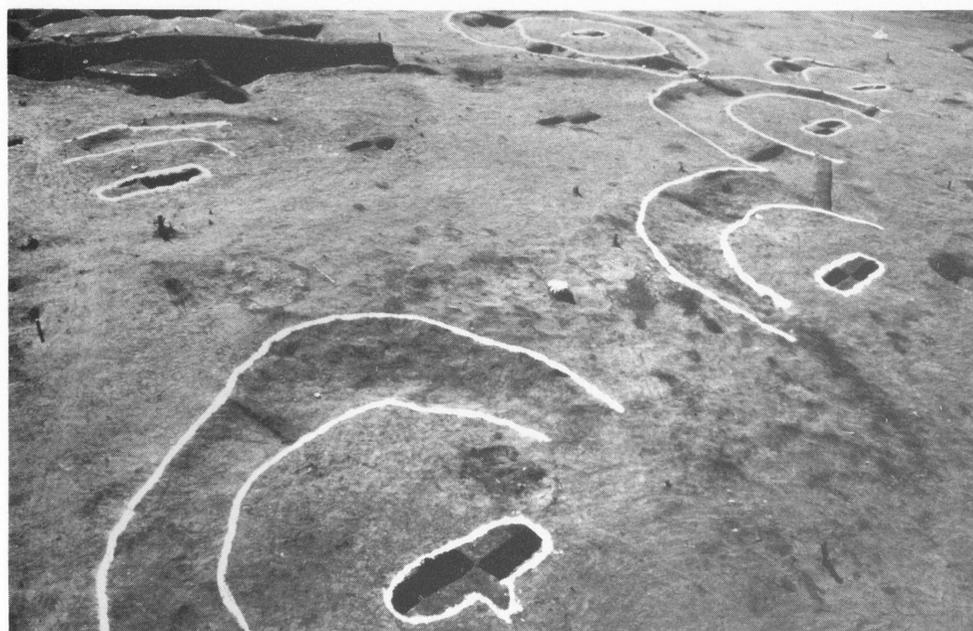
図版1 京ノ峯遺跡遠景



図版2 京ノ峯遺跡全景



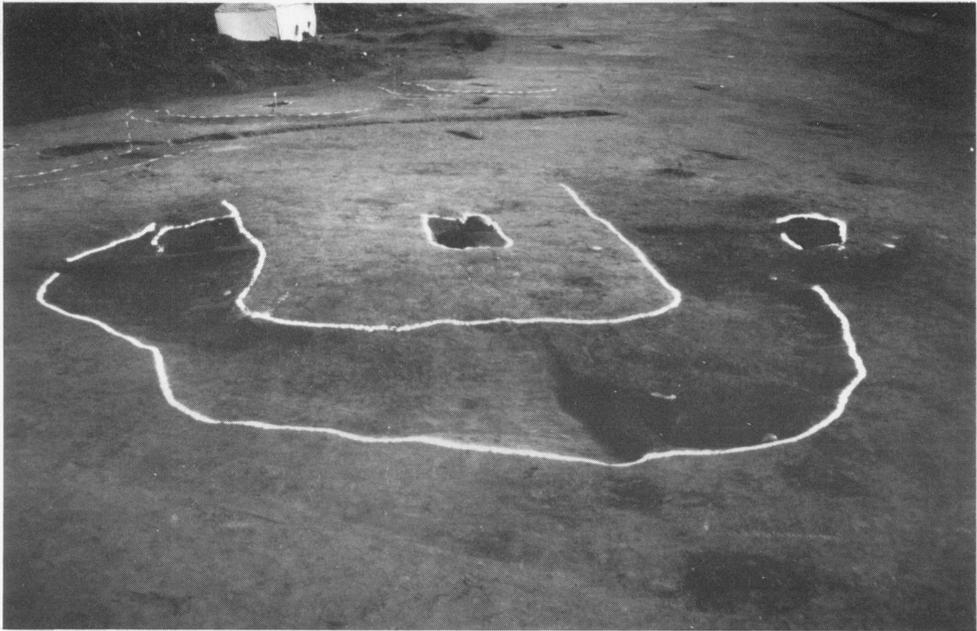
図版1 3号円形周溝墓検出状況



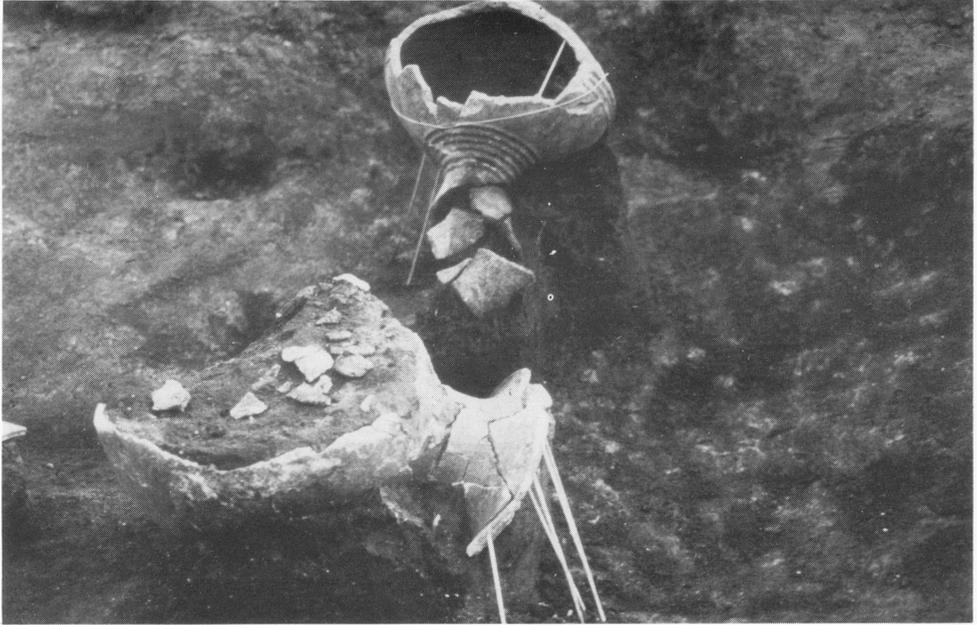
図版4 円形周溝墓群検出状況



図版5 13円形 1号・2号方形周溝墓検出状況



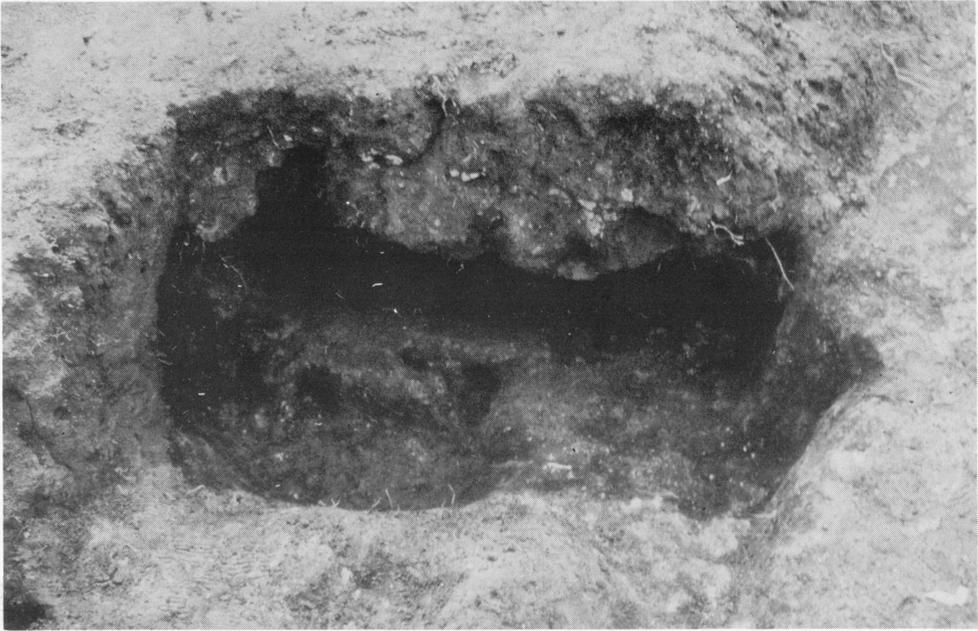
図版6 4号方形周溝墓検出状況



図版7 1号祭祀土壇内出土遺物検出状況



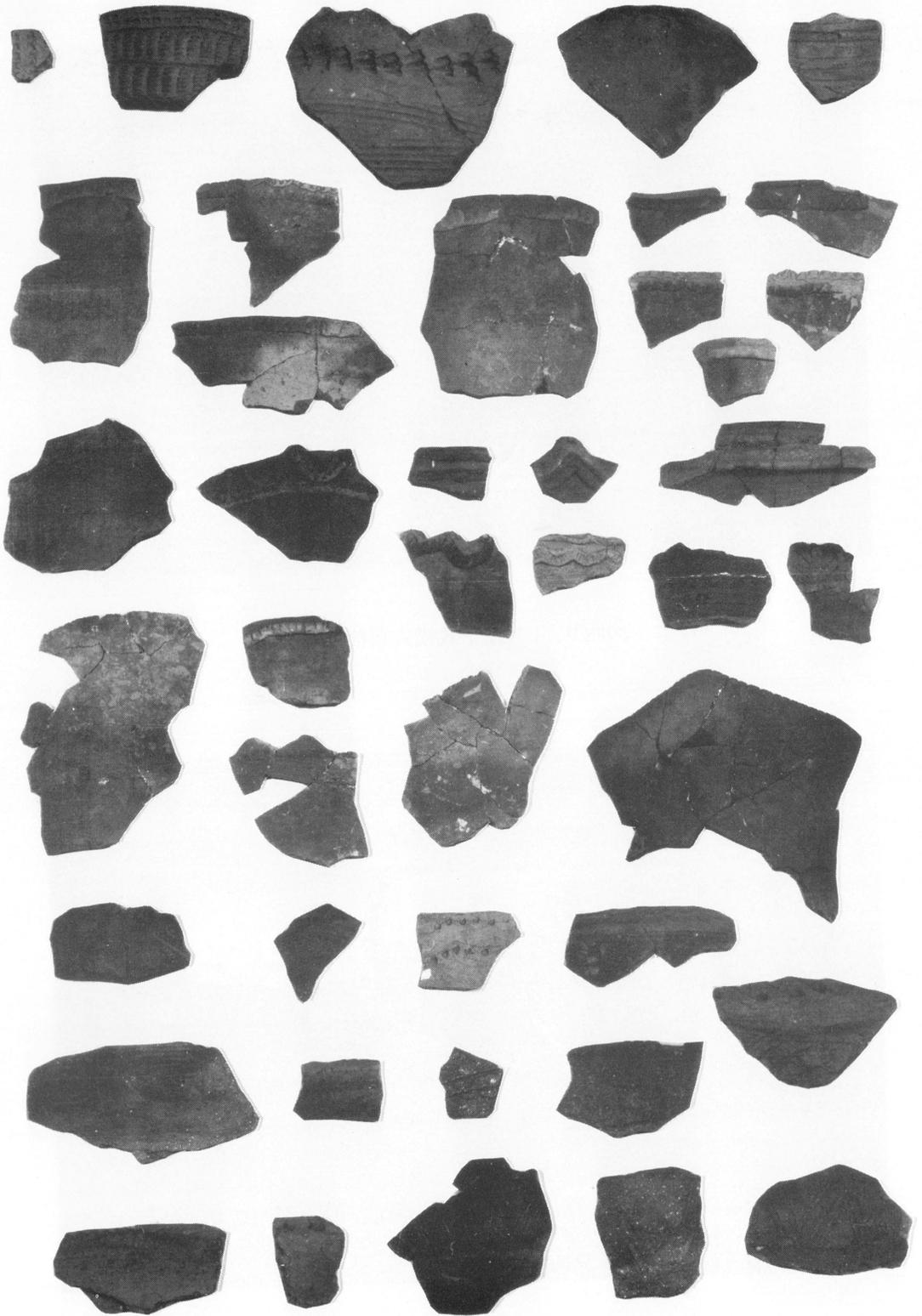
図版8 1号地下式横穴墓検出状況



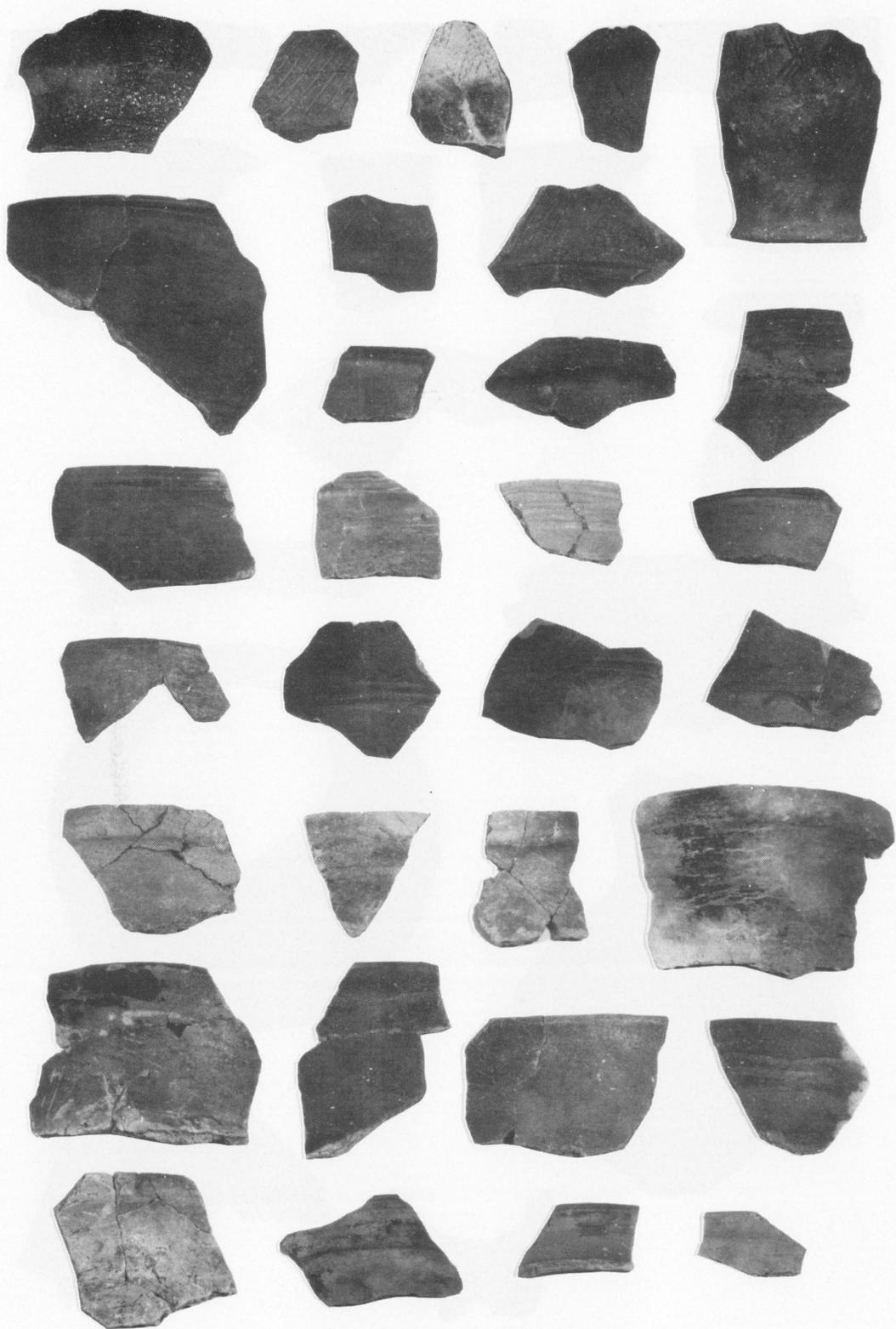
图版9 1号地下式横穴墓检出状况



图版10 8号地下式横穴墓检出状况



图版11 出土遺物 (1)



图版12 出土遺物 (2)



图版 13 出土遺物 (3)



图版14 出土遺物(4)

松山町埋蔵文化財発掘調査報告書 (7)

京之峯遺跡

1993年3月

発行 松山町教育委員会

〒899-76

鹿児島県曾於郡松山町新橋268

印刷 志布志新生社印刷